宮城県多賀城跡調査研究所年報 2020

多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所

序　　文

多賀城跡調査研究所は、昭和44（1969）年の設立以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を解明し、その成果をもとに環境整備事業を実施することで、特別史跡多賀城跡附寺跡が多くの来訪者にとって親しみやすい憩いの場となる史跡公園を目指しています。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大により、当研究所事業でも少なからず影響を受け、発掘調査事業では感染予防の徹底、健康管理を行った上で調査を実施しました。

発掘調査事業は第11次５ヵ年計画の２年目の調査として、多賀城政庁地区北方における遺構の分布と内容の把握を目的とする第94次調査を実施しました。調査対象地は政庁跡の北側隣接地で、調査の結果、西部では古代の大型掘立柱建物跡の一部や11世紀後半頃の遺物が多く含まれる土坑を発見し、また東部では沢の範囲を確認することができました。建物跡の詳細は明らかにできませんでしたが、政庁北側の使われ方を理解する上で貴重な成果となりました。

環境整備事業は、宮城県の総合計画である『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置づけられ、「多賀城創建1300年記念重点整備事業」として、多賀城創建1300年記念の年となる令和６（2024）年に向けて実施しています。政庁南面地区を対象とした第11次５ヵ年計画の初年度の事業としても位置づけられ、今年度は城前官衙の遺構表示等を行いました。今後も、管理団体である多賀城市と連携して着実に推進していきたいと考えています。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた皆様方に対し、所員一同深く感謝を申し上げます。

令和３年３月

宮城県多賀城跡調査研究所

所　長　高橋　栄一

目　　次

Ⅰ.調査研究事業の計画 …… 1
Ⅱ.第94次調査 …… 2
　1.調査の目的と経過 …… 2
　2.A区の調査成果 …… 11
　3.B区の調査成果 …… 41
　4.総括 …… 60
Ⅲ.漆紙文書の追加報告 …… 74
Ⅳ.付章 …… 77
　1.関連研究・普及活動 …… 77
　2.組織と職員 …… 80
　3.沿革と実績 …… 81

図版目次

図版1　調査区の位置 …… 3
図版2　第94次調査対象地と周辺の調査 …… 4
図版3　政庁地区北方の調査 …… 5
図版4　調査地点空中写真 …… 9
図版5　94次調査・公開の様子 …… 10
図版6　A区遺構配置図 …… 12
図版7　A-1区　遺構図 …… 15
図版8　A-1区　遺構写真 …… 16
図版9　A-2区西　遺構図(1) …… 18
図版10　A-2区西　遺構図(2)・写真 …… 19
図版11　A-2区西　遺構図(3) …… 20
図版12　A-2区中央　遺構図(1) …… 24
図版13　A-2区中央　遺構図(2)・写真 …… 25
図版14　A-2区南　遺構図(1) …… 28
図版15　A-2区南　遺構図(2) …… 29
図版16　SK3420・3421断面図 …… 30
図版17　A-2区南　遺構写真 …… 31
図版18　SK3421土坑出土遺物(1) …… 32
図版19　SK3421土坑出土遺物(2) …… 33
図版20　A-2区東　遺構図(1) …… 36
図版21　A-2区東　遺構図(2)・写真 …… 37
図版22　SK3422・3423土坑出土遺物 …… 38
図版23　A区出土遺物写真(1) …… 39
図版24　A区出土遺物写真(2) …… 40
図版25　B-1区　遺構図・写真(1) …… 44
図版26　B-1区　遺構図・写真(2) …… 45
図版27　B-1区　出土遺物 …… 46
図版28　B-1区　出土遺物写真 …… 46
図版29　B-2区　遺構図・写真(1) …… 50
図版30　B-2区　遺構図(2) …… 51
図版31　B-2区　遺構写真(2) …… 52
図版32　B-2区　第Ⅳ～Ⅶ層出土遺物 …… 53
図版33　B-2区　出土遺物写真(1) …… 54
図版34　B-2区　第Ⅲc層出土遺物 …… 55
図版35　B-2区　出土遺物写真(2) …… 55
図版36　A区の遺構変遷 …… 66
図版37　B区の遺構変遷 …… 67
図版38　第32次調査西壁とSK3421断面 …… 70
図版39　政庁地区北方の主要な遺構 …… 72
図版40　基本層序と遺構面の対応関係 …… 73
図版41　第3次調査出土漆紙文書 …… 74
図版42　第56次調査SI1903出土漆紙文書(1) …… 75
図版43　第56次調査SI1903出土漆紙文書(2) …… 76

表目次

第1表　多賀城跡調査研究委員会委員 …… 1
第2表　多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画 …… 1
第3表　第94次調査　遺構登録番号一覧 …… 8
第4表　遺物写真の登録番号一覧 …… 9
第5表　第94次調査出土遺物の破片集計(1) …… 56
第6表　第94次調査出土遺物の破片集計(2) …… 57
第7表　第94次調査出土軒丸・軒平瓦の集計 …… 57
第8表　第94次調査出土丸・平瓦の集計(点数) …… 58
第9表　第94次調査出土丸・平瓦の集計(重量) …… 59
第10表　土器の個体数 …… 60
第11表　政庁地区北方の柱穴規模の比較 …… 69
第12表　多賀城跡環境整備事業第10・11次5ヵ年計画 …… 77
第13表　令和2年度現状変更一覧 …… 78

例　　言

1．本書は、令和２年度に実施した多賀城跡第94次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、関連研究事業、普及活動の概要等および、昭和40年度の多賀城跡発掘調査委員会による第３次調査と平成元年度の当研究所による第56次調査で出土した漆紙文書の追加報告を収録したものである。
2．当研究所の発掘調査と環境整備事業については、多賀城跡調査研究委員会における審議と承認に基づいて実施している(第1表)。
3．測量原点については政庁正殿身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ1°04′東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標値は、東日本大震災後(平成24年)に実施した再測量の成果から以下のとおりである。

　正殿　　世界測地系　　X座標:-187968.3530m、Y座標:13560.4850m、標高:32.964m
　南門　　世界測地系　　X座標:-188037.4930m、Y座標:13559.3150m、標高:29.799m

4．本書における遺構の位置の表記については、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)で示している。
　例:W5 ＝ 原点から西に5m、S3 ＝ 原点から南に3m
5．本書で使用した遺構記号は、SA:柱列、SB:掘立柱建物、SD:溝・小溝群・自然流路、SE:井戸、SI:竪穴建物、SK:土坑、SX:整地層、P:柱穴である。
6．土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖11版』日本色研事業株式会社(1996年)にもとづく。
7．瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
8．当研究所の刊行物については、『多賀城跡 政庁跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 外郭跡Ⅰ-南門地区-』を『外郭Ⅰ』、『多賀城跡　政庁南面地区-城前官衙遺構・遺物編-』を『南面Ⅰ』、『多賀城跡　政庁南面地区Ⅱ-城前官衙総括編-』を『南面Ⅱ』、『多賀城施釉陶磁器』を『施釉陶磁器』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報2010』などと記し、複数の年報の場合は『年報1983・2006』、『年報2011～2014』などと記す。
9．本調査で得た資料については、宮城県教育委員会で保管している。
10．本書の内容の一部については、『第94次調査現地説明会資料』、『令和２年度宮城県遺跡調査成果資料集』で紹介しているが、本書の内容が優先する。
11．本書の整理は、遺物を村上裕次・柴田とみ子・佐竹祐莞、遺構を初鹿野博之が担当した。
12．本書の作成にあたっては所員で討議と検討を行い、Ⅰを村上、Ⅱを初鹿野・村上、Ⅲを高橋　透、Ⅳを白崎恵介・高橋・村上が執筆し、初鹿野・村上が編集した。

調査要項

多賀城跡第94次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会(教育長　伊東昭代)
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所(所長　高橋栄一)
調査員	高橋栄一・白崎恵介・村上裕次・初鹿野博之・高橋　透・鈴木貴生
調査期間	令和２年５月21日～令和２年11月13日
調査面積	約600㎡
調査参加者	市川菖暁・伊藤竜子・氏家雅夫・奥　清志・佐藤有佳利・鈴木幸夫・畑中和子・升　孝司 (多賀城跡調査研究所会計年度任用職員) 阿部栞央・五十嵐健太・郭　昕怡・神山陽祐・顧　婕・崔　笑宇・ジェルマナ　グレコ・ 高野柾人・三浦　紘(東北大学)
整理参加者	柴田とみ子・佐竹祐莞(多賀城跡調査研究所会計年度任用職員)

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真:南より撮影〔登録番号:Z8965〕】
【裏表紙写真〔登録番号:Z9154〕】

Ⅰ. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで５ヵ年計画を立案して行っている(第１・２表)。今年度、当研究所は、多賀城跡発掘調査第11次５ヵ年計画の２年次目の事業として、政庁北側の政庁地区北方を対象に第94次調査を、環境整備第11次５ヵ年計画初年次目の事業として、政庁南面地区の遺構表示工等を実施した。

以下、本書では主に第94次調査の内容を記すとともに、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

氏　　名		所　　属	専門分野
委員長	佐藤　信	東京大学名誉教授	古代史学
副委員長	阿子島　香	東北大学大学院教授	考 古 学
委　員	小野　健吉	和歌山大学教授	庭園史学
委　員	熊谷　公男	東北学院大学名誉教授	古代史学
委　員	黒田　乃生	筑波大学教授	造園学
委　員	櫻井　一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委　員	佐々木由香	東京大学総合研究博物館特任研究員	植 物 学
委　員	藤井　恵介	東京大学名誉教授	建築史学
委　員	古瀬奈津子	お茶の水女子大学名誉教授	古代史学
委　員	松村　恵司	独立行政法人国立文化財機構理事長　奈良文化財研究所長	考 古 学

第１表　多賀城跡調査研究委員会委員（任期:平成31年4月1日~令和3年3月31日）

年　度	次数	発掘調査対象地区	発掘面積	調　査　の　目　的
平成31・令和元年	93次	外郭北西隅（丸山・新西久保地区）	300㎡	外郭西辺北部の構造と変遷の検討
令和2年	94次	政庁地区北方	600㎡	政庁地区北方の遺構の分布と内容の把握
令和3年	95次	政庁地区北方	600㎡	
令和4年	96次	政庁地区北方	600㎡	
令和5年	97次	政庁地区北方	500㎡	

第２表　多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画（令和元年度承認）

Ⅱ. 第94次調査

1. 調査の目的と経過

(1)目的

令和２年度は、多賀城跡発掘調査の第11次５ヵ年計画２年次目にあたる。今年度から調査対象とした政庁地区北方は、多賀城市が多賀城創建1300年記念の一環として多目的広場の整備を予定しており、当研究所では政庁北側の調査資料の蓄積を主目的として調査を計画した(第２表、図版１・２)。対象地は、面積が広く遺構面も複数存在することが予想されるため、令和２～５年度にかけて４ヵ年(第94～97次)の調査を予定している。

多賀城の政庁は北から南へ延びる丘陵上に立地し、北西側と南東側を除く周囲を自然の沢で区画されている。このうち東側を画する深い沢は、政庁の北東側で東から西へと入り込んでいる。一方、政庁の北西側は六月坂地区へと続く丘陵尾根となっている。

政庁地区北方では、これまでに第19・31・32・76次の４次にわたる調査を行っており(図版３)、以下に主な成果をまとめる。

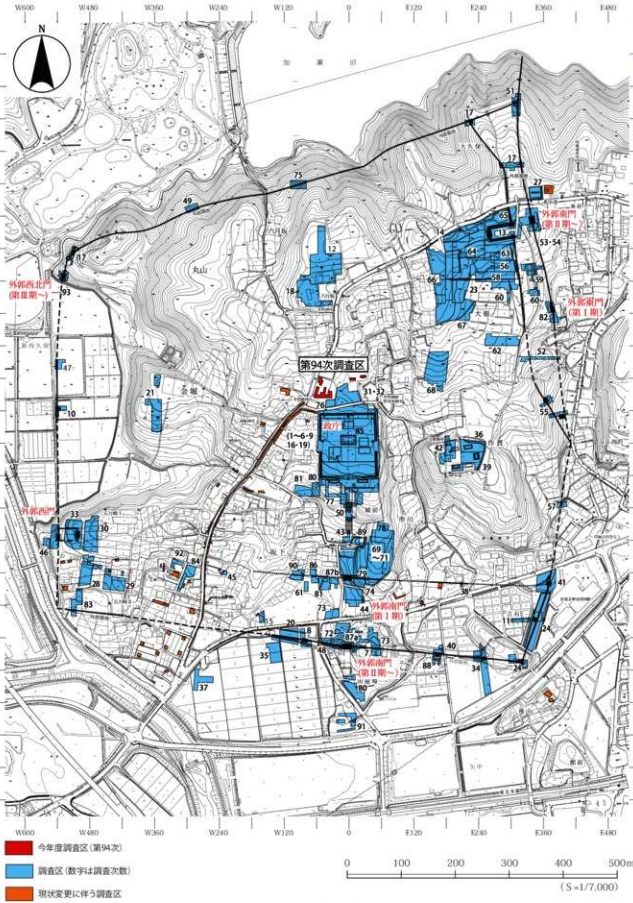
まず、政庁北辺築地塀のすぐ北側には、東西7間・南北３間のSB551建物を中心として、梁間１間のSB553・1013・1050が「コ」の字形に配置されて北辺築地塀に取り付く。これらは「政庁北方建物」(『補遺編』)と呼称され、『本文編』では政庁第Ⅳ期の第２小期に位置づけ、政庁と密接な関連を持つ一郭が築地塀北側に新たに造営されることを指摘した。また、建物群が政庁中軸線より西寄りに位置するのは地形上の制約とした。

政庁北方建物より北側では、第31・32次調査で小型の掘立柱建物４棟(SB1017・1022・1023・1026)を検出し、政庁第Ⅲ期以降と推定した(『年報1977』)。さらに北側、沢の最も低い部分では竪穴建物３棟(SI1024・1063・1065)を検出し、政庁第Ⅲ期に位置づけた(『年報1978』)。また、政庁北方建物の東側でも第76次調査で竪穴建物２棟(SI2806・2813)を検出し、SI2806は政庁第Ⅲ期の中でも前半段階とみられることから、「伊治公呰麻呂の乱」による火災後の一時的な施設と推定した(『年報2004』、『補遺編』)。

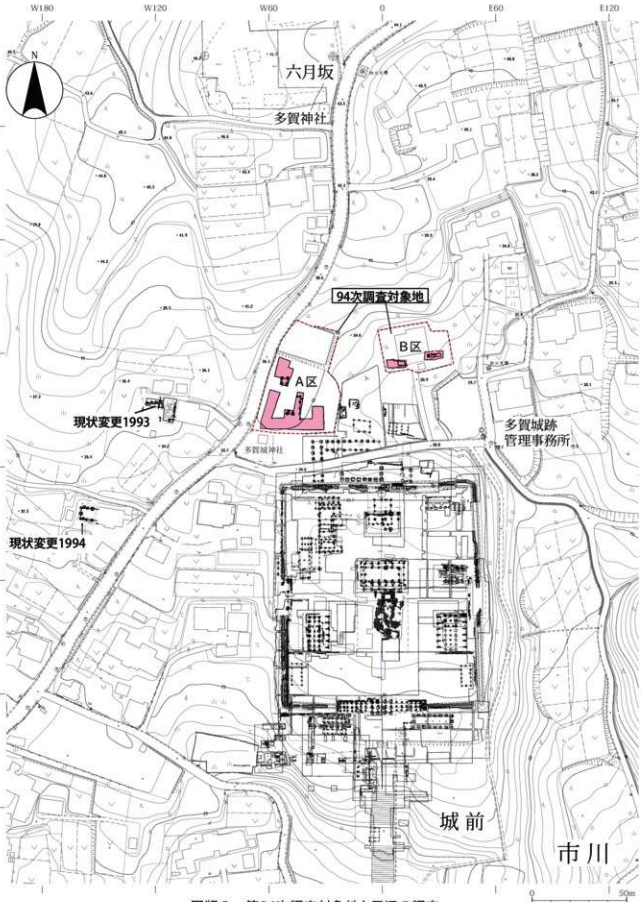
これまでの調査では、10世紀後半以降の掘立柱建物・竪穴建物の分布は明らかでないが、SE1066井戸から出土した須恵系土器は11世紀後半に位置づけられる(『補遺編』)。また、第31・32・76次調査区で10～12世紀代の白磁破片が複数出土しているため、輸入陶磁器を保有しうる階層の施設がこの地区に存続することを推定した(『年報2004』)。

そのほかに、平成５年度には塩竈街道西側で現状変更に伴う発掘調査を行い、調査面積は狭いながらも複数の掘立柱建物を検出した(図版２)(『年報1993』)。

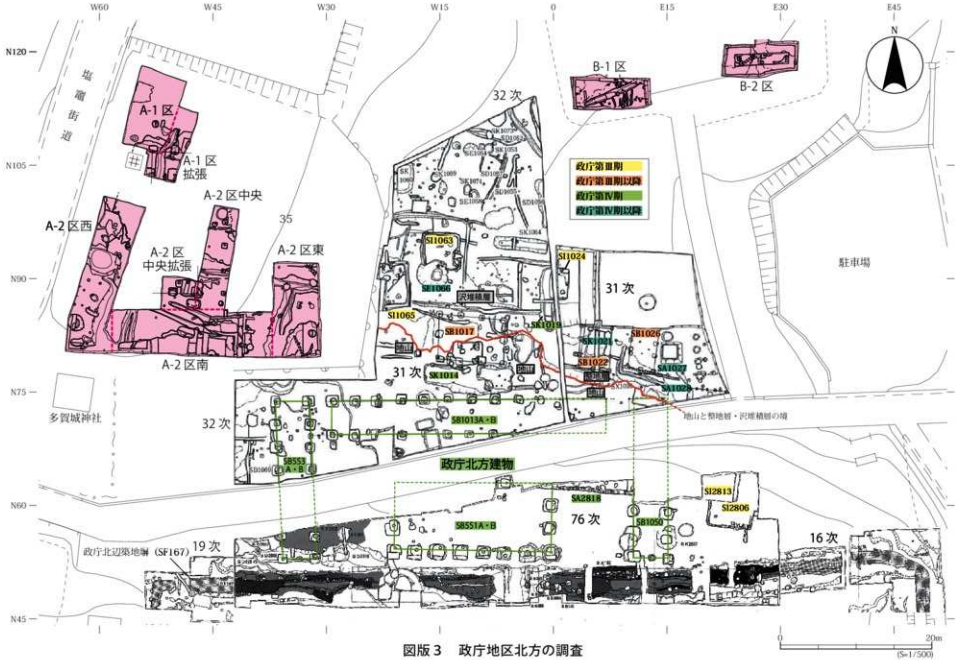
以上のような調査成果から、政庁地区北方の丘陵尾根部分では、政庁北方建物や現状変更調査で見つかった掘立柱建物群などが分布し、丘陵斜面から沢部分ではやや小規模な掘立柱建物や竪穴建物が分布することが想定された。しかし、特に政庁の北西側に続く丘陵尾根周辺は未調査で、遺構の分布


第94次調査区
外郭西北門
(第Ⅲ期～)
外郭西門
外郭南門
(第Ⅰ期)
外郭南門
(第Ⅱ期～)
外郭東門
(第Ⅱ期～)
外郭東門
(第Ⅰ期)
殿庁
(1～6・9
16・19)
今年度調査区(第94次)
調査区(数字は調査次数)
現状変更に伴う調査区
0 100 200 300 400 500m
(S=1/7,000)

図版1　調査区の位置



図版２　第94次調査対象地と周辺の調査



図版 3　政庁地区北方の調査

や旧地形は不明であった。そこで、第94次調査では丘陵尾根部分を中心に遺構分布や構成を確認すること、加えて、沢の範囲など旧地形を把握し、地形と遺構分布との関連性を確認することを目的とした。

（２）調査の方法と経過

〔A区の設定と表土除去〕 A区は第31・32次調査区の西側にあたる。過去には宅地として利用されており、現在も北西部に井戸が１基残っている。調査開始にあたり、丘陵尾根の位置を想定して「L」字形の調査区を設定し、南北方向を「A-1区」（井戸より北側）と「A-2区西」、東西方向を「A-2区南」とした（図版３）。

５月21日から重機による表土除去を開始したところ、A-1区とA-2区西の大部分は、近現代の造成によって地山の岩盤まで削られている状況が確認された。A-2区南では須恵系土器や瓦を含む土坑等が確認されたものの、遺構は散漫であった。そこで、さらに遺構の分布や旧地形を確認するため、南北方向に「A-2区中央」と「A-2区東」を設定し、調査区を「E」字形として、引き続き表土除去を行った。しかし、これらの調査区でも古代の遺構は少なく、近現代に地山まで一旦削られた状況が確認された。

〔A区の建物確認と調査区の拡張〕 ５月26日に表土除去を終了し、５月27日から人力による遺構検出を行った。その結果、A-1区南東隅に自然流路（SD3424）とみられる層が分布しており、これを掘り下げていったところ方形の柱穴１個（SB3415-P1）が検出された。また、A-2区中央からも複数の柱穴（SB3416-P1やSA3417）や、竪穴建物の一部（SI3418）が確認された。これらの状況を受けて、柱穴の分布を確認するため、７月22日にA-1区の南東側とA-2区中央の南西側を重機で部分的に拡張した。その結果、それぞれ２個以上の柱穴が検出されたことから、２棟の掘立柱建物（SB3415・3416）として認定し、これらの建物はさらに調査区外に広がることが想定された。

〔A区の土坑ほか調査〕 A-2区南と東では、須恵系土器や瓦を含む土坑が検出され、一部に灰白色火山灰の堆積も確認された。そこで、これらを部分的に地山まで断ち割って調査を行い、最終的に古代の土坑４基（SK3420～3423）を検出した。このうち、SK3421は東西18mに及ぶ大型の土坑で、灰白色火山灰堆積後に掘り込まれ、堆積土上層には11世紀後半頃の白磁や須恵系土器を含むことを確認した。そのほかに、明らかに現代とみられる攪乱を除いて、近世～近代とみられる溝・土坑・井戸の検出と精査を行った。

A区全体の状況が把握できたことから、８月20日に空中写真撮影を行い、略測による平面図を作成した。その後も一部の遺構精査、平面図・断面図の作成等を10月29日まで行った。

〔B区の設定と表土除去〕 B区は第32次調査区の北東側にあたる。今年度当初の調査予定地ではなかったが、A区の調査で丘陵尾根から掘立柱建物や土坑が検出されたことから、沢の北側の丘陵南斜面における遺構の状況把握が必要と考えられた。また、令和元年度にこの部分の公有地化が進展していたことから、追加で調査を行うこととした。

B区も公有化以前は宅地として利用されており、北半部は宅地造成によって旧地形が大きく削られている状況が観察された。そこで、遺構面が残存すると推定される南半部に東西方向のトレンチを２本設

定し、西から「B-1区」、「B-2区」とした（図版３）。７月20日に重機で表土除去を行い、８月下旬に人力で遺構検出を行ったところ、B-1区では北西部で地山と沢堆積層の境が検出された。B-2区では厚さ約１mの盛土下全面に沢堆積層が分布することを確認した。

〔B区の遺構調査〕A区の調査が進んだ９月15日からB区の本格的な遺構調査を開始した。B-1区では上部の黒褐色層（基本層第Ⅱ層）を人力で掘り下げたところ、整地層（SX3440）の分布を確認し、その上面で溝（SD3444）・小溝群（SD3442・3443）を検出した。また、北壁と東壁際にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、整地層の下層に竪穴建物（SI3439）があることを確認した。

B-2区は中央に深掘り部分を設定し、沢堆積層を層ごとに掘り下げていったところ、２枚の遺構面を確認した。上層の遺構面では溝（SD3445）を検出し、下層の遺構面は現地表面から深さ２m前後の地山で、複数の柱穴を検出した。

10月19日にB区の空中写真を撮影し、平面図・断面図の作成、柱穴断ち割り等の調査を10月30日まで行った。

〔記録の作成方法〕平面図・断面図は遺り方測量により、縮尺1/20で、図面用紙に手書きで作成した。図面作成や遺物取上げに使用するため、調査区内に３m四方のグリッドを設定したほか、調査区周辺に仮設の基準点（A区４点、B区２点）を打設した。これらの設定にあたっては、政庁内に埋設された「内城」と「内城W」を基準点とし、トータルステーション（ソキア製SET530RS）を用いて測量した。

遺構写真はデジタルカメラ（Nikon製D7000：1690万画素）を用い、画像の保存形式はRAWとJPEGとして、色調補正のためにグレーカードを写しこんだものも撮影した。空中写真撮影にはドローン（DJI製PHANTOM3 PROFESSIONAL：1200万画素）を使用し、５月12日（調査前の状況）、８月20日と10月15日（主にA区）、10月５日と10月19日（主にB区）の計５回撮影した。

〔埋め戻し〕10月末でA区・B区ともに遺構精査と図面作成が完了した。器材の撤収と遺構の養生を行い、11月10日～13日に重機でA区・B区ともに埋め戻した。

〔調査成果の検討・公開等〕調査期間中の９月８日・９日には、多賀城跡調査研究委員会による現場視察を受けるとともに、調査内容を報告し、その審議を経て、成果に関する指導と承認を受けた。

それを踏まえて10月15日には調査成果を報道機関に公開し、10月17日に現地説明会を開催した。本年度は新型コロナウイルス感染拡大が懸念される中での開催となったため、見学者を１回あたり最大20名までに限定し、説明を複数回に分けて実施した。当日は小雨がちらつくあいにくの天候であったが、午前と午後合わせて109名の参加があった。

なお、９月15日～10月５日には東北大学考古学実習の一環として、東北大学学生９名がB-1区の調査に参加した。

また、調査後の令和２年12月には、宮城県考古学会発行の『令和２年度宮城県遺跡調査成果資料集』に調査の概要を紹介した。

〔整理作業〕整理作業はすべて当研究所内で行い、出土遺物の水洗など一部作業を現場と並行して進めたが、本格的には11月２日から開始した。

〔遺構の整理〕遺構は現場では仮番号を付して調査を進め、整理作業において改めて遺構登録台帳の3415～3445番に登録した（第３表）。遺構平面図・断面図はドローソフト（Adobe Illustrator CS5）を用いてトレースを行い、土層注記表と合わせて図版を作成した。遺構写真は類似するカットの中から登録するものを選出し、画像編集ソフト（Adobe Photoshop CC2019）を用いてRAWデータの色調と歪みを補正した後、TIFF形式で保存した。登録番号は、遺構写真にＺ8671～8961、空中写真にＺ8962～9017、その他の写真（調査の様子など）にＺ9155～Ｚ9181を付した。そのなかから本書に掲載する写真を選択し、登録番号は掲載写真の右下に記した。

〔遺物の整理〕出土した遺物は土器・陶磁器・瓦・金属製品等で、整理用平箱に換算して38箱分である。これらは水洗後、接合を行いながら調書を作成し、集計表にまとめた（第５～９表）。このうち、遺構・層の年代を示す遺物や特徴的な遺物387点を抽出して登録番号を付した。登録番号は、土器・瓦・土製品・石製品・金属製品・鉄滓・動物遺存体・近世以降の陶磁器についてはR1～R366を使用した。施釉陶磁器については『多賀城施釉陶磁器』の登録方法にならい、緑釉・灰釉陶器に94-１～94-13、白磁にNo.323～330を付した。以上の登録遺物のなかから主要な遺物77点の実測図・拓本を作成した。トレースはドローソフト（Adobe Illustrator CS5）を用いて行い、観察表と合わせて遺物図版を作成した。遺物写真はデジタルカメラ（Nikon製D7000：1690万画素）を用いて撮影し、登録番号Ｚ9018～Ｚ9154を付して、掲載写真との対応関係を第４表に示した。

番号	記号	種類	平面図
3415	SB	掘立柱建物	図版7
3416	SB	掘立柱建物	12
3417	SA	柱列	12
3418	SI	竪穴建物	12
3419	SD	溝	15
3420	SK	土坑	15
3421	SK	土坑	14,15
3422	SK	土坑	15
3423	SK	土坑	20
3424	SD	自然流路	7,9,11
3425	SD	溝	7

番号	記号	種類	平面図
3426	SD	溝	図版7
3427	SE	井戸	11
3428	SK	土坑	11
3429	SD	溝	12,20
3430	SK	土坑	12
3431	SK	土坑	12
3432	SD	溝	14,15
3433	SD	溝	14,15
3434	SK	土坑	14,15
3435	SK	土坑	15
3436	SK	土坑	20

番号	記号	種類	平面図
3437	SD	溝	図版20
3438	SD	溝	15
3439	SI	竪穴建物	25
3440	SX	整地層	25
3441	SX	整地層	25
3442	SD	小溝群	25
3443	SD	小溝群	25
3444	SD	溝	25
3445	SD	溝	29

※ No.3415 ～ 3438 はＡ区
No.3439 ～ 3445 はＢ区

第３表　第94次調査　遺構登録番号一覧

図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号
23	1	Z9056	23	25	Z9084	24	12	Z9108	28	11左	Z9044	33	17	Z9147
	2	Z9057		26	Z9080		13	Z9106		11右	Z9045		18左	Z9030
	3	Z9058		27	Z9088		14	Z9109		12左	Z9046		18右	Z9031
	4	Z9059		28	Z9089		15	Z9110		12右	Z9047		19左	Z9028
	5	Z9062		29	Z9090		16左	Z9111		13左	Z9042		19右	Z9029
	6	Z9061		30	Z9091		16右	Z9112		13右	Z9043		20左	Z9140
	7	Z9060		31	Z9085		17	Z9113		14左	Z9020		20右	Z9141
	8a	Z9063		32	Z9086		18	Z9114		14右	Z9021		21左	Z9142
	8b	Z9064		33	Z9087		19	Z9117	33	1左	Z9024		21右	Z9143
	9	Z9065		34	Z9082		20左	Z9115		1右	Z9025	35	1	Z9148
	10	Z9066		35	Z9093		20右	Z9116		2	Z9128		2	Z9150
	11	Z9067		36	Z9094	28	1	Z9120		3	Z9129		3	Z9149
	12	Z9068	24	1左	Z9096		2左	Z9119		4	Z9131		4	Z9151
	13	Z9069		1右	Z9097		2右	Z9118		5	Z9134		5	Z9152
	14左	Z9070		2左	Z9040		3左	Z9122		6	Z9135		6左	Z9054
	14右	Z9071		2右	Z9041		3右	Z9121		7	Z9130		6右	Z9055
	15	Z9072		3左	Z9018		4	Z9123		8	Z9132		7左	Z9022
	16	Z9075		3右	Z9019		5	Z9124		9	Z9133		7右	Z9023
	17a	Z9073		4左	Z9098		6	Z9125		10	Z9136		8左	Z9032
	17b	Z9074		4右	Z9099		7左	Z9050		11左	Z9137		8右	Z9033
	18	Z9076		5	Z9101		7右	Z9051		11右	Z9138		9	Z9153
	19	Z9077		6	Z9100		8左	Z9048		12左	Z9026		10左	Z9034
	20	Z9092		7	Z9103		8右	Z9049		12右	Z9027		10右	Z9035
	21	Z9078		8	Z9104		9左	Z9052		13	Z9139		11左	Z9036
	22	Z9079		9	Z9105		9右	Z9053		14	Z9144		11右	Z9037
	23	Z9081		10	Z9102		10左	Z9126		15	Z9145		12左	Z9038
	24	Z9083		11	Z9107		10右	Z9127		16	Z9146		12右	Z9039

第４表　遺物写真の登録番号一覧

Z8968

図版４　調査地点空中写真（上が北）

1．重機による表土除去（南から）　Z9157

2．A区の調査（北から）　Z9158

3．B区の調査（西から）　Z9160

4．多賀城跡調査研究委員会の現地指導　Z9164

5．考古学実習（測量）　Z9166

6．考古学実習（遺構精査）　Z9167

7．現地説明会　Z9174

8．調査区の埋め戻し（南から）　Z9180

図版５　94次調査・公開の様子

2．A区の調査成果

A区は政庁の北西側、政庁正殿の基準点から北へ79～138m、西へ30～65mの範囲にある。過去には宅地として利用されており、南北２箇所の平坦面があるが、今年度は南側の平坦面に調査区を設定した。標高は34～36mで、北西から南東に下るわずかな傾斜が認められる。宅地造成の際に主に北西側を切土して南東側に盛土したと推測され、東側は擁壁が設置されて、現地表面は隣接する第31・32次調査地よりも最大約1.7m高くなっている。また、A区の西側には塩竈街道が走るが、この道路の西側には切土された丘陵の崖面が露出している。

周辺の地形や過去の調査成果から、A区の旧地形は政庁から北西に続く丘陵尾根と、東側から入る沢がそれぞれ延びることが予想された。「調査の方法と経過」の項でも記述した通り、丘陵部分の様相を把握するためにA-1区、A-2区西・南を設定し、さらに遺構や旧地形を把握するためにA-2区中央・東を設定した。

（1）層序

調査区内に分布する基本層序は以下のように把握された。

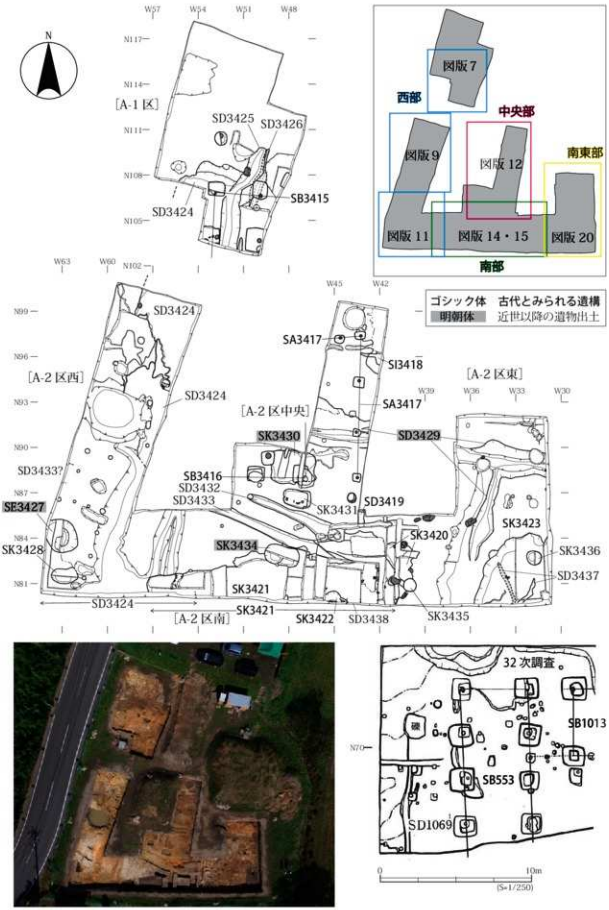
第Ⅰ層：現代の表土・盛土。A-1区北西部を除いて、調査区内は地山ブロックを多く含む土で広く盛土整地されており、その下に黒褐色を呈する盛土以前の表土も認められた。いずれの層も現代の瓦、ガラス瓶、プラスチック片などを含むため、すべて現代の層と判断した。最も厚いA-2区東で、現地表面から約0.8mを測る。現表土をⅠa層、盛土をⅠb層、盛土前の表土をⅠc層と記載し、地点によってはⅠc層の下に古い盛土があり、Ⅰd層とした（図版７）。

第Ⅱ層：にぶい黄褐色(10YR4/3)を基調とするシルト層で、A-2区の削られた地山直上に広く分布する。混入物の少ない均質な層で、年代・成因等明確でないが、わずかに含まれる陶磁器から近代以降と推定される。最も厚いA-2区南壁では厚さ約0.5mで、色調の違いからやや明るい層をⅡa層、にぶい黄褐色を呈する層をⅡb層、やや暗い層をⅡc層と記載した（図版11・14・15）。

第Ⅲ層：灰白色火山灰（十和田a火山灰）の堆積層である。A-2区南部のN83・W40付近（図版15）で部分的に検出した。灰黄褐色(10YR6/2)シルトが混ざってやや汚れているため、２次堆積の可能性がある。

第Ⅳ層：地山。地点によってやや様相が異なり、大規模な削平を受けたA-1区北西部、A-2区西～南西部では、黄色の凝灰岩の岩盤である。A-1区南東部では、風化したやや軟質な岩盤に暗褐色土が斑に混じる。A-2区中央付近では、黄褐色の粘土質シルトである。A-2区東～南東部にかけては、岩盤に角礫（最大50cm程度）が多く含まれる。第Ⅳ層は断面図では薄いグレーで表現した。

遺構はすべて第Ⅳ層上面で検出しており、標高は最も高いA-1区北壁際で35.2m、最も低いA-2区東壁際では33.2mで、全体として北西から南東へ下る傾斜が認められる。



A 区全景（上が北）　Z8992

図版 6　A 区遺構配置図

（２）発見遺構と出土遺物

Ａ区では掘立柱建物２棟、柱列１条、竪穴建物１棟、溝８条、自然流路１条、土坑10基、井戸１基を検出した（図版６・第３表）。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、緑釉陶器、瓦、硯、転用砥、近世以降の陶磁器・瓦質土器・土師質土器、土製品、石製品、木製品、鉄製品、鉄滓、動物遺存体、植物遺存体がある。一部の溝・土坑・井戸からは近世～近代の陶磁器・土師質土器が出土しているが、今回の調査では、第Ⅱ層堆積前の削平より古いものについては、遺構として報告する。

ここでは、遺構の分布から便宜的に西部（A-1区とA-2区西）、中央部（A-2区中央）、南部（A-2区南）、南東部（A-2区東）に分けて、個別の遺構について記述する。

１）Ａ区西部の遺構と出土遺物

①掘立柱建物

【SB3415掘立柱建物】（図版７・８）

〔検出〕A-1区のN102～N108・W48～54で４個の柱穴（東西１間以上、南北１間以上）を検出した。柱穴はさらに東側と南側の調査区外に広がる可能性があり、建物全体の規模・棟方向は確定していない。北西の柱穴から時計回りでP1～P4として報告する。P1は北半部を底面まで半截して調査し、P2～P4は一段掘り下げまで行った。P1～P3で柱痕跡、P1で柱切取穴を検出した。

〔重複〕SD3424自然流路、SD3425・3426溝と重複し、これらより古い。柱穴上部をこれらの遺構によって削られている。

〔柱間〕柱痕跡の中心で計測すると、P1-P2で3.00m、P2-P3で2.95mである。

〔方向〕北側柱列は東西基準線に対して東で南へ４°偏する。

〔柱穴〕検出面の標高は、P1が34.6～34.7m、P2・P3が34.7～34.9m、P4が34.4～34.6mで、SD3424などに削られた西側が低い。掘方の平面形はいずれも隅丸方形を基調とする。P1は東西1.1m、南北0.9m、P2は東西1.0m、南北1.2mで、両者は南辺をほぼ揃えている。P3とP4は全体を検出していないが、P3は南北1.6m、東西1.1m以上あり、P1・P2より明らかに大きい。掘方埋土は、半截したP1では２層に分かれる。P2・P3の検出面では黄色の地山ブロックを多く含む褐色(10YR4/4)粘土質シルトで、P4には礫も多く含む。P1～P3の柱痕跡はいずれも円形を呈し、P1とP2が直径約24cm、P3が直径約30cmである。堆積土は炭化物を少量含む暗褐色(10YR3/4)の粘土または粘土質シルトである。半截したP1は深さ約0.3mで、底面標高は34.4mである。

〔出土遺物〕P1掘方から平瓦、P4掘方から平瓦ⅠＡ類と土器片、P3検出面で丸瓦ⅡＢ類と平瓦ⅡＣ類が出土した。

②溝・自然流路

【SD3424自然流路】（図版７・９・10・11・14）

〔検出〕A-1区とA-2区西・南、N80～110・W50～65にかけて断続的に検出した南北方向の自然流路である。平面形や断面形に凹凸が多く、人為的な掘り込みとは考えにくいこと、堆積土に細砂が多く含まれ

ることから、自然流路と判断した。位置的に、政庁西側へと続く沢の一部の可能性がある。

〔**重複**〕SB3415掘立柱建物、SE3427井戸、SK3421・3428土坑、SD3425・3426溝と重複し、SB3415・SK3421より新しく、SE3427・SK3428・SD3425・3426より古い。

〔**規模**〕A-1区（図版７）では幅（東西）5.1ｍ、長さ（南北）3.5ｍ、A-2区西（図版９）では幅4.2ｍ以上、長さ12.1ｍ、A-2区南壁際（図版11・14）では断続的に幅10.0ｍ、長さ2.7ｍを検出した。攪乱により失われた部分や未調査範囲を含めると、検出した全長は約30ｍに及ぶ。大部分を底面まで掘り下げたところ、深さ最大0.4ｍ、底面標高は北端部が34.5ｍ、南端部が33.8ｍで、北から南へ緩やかに下る。

〔**堆積土**〕９層確認し（図版10）、このうち６層と８層が広く分布する。６層下部～地山直上にかけて、礫や瓦片が多く含まれる。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・高台坏・瓶・甕、須恵系土器の坏・高台坏・高台坏または高台皿、軒丸瓦、丸瓦Ⅰ・Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＢ・ⅠＣ・ⅡＢ・ⅡＣ類、転用砥が出土した。軒丸瓦には型番不明の重弁蓮花文と細弁蓮花文310B（出土状況図版10-3）があり、平瓦ⅠＡ類にはaタイプ、ⅡＢ類にはaタイプ１とbタイプがある。

【SD3425溝】（図版７・８）

〔**検出**〕A-1区のN103～110・W49～53で検出した南北方向の溝で、南は調査区外へ延びる。また、この溝と類似する堆積層が溝の北東側（N108・W48周辺）にも検出され、一連のものの可能性がある。

〔**重複**〕SB3415掘立柱建物、SD3424自然流路、SD3426溝と重複し、SB3415・SD3424より新しく、SD3426より古い。

〔**方向**〕やや蛇行しており、北半部は南北基準線より北で東へ28°、南半部は北で東へ８°偏する。

〔**規模**〕平面で幅1.3ｍ、長さ7.0ｍにわたって検出し、調査区断面で幅2.5ｍ以上あることを確認した（図版７断面B-B'）。すべて底面まで掘り下げたところ、断面形は浅い「Ｕ」字状を呈し、深さ0.4ｍを測る。底面標高は北端が34.8ｍ、南壁際が34.4ｍで、北から南へ下る。

〔**堆積土**〕３層確認し、いずれも自然堆積で、全体として砂と粘土が互層状に堆積する。

〔**出土遺物**〕須恵器の瓶・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＣ類が出土した。

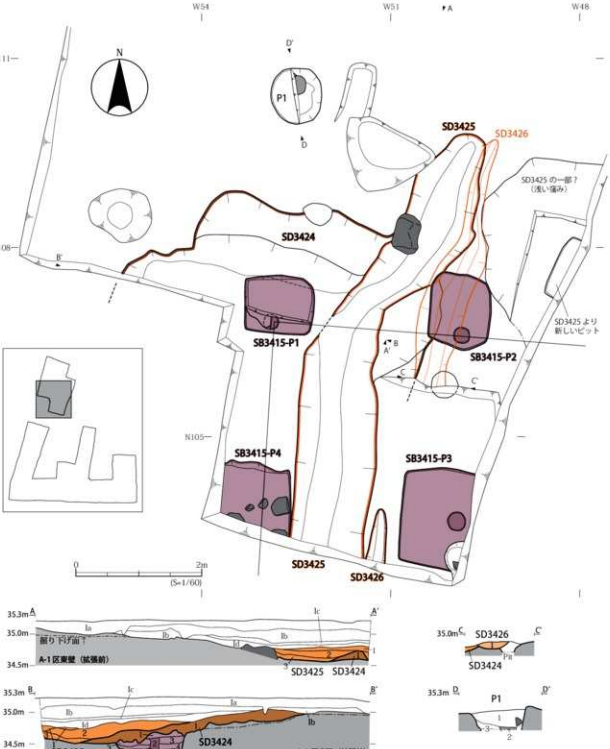
【SD3426溝】（図版７）

〔**検出**〕A-1区のN103～110・W49～52で検出した南北方向の溝で、南は調査区外へ延びる。一部が攪乱により失われ、南北２か所に分かれて検出したが、規模、方向、堆積土の特徴、新旧関係から同一の溝と判断した。平面・断面図作成後、柱穴検出のために全体的に掘り下げた。

〔**重複**〕SB3415掘立柱建物、SD3424自然流路、SD3425溝と重複し、これらより新しい。

〔**方向**〕南北基準線より北で東へ15°偏する。

〔**規模**〕幅は最大0.7ｍ、検出長は攪乱で失われた部分を含めて7.0ｍを測る。断面形は浅い「Ｕ」字状を呈し、深さ0.1ｍである。底面標高は北端が34.9ｍ、南壁際が34.7ｍで、北から南へ下る。



遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SB3415-P1	1	明黄褐色(10YR6/6)	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む、炭化物粒をわずかに含む	柱穴埋土
	2	明褐色(10YR3/4)	粘土	地山粒・炭化物粒を少し含む、ドロややマウイ化	柱痕跡
	3	黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山ブロックを多く含む、炭化物を少し含む	掘方埋土
	4	黄色(2.5Y7/6)	シルト質粘土	地山ブロック土体	掘方埋土
SD3424	1	灰黄褐色(10YR6/2)	粘土	地山ブロックを多く含む、周囲10-8対応か	自然堆積
SD3425	1	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土	上層の細かラミナ状に積ざる	
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂	粗砂～細砂のラミナ状堆積、部分的に地山ブロックを含む（SD3424由来か）	自然堆積
	3	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土	灯籠	
SD3426	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	地山ブロックを少し含む、サビを多く含む	自然堆積
P1	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	地山ブロック・炭化物をやや多く含む	柱抜取の埋土
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	柱痕跡
	3	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	掘方埋土

図版７　A-1区　遺構図

1．A-1区全景（南から） Z8712

2．A-1区拡張前断面（北から） Z8685

3．A-1区拡張後の溝調査、柱穴検出（東から） Z8693

4．SB3415検出（北から） Z8701

5．A-1区P1断面（東から） Z8680

6．SB3415-P1断面（北東から） Z8715

7．SB3415-P2検出（西から） Z8704

8．SB3415-P3検出（西から） Z8706

9．SB3415-P4検出（北から） Z8705

図版８　A-1区　遺構写真

〔**堆積土**〕1 層確認し、自然堆積である。

〔**出土遺物**〕丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡC類が出土した。

③井戸

【SE3427井戸】（図版10・11、遺物図版24）

〔**検出**〕A-2区南西部のN84・W63付近で検出した素掘りの井戸で、西端は調査区外に及ぶ。また、北側と東側には本遺構を囲むように小ピットが並んでおり、伴う施設の可能性がある。

〔**重複**〕SD3424自然流路と重複し、これより新しい。

〔**規模**〕平面は楕円形で、直径2.2m前後と推定される。東半部を深さ0.7mまで掘り下げたところ、底面は検出されなかったが、断面は漏斗状に窄まることを確認した。

〔**堆積土**〕4 層確認し、礫・地山ブロックを多く含む 4 層で埋め戻した後、3 層が炭を多く含むことから廃棄土坑として利用した後に、1・2 層が自然堆積したとみられる。

〔**出土遺物**〕丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類、近世以降の陶器（図版24-16）が出土した。24-16は唐津の大皿で、内面に波状文が描かれ、江戸時代とみられる（註１）。

④土坑

【SK3428土坑】（図版10・11）

〔**検出**〕A-2区南西部のN82・W63付近で検出した。

〔**重複**〕SD3424自然流路と重複し、これより新しい。

〔**規模**〕平面は東西方向に長い楕円形で、規模は東西1.8m、南北1.0mである。南半部を底面まで掘り下げたところ、断面形は浅い「U」字状で、深さ0.1mを測る。

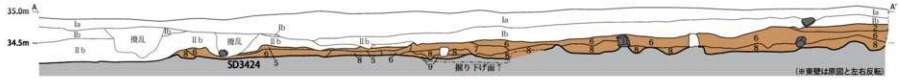
〔**堆積土**〕1 層確認し、自然堆積とみられる。

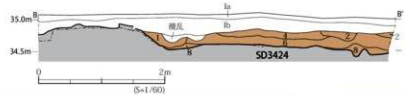
〔**出土遺物**〕瓦質土器が出土した。

⑤その他の遺構

A-1区のN111・W53付近で柱穴１個（図版７-P1）を検出した。建物等としてこれと組み合う柱穴は確認されない。直径約0.8mの円形の柱抜取穴を検出し、東半部を掘り下げたところ、深さ0.3m付近で柱痕跡と掘方埋土を確認した。柱抜取穴により大きく壊されるため、掘方の平面形は不明である。柱痕跡は直径0.2～0.3mの円形と推定される。出土遺物には土師器の甕、須恵器の坏がある。

図版９　A-2区西　遺構図（１）





遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SD3424	1	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	細砂・酸化鉄を含む、地山粒・炭化物粒をわずかに含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質砂	酸化鉄を含む	
	3	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒・酸化鉄を含む	
	4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	細砂・地山粒・酸化鉄を含む	
	5	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒・小礫・灰黄色シルトブロックを少量含む	
	6	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト質砂	細砂・地山粒・酸化鉄を含む	
	7	灰黄褐色(10YR4/2)	砂	地山粒を少量含む	
	8	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	細砂・地山粒・小礫を含む	
	9	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	地山粒・小礫を多く含む	

1．SD3424（北から） Z8719

3．SD3424瓦出土状況（西から） Z8721

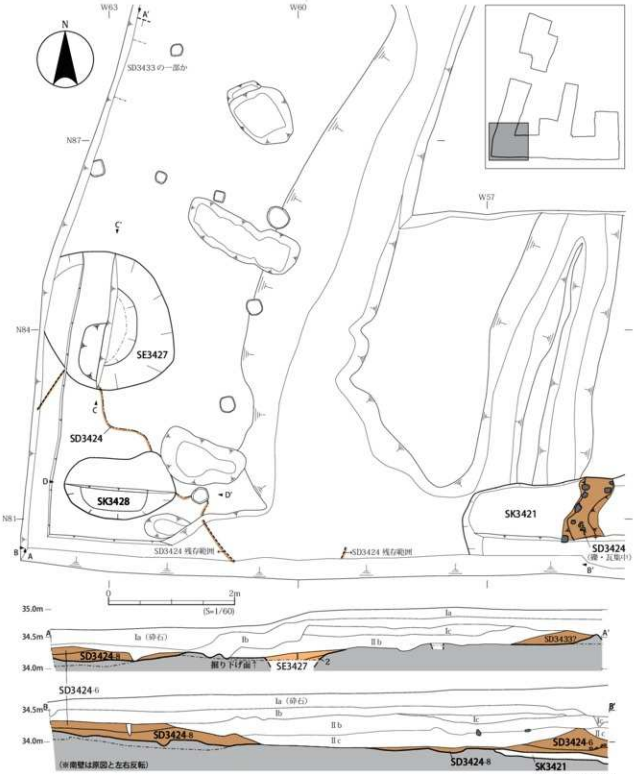
5．SE3427断面（東から） Z8730

2．SD3424断面（南から） Z8724

4．SE3427、SK3428（西から） Z8733

6．SK3428断面（南から） Z8731

図版10　A-２区西　遺構図（２）・写真



遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SE3427	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	礫を少し含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	炭化物・礫を少し含む	
	3	褐灰色(10YR4/1)	粘土	炭化物を多く含む(上面に薄い層状に堆積)、地山ブロックを少し含む	人為
	4	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土質シルト	夾大の礫・地山ブロックを多く含む	
SK3428	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物多く含む(西半部検出面に多い)、地山ブロック少し含む	自然堆積

※土層注記については、SD3424は図版10、SD3433は図版14、SK3421は図版14～16参照

図版11　A-2区西　遺構図(3)

2）A区中央部の遺構と出土遺物

①掘立柱建物

【SB3416掘立柱建物】（図版12・13）

〔検出〕A-2区中央を拡張したN88～89・W46～51で２個の柱穴（東西１間分）を検出した。建物全体の規模・棟方向は確定していないが、南側と東側では柱穴が検出されなかったため、西側と北側の調査区外に広がるとみられる。東からSB3416-P1・P2とする。柱穴を一段掘り下げたところ、いずれも建て替えがあり、古段階をA、新段階をBとする。Aの柱の抜取穴をBの掘方としており、Bの柱も抜き取られている。

〔重複〕P1はSK3430土坑と重複し、これより古い。

〔柱間〕B期の柱抜取穴の中央で測ると約3.2mである。

〔方向〕東西基準線に対して東で南へ２°偏する。

〔柱穴〕A掘方の平面は隅丸方形で、残存部分で測るとP1は東西1.0m、南北1.2m、P2は東西1.2m、南北1.0mで、両者は南辺をほぼ揃えている。掘方埋土は灰黄褐色(10YR4/2)または褐色(7.5YR4/6)粘土質シルトで、地山ブロックを非常に多く含む。

B掘方の平面は、P1が南北1.1m、東西1.0mの楕円形を呈する。P2は東西1.0m、南北0.8mの隅丸方形で、西辺と南辺はAとほぼ同位置にあるとみられる。掘方埋土は黄褐色(10YR4/3)を基調とする粘土質シルトで、地山ブロックを多く含む。

〔出土遺物〕B期では、P1確認面から平瓦ⅡB類bタイプ、P1柱抜取穴から不明鉄製品、P2柱抜取穴から須恵器の甕と平瓦ⅡB類、A期では、P2掘方埋土から平瓦が出土した。

②柱列

【SA3417柱列】（図版12・13）

〔検出〕A-2区中央のN87～98・W43～45において、南北方向に３間分、北端で西方向に折れて１間分の合計５個の柱穴を検出した。柱穴の形態・規模が類似するため、これらを一連の柱列と認定したが、調査区外に広がる建物の可能性もある。すべての柱穴を一段掘り下げ、柱痕跡を確認した。

〔重複〕SD3429溝と重複し、これより古い。

〔規模〕柱痕跡の中心で計測すると、南北方向は総長9.37mで、柱間は南から3.02m、3.39m、2.96mである。東西方向の柱間は1.36mを測る。

〔方向〕南北方向の柱列は、南北基準線に対して北で東へ１°偏する。東西方向は、東西基準線に対して西で南へ５°偏しており、やや鋭角に折れる。

〔柱穴〕掘方の平面形はいずれも隅丸方形を基調とし、一辺0.5～0.8mで、北東角の柱穴がやや東西に長いほかは正方形に近い。掘方埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトで、地山小ブロックをやや多く含む。柱痕跡はいずれも直径15～20cmの円形を呈し、堆積土は灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、炭化物粒・地山粒を少量含む。

〔出土遺物〕須恵器の甕、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。平瓦ⅡB類にはaタイプ１がある。

③竪穴建物

【SI3418竪穴建物】(図版12・13)

〔**検出**〕A-2区中央のN96・W42付近で、竪穴建物の南西隅と、西辺から西方向に延びるカマド煙道を検出した。北側は第Ⅱ層に覆われており、東側は調査区外に広がる。

〔**規模**〕南北0.8m以上、東西0.4m以上で、西辺から幅0.2m、長さ1.0mの煙道が延びる。

〔**堆積土**〕平面検出のみだが、地山小ブロックを多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトが分布する。また、カマド燃焼部～煙道付近には焼土粒・炭化物粒が含まれる。

〔**出土遺物**〕カマド北側壁とみられる部分に瓦２点が埋まっているが、今回の調査では取上げていない。

④溝

【SD3429溝】(図版12・13・20)

〔**検出**〕A-2区中央のN90～94・W42～47で東西方向の溝を検出し(図版12)、その延長とみられる溝をA-2区東のN88～N91・W31～37で、さらに「Ｔ」字に接続する南北方向の溝をN82～89・W34～36で検出した(図版20)。

〔**重複**〕SA3417柱列と重複し、これより新しい。

〔**方向**〕東西溝が基準線に対し東で南へ約10°偏し、南北溝が基準線に対し北で東に約15°偏する。

〔**規模**〕東西の溝は、A-2区中央では幅1.9m、検出長3.8m、A-2区東では幅2.0m、検出長5.0mで、未調査範囲を含めると検出した全長は15.1mを測る。南北の溝は幅1.4m、検出長6.2mである。一部を除いて底面まで掘り下げたところ、断面形は浅い「Ｕ」字状で、深さは最大0.2mである。底面標高は、東西方向の西端が34.3m、東端が33.0mで西から東へ下り、南北方向の南端が33.4m、北端が33.3mである。

〔**堆積土**〕1層確認し、自然堆積とみられる。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・甕、須恵器の甕、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ・ⅡＣ類、近世以降の磁器が出土した。

⑤土坑

【SK3430土坑】(図版12・13)

〔**検出**〕A-2区中央を拡張したW46～49・N87～90で検出した。

〔**重複**〕SB3416-P1、柱穴P2と重複し、これらより新しい。

〔**規模**〕平面は東西に長い隅丸方形で、規模は東西3.0m、南北2.2mである。土層観察用ベルト２本を残して底面まで掘り下げたところ、断面形は浅い「Ｕ」字状で、深さ0.1mを測る。

〔**堆積土**〕２層確認し、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕土師器の甕、須恵器の坏・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ類、近世以降の陶器が出土した。

【SK3431土坑】(図版12)

〔検出〕A-2区中央のN87・W47付近で検出した。全体を一段掘り下げたが、柱痕跡は検出されないため、土坑とした。

〔規模〕平面形は東西に長い隅丸方形で、規模は東西1.8m、南北1.2mである。

〔堆積土〕黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、地山小ブロック・礫を多く含み、埋め戻しとみられる。

〔出土遺物〕なし。

⑥その他の遺構

A-2区中央を拡張したN89・W49付近で柱穴1個(図版12-P2)を検出した。建物等として組み合う柱穴は確認されないが、SB3416の柱穴の近くにあり、平面形や規模も類似するため、調査区外北西側に広がる建物の可能性がある。SK3430と重複し、これより古い。全体を一段掘り下げたところ、掘方平面形は一辺0.8mの隅丸方形を呈し、埋土は褐色(7.5YR4/6)粘土質シルトで、地山小ブロックを多く含む。また、中央やや北寄りで直径38cmの円形の柱痕跡が検出され、堆積土は灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、地山小ブロック・炭化物を含む。遺物は出土していない。

3)A区南部の遺構と出土遺物

①溝

【SD3419溝】(図版15・17)

〔検出〕A-2区南のN84～86・W43付近で検出した、南北方向の溝である。

〔重複〕SK3421と重複し、これより古い。

〔方向〕南北基準線より北で東へ1°偏する。

〔規模〕幅0.4m、検出長1.1mである。調査区北壁際を断ち割ったところ、断面形は逆台形で、深さ0.1mを測る。

〔堆積土〕2層確認し、いずれも自然堆積とみられる(図版15断面D-D')。

〔出土遺物〕須恵系土器の坏・坏または皿、平瓦IC類が出土した。

【SD3432溝】(図版14・15)

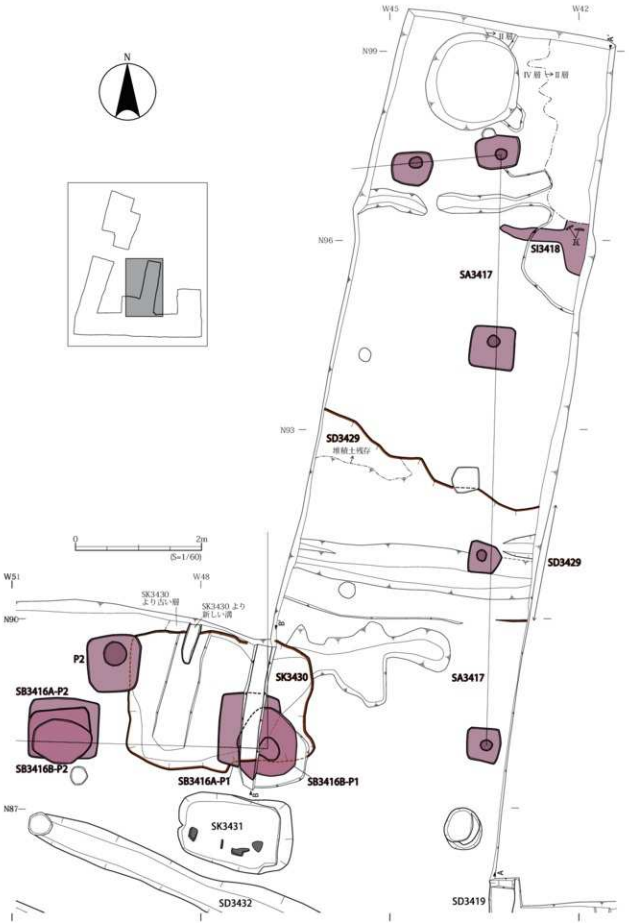
〔検出〕A-2区南のN83～87・W42～51で検出した、東西方向の溝である。

〔重複〕SK3421土坑と重複し、これより新しい。

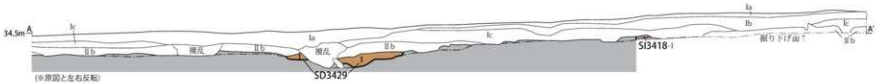
〔方向〕東西基準線より東で南へ約23°偏する。

〔規模〕幅1.1m、検出長8.8mである。SK3421と重複する一部分を除いて底面まで掘り下げており、断面形は浅い「U」字状で、深さは0.1m、底面標高は西端が35.2m、掘り下げた範囲の東端が35.0mで、西から東へ下る。

〔堆積土〕褐灰色(10YR4/1)の粘土質シルトで、地山小ブロックを含む。

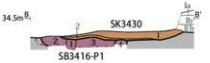


図版12　A-2区中央　遺構図(1)



遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SI3418	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	入為
SD3429	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒・小ブロックを少し含む	自然堆積

0 2m (S=1/60)



遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SK3430	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・小ブロックを含む	自然堆積
	2	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックを少し含む	
SB3416 P1	1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	B柱抜取穴埋土
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	地山小ブロック・灰黄褐色シルト小ブロックを多く含む	B掘方埋土
	3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒～ブロックを多く含む	
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒～ブロック、小礫を非常に多く含む	A掘方埋土

2．A-2区中央・拡張区全景（南東から） Z8765

4．A-2区中央全景（北から） Z8767

1．SB3416-P1、SK3430断面（東から） Z8781

3．SB3416（南から） Z8780

図版13　A-2区中央　遺構図（2）・写真

〔**出土遺物**〕須恵器の甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類が出土した。

【SD3433溝】（図版14・15）

〔**検出**〕A-2区南のN82～86・W43～54で検出した東西方向の溝である。

〔**重複**〕SK3421土坑と重複し、これより新しい。

〔**方向**〕東西基準線より東で南へ約23°偏する。

〔**規模**〕幅0.8m、検出長10.1mである。SK3421と重複する一部分を除いて底面まで掘り下げており、断面形は浅い「U」字状で、深さ0.1mを測る。底面標高は西端が35.2m、掘り下げた範囲の東端が35.0mで、西から東へ下る。

〔**堆積土**〕調査区壁面で3層確認し、底面には凹凸がみられる（図版14断面B-B'）。また、A-2区西の西壁で確認した黒褐色土（図版11断面A-A'）は、位置的にSD3433の続きの可能性がある。

〔**出土遺物**〕土師器の高台坏、丸瓦Ⅱ類が出土した。

【SD3438溝】（図版15）

〔**検出**〕A-2区南のN80・W44付近で、断面のみ確認した（図版15断面A-A'）。

〔**重複**〕SK3421と重複し、これより新しい。

〔**規模**〕断面形は逆台形で、幅0.8m、深さ0.1mである。

〔**堆積土**〕1層確認し、自然堆積とみられる。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の瓶または甕、須恵系土器の坏・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。

②土坑

【SK3420土坑】（図版15～17）

〔**検出**〕A-2区南のN81～84・W39～42で検出した。

〔**重複**〕SK3421・3435土坑と重複し、これらより古い。

〔**規模**〕平面は南北に長い不整形で、規模は東西1.7m以上、南北2.5mを測る。SK3421のサブトレンチ②部分で底面まで掘り下げており、断面形は逆台形状で、北壁がオーバーハングする（図版16断面J-J'）。深さは0.3mである。

〔**堆積土**〕全体が地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。また、上面を覆うように灰白色火山灰層（第Ⅲ層）が堆積する。

〔**出土遺物**〕土師器の坏、須恵器の坏、碁石とみられる石製品が出土した。

【SK3421土坑】（図版14～17、遺物図版18・19・23・24）

〔**検出**〕A-2区南のN79～86・W39～58で検出し、南側は調査区外へ広がる。サブトレンチを南北方向に2本（①②）、「L」字形に2本（③④）設定し、底面まで掘り下げた。西半部のサブトレンチ③では全体

が地山を底面としているのに対し、東半部のサブトレンチ①②④では、部分的に地山を掘りくぼめた部分を埋め戻した状況が観察され、この埋土層（大別９層）上面を底面とする。

〔**重複**〕SD3419・3432・3433・3438溝、SD3424自然流路、SK3420・3422・3434・3435土坑と重複し、SD3419とSK3420より新しく、SD3424・3432・3433、SK3422・3434・3435より古い。SK3420との間には灰白色火山灰層（第Ⅲ層）を挟む。SK3422は本遺構の大別４層上面で掘り込まれ、大別１層に覆われる。

〔**規模**〕西半部のサブトレンチ③付近では、平面で西辺と北辺が直線的に検出され、東半部では攪乱や重複遺構の影響もあって、形態を明確に捉えられない。規模は調査区断面で確認した範囲も含めると、東西18.0ｍ、南北6.4ｍに及ぶ。南北方向の断面は、西半部（図版16断面F-F'）では底面が平坦で北壁がやや急に立ち上がるのに対し、東半部（図版16断面G-G'・J-J'）では掘方底面に段差や凹凸が多く、北壁は緩やかに立ち上がる。深さはサブトレンチ①で最大0.8ｍを測る。また、調査区南壁（図版14・15断面A-A'）で確認した東西方向の底面標高は、西半部が33.6～33.8ｍ、東半部が33.2～33.4ｍで、全体的には東に向けて緩やかに下がり、東西両側の壁は緩やかに立ち上がる。

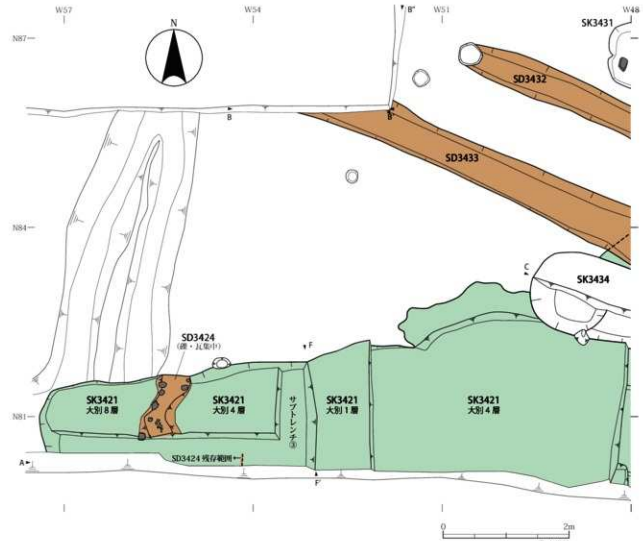
〔**堆積土**〕サブトレンチの断面図ごとに番号を付けて土層注記したうえで、サブトレンチ間で確実に対応する層を基準として、それ以外の層は土色・土性等の特徴や新旧関係から対応関係を推定し、１～９層の大別層を設定した。このうち、比較的広範囲で対応関係が認められる層を図版16の断面図に色別で示した。大別１層は黒褐色のシルトで、炭化物や須恵系土器小片を多く含む。SK3422を含む土坑全体を覆う層として広く分布する。大別２層は、灰黄褐色・暗褐色のシルトで、サブトレンチ①のみで確認した。大別３層は褐灰色のシルト層で、炭化物をやや多く含む。サブトレンチ①から④の西部にかけて分布する。大別４層は黄色みを帯びたシルト質粘土層で、炭化物は少ない。すべてのサブトレンチで確認し、土坑全体に広く分布する。大別５層は暗褐色シルトで、サブトレンチ①のみで確認した。大別６層は黒褐色シルト層で、炭化物や須恵系土器を含む。サブトレンチ①③④で確認し、主に土坑の北壁際に堆積する。大別７層は褐灰色粘土質シルトで、サブトレンチ①③で確認した。大別８層は黄褐色を基調とする層で、すべてのサブトレンチで確認し、底面付近に広く分布する。大別１～５・７・８層は自然堆積とみられ、６層は土器や炭化物を多く含むことから廃棄層の可能性がある。９層は地山ブロックを多く含む褐灰色・灰黄褐色粘土質シルトで、人為堆積とみられる。東半部のサブトレンチ①②④で確認し、特に東端部の④では第Ⅲ層由来の灰白色火山灰をブロック状に含む。

〔**出土遺物**〕各層から多数出土しており、ここでは下層から順に記述する。

［**大別９層**］土師器の坏・高台坏、須恵器の坏・瓶・甕、須恵系土器の坏・坏または皿・高台坏または高台皿・鉢、丸瓦Ⅱ・Ⅱ Ｂ類、平瓦Ⅰ Ａ・Ⅱ Ｂ・Ⅱ Ｃ類が出土した。平瓦Ⅰ Ａ類にはaタイプ、平瓦Ⅱ Ｂ類にはaタイプ１がある。

［**底面**］土師器の坏（図版18-１）、須恵系土器の坏（２）・坏または皿・高台坏（３）、平瓦Ⅱ Ｂ類が出土した。

［**大別８層**］土師器の坏（４・５）・高台坏・鉢または埦・甕、須恵器の坏・瓶または甕・甕、須恵系土器の坏（６～９）・坏または皿（10）・高台坏・高台皿（11）・鉢、丸瓦Ⅱ・Ⅱ Ｂ類、平瓦Ⅰ Ａ・Ⅱ Ｂ・Ⅱ Ｃ類、転用

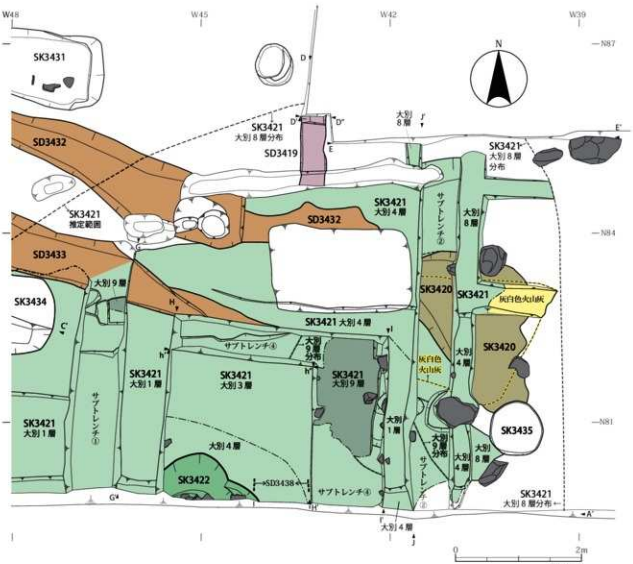


遺構	層	土色	土性	含有物など
SD3433	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒・小礫を含む
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒・小礫を含む
	3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒・小礫を多量に含む
SK3434	1	に示い黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物・灰・木枝・種実を含む
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物・木枝を含む
	3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物・木枝・小礫・灰黄褐色シルト小ブロックを含む

※SD3424 の土層注記は図版 10 参照

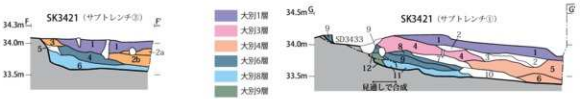
遺構	層	土色	土性	含有物など
SK3434	4	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	炭化物・小礫を含む
	5	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物・木枝を含む、灰黄褐色と互層状になる
	6	暗灰黄色(7.5Y4/2)	シルト	小礫を含む
	7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒を少量含む
	8	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒・小礫をわずかに含む
	9	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	地山粒・植物遺体を多く含む
	10	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	地山粒を多量に含む
	11	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	地山粒・SK3421由来のに示い灰黄褐色粒を含む

図版14　A-2区南　遺構図（1）



遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SK3422	1	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物・土器小破片を含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	炭化物・土器小破片を少し含む	
	3	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックを含む、炭化物をわずかに含む	
	4	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む	
SD3438	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物粒を少し含む	自然堆積
SD3419	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒をわずかに含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒をやや多く含む	自然堆積か

図版15　A-2区南　遺構図（2）



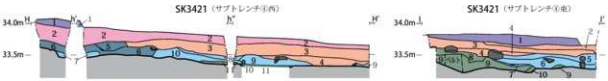
SK3421サブトレンチ③

層	土色	土性	含有物など	大刃
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物・頭恵系土器小片をやや多く含む	1
2a	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	炭化物を少し含む、サビ多い	4
2b	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	地山ブロックをやや多く含む	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	炭化物粒を多く含む	
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	6
5	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物粒・地山粒・小礫を含む	7
6	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	8

層	土色	土性	含有物など	大刃
4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物をやや多く、地山粒・小ブロックを少し含む	3
5	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	4
6	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物を含む、地山粒・小礫を少し含む	5
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・頭恵系土器小片を多く含む、灰黄褐色シルト小ブロックを含む	6
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・頭恵系土器小片をやや多く含む、灰黄褐色シルト小ブロックを多く含む	
10	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物粒・地山小ブロック・小礫を含む	7
11	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	8
12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒・小礫を多く含む、炭化物粒を含む	9

SK3421サブトレンチ⑤

層	土色	土性	含有物など	大刃
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物をやや多く、頭恵系土器小片を多く含む	1
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物・地山粒・小ブロックを含む	2
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物をやや少し含む	

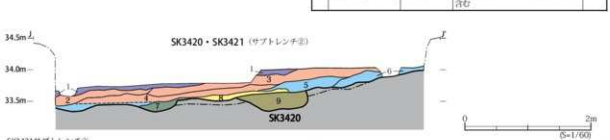


SK3421サブトレンチ④西

層	土色	土性	含有物など	大刃
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物をやや多く、頭恵系土器小片を多く含む	1
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物をやや多く、地山粒・小ブロックを少し含む	3
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	4
4	褐灰色(10YR4/1)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・頭恵系土器小片を多く含む、灰黄褐色シルト小ブロックを含む	6
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・頭恵系土器小片をやや多く含む、灰黄褐色シルト小ブロックを多く含む	
7	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト質粘土	地山ブロックを少し含む	
8	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	赤化物・地山粒・炭化物を含む	
9	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒・灰白色火山灰小ブロックを含む	8
10	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山粒・炭化物を含む	
11	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	地山粒を多く含む	9

SK3421サブトレンチ④東

層	土色	土性	含有物など	大刃
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物をやや多く、頭恵系土器小片を多く含む	1
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	4
3	褐灰色(10YR4/1)	シルト質粘土	炭化物をわずかに含む	
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	にぶい黄橙色シルト小ブロック・灰白色火山灰粒をやや多く含む	
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒を含む、灰白色火山灰小ブロックをやや多く含む	8
6	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒・灰白色火山灰小ブロックを含む	
7	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒・灰白色火山灰粒を少し含む	
8	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを多く、炭化物・灰白色火山灰粒をやや多く含む	
9	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを非常に多く、灰白色火山灰小ブロックをやや多く、炭化物粒を少し含む	9
10	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山小ブロックをやや多く、灰白色火山灰小ブロック・炭化物粒を含む	



SK3421サブトレンチ②

層	土色	土性	含有物など	大刃
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物をやや多く、頭恵系土器小片を多く含む	1
2	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土小ブロックを含む	4
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物・地山粒を含む	
4	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト質粘土	黒褐色シルト粒・地山粒を含む	
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む	8

層	土色	土性	含有物など	大刃
6	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	炭化物・地山小ブロックを含む	8
7	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	地山粒・小ブロックを多く含む	9
8	灰白色火山灰層		灰黄褐色(10YR6/2)シルトブロックを含む	第II層
9	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	地山粒・小ブロック・小礫を多く含む、炭化物を少し含む	SK 3420

図版16　SK3420・SK3421断面図

1．A-2区南　遺構検出状況全景（東から）　Z8784

2．SD3419断面（南から）　Z8801

3．SK3421 サブトレンチ①断面（西から）　Z8789

4．SK3420・3421 サブトレンチ②断面（北東から）　Z8795

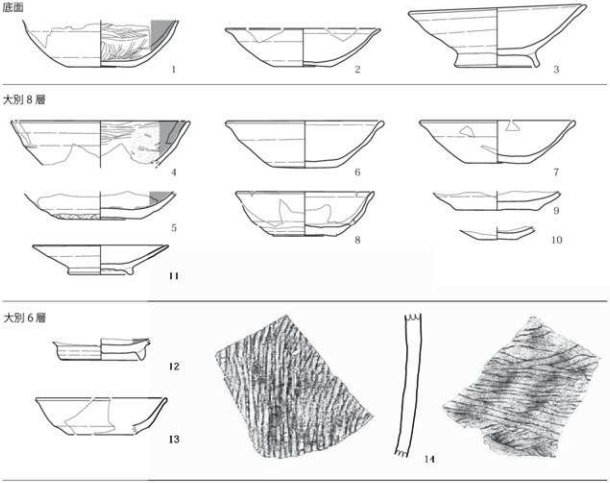
5．SK3421 サブトレンチ③断面（西から）　Z8788

6．SK3421 サブトレンチ④（北から）　Z8823

7．SK3422断面（北から）　Z8814

8．SK3434断面（南から）　Z8799

図版17　A-2区南　遺構写真

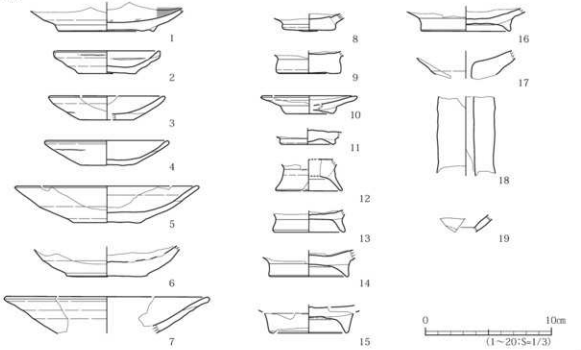


（単位：cm）

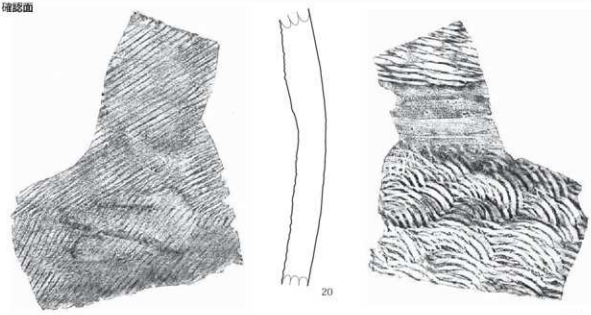
No.	層	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	遺番号
1	底面	土師器　坏	体～底部1/1	—	5.2	—	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整	23-1	R12	B16071
2	底面	須恵系土器　坏	口1/4～底部1/1	(12.3)	4.5	3.0	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	23-2	R13	B16071
3	底面	須恵系土器　高台坏	ほぼ完形	14.2	6.7	5.0	外：ロクロナデ　内：コテナデ	23-3	R16	B16071
4	大別8層	土師器　坏	口～体部1/4	(14.2)	—	—	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ→黒色処理	23-4	R18	B16071
5	大別8層	土師器　坏	体～底部1/2	—	6.4	—	外：ロクロナデ→(体下)手持ちケズリ　内：放射状ミガキ→黒色処理　底：回転糸切り無調整	23-7	R19	B16071
6	大別8層	須恵系土器　坏	口1/3～底部3/4	(12.6)	5.1	3.8	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	23-6	R23	B16071
7	大別8層	須恵系土器　坏	口1/4～底部1/1	(12.4)	5.0	3.4	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-5	R24	B16071
8	大別8層	須恵系土器　坏	口1/3、底部3/4	(11.0)	5.0	(3.5)	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整　口縁部と底部は非接合	23-8ab	R25	B16071
9	大別8層	須恵系土器　坏	体～底部1/2	—	6.6	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-9	R30	B16071
10	大別8層	須恵系土器　坏or皿	体～底部1/1	—	3.0	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-10	R32	B16071
11	大別8層	須恵系土器　高台皿	口3/4～底部1/1	10.8	5.2	2.4	外：ロクロナデ　内：コテナデ	23-11	R37	B16071
12	大別6層	土師器　高台坏	底部1/2	—	6.5	—	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ→黒色処理	23-12	R46	B16072
13	大別6層	須恵系土器　坏	口～底部	(10.4)	(5.1)	2.9	外：ロクロナデ　内：コテナデ	23-13	R47	B16072
14	大別6層	須恵器　鉢or甕	胴部	—	—	—	外：平行タタキ　内：ヘラミガキ	23-14	R55	B16072
15	大別4層	須恵系土器　坏	口1/6～底部1/1	(13.3)	5.4	3.9	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	23-15	R65	B16072
16	大別4層	須恵系土器　坏	口1/2、底部1/6	12.8	(5.8)	(3.2)	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい（口縁部と底部は非接合）	23-17ab	R69	B16072
17	大別4層	須恵系土器　坏	口1/2～底部3/4	(10.6)	5.0	3.5	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-16	R70	B16072
18	大別4層	須恵系土器　高台皿	口縁部1/8	(14.4)	—	—	外内：ロクロナデ	23-18	R82	B16072

図版18　SK3421土坑出土遺物（1）

大別1層



確認面



（単位：cm）

No.	層	時期	器種	現存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	新番号
1	大別1層	土師器	高台椀	底部1/2	—	7.6	—	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ→黒色処理	23-19	R108	B16073
2	大別1層	須恵系土器	小皿	口3/4～底部1/1	8.5	4.5	1.8	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	23-21	R111	B16073
3	大別1層	須恵系土器	小皿	口～底部1/4	(9.2)	(4.3)	1.9	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-20	R153	B16073
4	大別1層	須恵系土器	小皿	口1/3～底部1/1	(9.9)	4.0	2.0	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-22	R112	B16073
5	大別1層	須恵系土器	坏	口1/8～底部1/3	(14.6)	(5.2)	2.9	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	23-26	R114	B16073
6	大別1層	須恵系土器	坏	体～底部1/1	—	6.3	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-23	R116	B16073
7	大別1層	須恵系土器	坏	口縁部1/6	(16.4)	—	—	外内：ロクロナデ	23-34	R117	B16073
8	大別1層	須恵系土器	坏or皿	底部1/1	—	4.0	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	23-24	R136	B16073
9	大別1層	須恵系土器	坏	底部1/1	—	5.0	—	外内：ロクロナデ　底部柱状高台　器面の風化が著しい	23-25	R137	B16073
10	大別1層	須恵系土器	高台皿	口～底部1/3	(7.6)	(3.7)	1.4	外内：ロクロナデ	23-33	R147	B16073
11	大別1層	須恵系土器	高台皿	底部1/1	—	4.4	—	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	23-31	R142	B16073
12	大別1層	須恵系土器	高台付or皿	底部1/6	—	(5.3)	—	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	23-32	R143	B16073
13	大別1層	須恵系土器	高台付or皿	底部1/1	—	5.7	—	外内：ロクロナデ	23-27	R149	B16073
14	大別1層	須恵系土器	高台付	底部1/1	—	6.3	—	外内：ロクロナデ	23-28	R150	B16073
15	大別1層	須恵系土器	高台付	底部3/4	—	6.3	—	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	23-29	R151	B16073
16	大別1層	須恵系土器	高台付	底部4/5	—	7.1	—	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	23-30	R152	B16073
17	大別1層	須恵系土器	高坏	体部1/6	—	—	—	器面の風化が著しい	23-35	R154	B16073
18	大別1層	須恵系土器	高坏or器台	脚部1/4	—	—	—	脚部径(4.4cm)　器面の風化が著しい	23-36	R157	B16073
19	大別1層	白磁	椀	体部	—	—	—	太宰府分類白磁椀IV類	24-2	No.323	B14314
20	確認面	須恵器	甕	胴部	—	—	—	外：平行タタキ　内：(上)平行刷み目当て具・(下)同心円当て具→ナデ	24-4	R176	B16074

図版19　SK3421土坑出土遺物（2）

砥、鉄滓が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプとbタイプ、平瓦ⅡB類にはaタイプ2とbタイプがある。

[大別6層]土師器の坏・高台坏(12)・高台埦・甕、須恵器の鉢・甕(14)、須恵系土器の坏(13)・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿・鉢、軒平瓦、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA類・ⅡB類、転用砥、石製品(支脚か)が出土した。軒平瓦は単弧文640aで、平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

[大別4層]土師器の坏・高台坏・鉢または埦・甕、須恵器の坏・瓶・甕、須恵系土器の坏(15～17)・小皿・坏または皿・高台坏または高台皿・高台皿(18)・鉢・台付鉢、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類、円盤状土製品、鉄滓が出土した。軒平瓦は均整唐草文721Aのbタイプで、平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1とbタイプがある。円盤状土製品は平瓦Ⅰ類の周囲を打ち欠いたものである。

[大別3層]土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・瓶・甕、須恵系土器の坏・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類、転用砥、鉄鎌が出土した。軒丸瓦は型番不明の重弁蓮花文である。

[大別2層]土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の甕、須恵系土器の坏・坏または皿・高台坏または高台皿、丸瓦のⅡ・ⅡB類、平瓦のⅠA・ⅡB類、転用砥が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

[大別1層]土師器の坏・高台坏・高台埦(図版19-1)・甕、須恵器の坏・長頸瓶・瓶(図版24-1)・甕(図版19-20)、須恵系土器の坏(5～7・9)・小皿(2～4)・坏または皿(8)・高台坏(14～16)・高台皿(10・11)・高台坏または高台皿(12・13)・高坏(17)・高坏または器台(18)・鉢、白磁の碗(19)、緑釉陶器の埦(図版24-3)、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠB・ⅠC・ⅡA・ⅡB・ⅡC類、転用砥、碁石とみられる石製品、器種不明の鉄製品、椀形滓が出土した。須恵器瓶には大戸窯産(図版24-1)、緑釉陶器埦には猿投窯産(3)がある。軒平瓦は二重弧文もしくは三重弧文で、平瓦のⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1・2とbタイプがある。

[確認面]土師器の坏・甕、須恵器の坏・長頸瓶・瓶または甕・甕(図版19-20)、須恵系土器の坏・坏または皿・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠB類にはaタイプ1・2がある。

【SK3422土坑】(図版15・17、遺物図版22・24)

〔検出〕A-2区南のN80・W45付近で検出し、南側は調査区外へ広がる。

〔重複〕SK3421土坑と重複し、SK3421の大別4層上面で掘り込まれ、最終的には大別1層に覆われる。大別2・3層との関係は不明である。

〔規模〕平面は不整な円形と推定され、規模は東西1.5m以上、南北0.7m以上である。底面まで掘り下げたところ、調査区南壁で確認した断面形は浅い「U」字状で、深さ0.3mを測る。

〔堆積土〕4層確認し、いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器の坏・高台坏(図版22-1)、須恵系土器の坏(3)・小皿(2)・坏または皿(4)・高台皿(5・6)・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類、碁石とみられる石製品が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

【SK3434土坑】（図版14・15・17、遺物図版24）

〔**検出**〕A-2区南のN83・W48付近で検出した。

〔**重複**〕SK3421土坑と重複し、これより新しい。

〔**規模**〕平面は東西に長い楕円形で、規模は東西2.3m、南北1.3mである。南半部を掘り下げたところ、底面と壁は西半部が地山の第Ⅳ層、東半部がSK3421堆積層であった。断面形は逆台形状で、深さは0.6mを測る。

〔**堆積土**〕11層確認し、1層から9層まで木枝や種実等の植物遺存体が含まれる。

〔**出土遺物**〕須恵器の甕、須恵系土器の坏・小皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡC類、板状の木製品、近世以降の陶器（図版24-19）・磁器（17・18・20）・土師質土器、動物遺存体、植物遺存体が出土した。図版24-17は肥前の仏飯器である。18は瀬戸美濃の小碗で19世紀前葉とみられる。19は嫻徳利で、外面に灰釉と緑釉で模様が描かれ、幕末～明治時代とみられる。20は肥前の脇皿で、内面見込み部に山水画が描かれ、口縁部に口銹が付着している。幕末頃とみられる。

【SK3435土坑】（図版15）

〔**検出**〕A-2区南のN81・W40付近で検出した。全体を一段掘り下げたが、柱痕跡等は確認されない。

〔**重複**〕SK3420・3421土坑と重複し、これらより新しい。

〔**規模**〕平面は円形で、規模は直径0.8～0.9mである。

〔**堆積土**〕黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、地山粒・小礫を含む。

〔**出土遺物**〕なし。

4）A区南東部の遺構と出土遺物

①溝

【SD3437溝】（図版20・21）

〔**検出**〕A-2区南東部のN79～83・W31～35で検出した2条の溝で、調査区南壁際で合流して「V」字状の平面形を呈する。平面・断面で新旧関係が確認されなかったため一連の溝とし、西からSD3437①②とする。①については平面図・断面図作成後にSK3423調査のため全体的に掘り下げた。

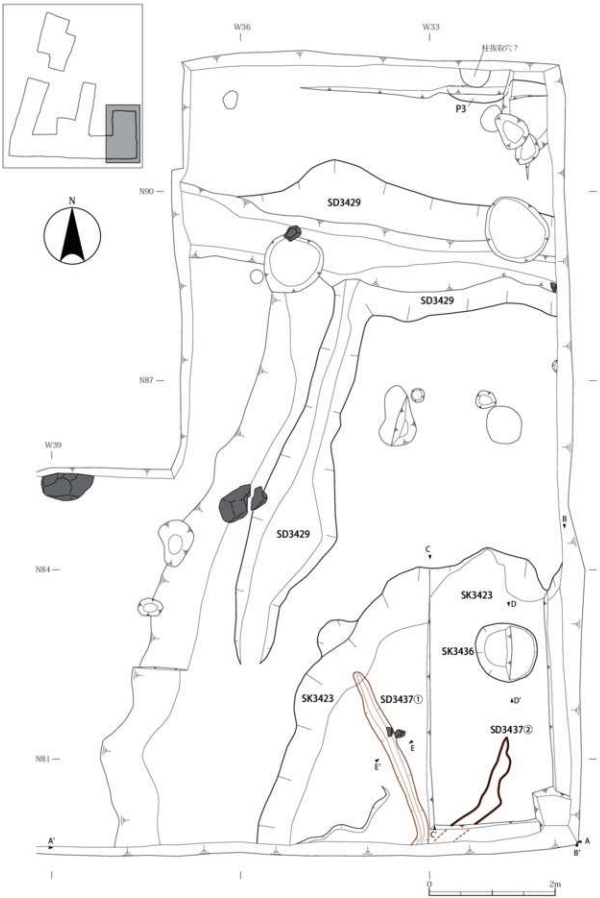
〔**重複**〕いずれもSK3423土坑と重複し、これより新しい。

〔**方向**〕①が南北基準線より北で西に23°偏する。②は屈折しており、北半部が南北基準線より北で東へ15°、南半部が北で東へ50°偏する。

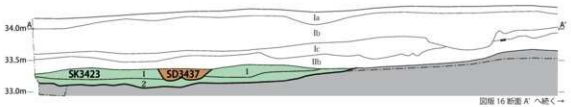
〔**規模**〕①が幅0.3m、検出長3.0m、②が幅0.3m、検出長2.0mだが、両者の合流する調査区南壁では、断面で幅が最大0.8mあることを確認した。断面形は浅い「U」字状を呈し、深さは調査区南壁で0.2mを測る。堆積土を完掘した①では底面標高が33.2m前後と明確な傾斜は認められない。

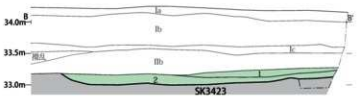
〔**堆積土**〕1層確認し、主にSK3423-1層由来の自然堆積とみられる。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の甕、須恵系土器の坏・小皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプがある。



図版20　A-2区東　遺構図（1）





遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SK3423	1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒(土器細片)が多く含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒・炭化物粒を多く含む	
	3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック・炭化物を多く含む	
SK3436	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト質粘土	地山粒を多く含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	サビを含む	
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山粒を多く含む	
	4	黒褐色(10YR3/2)	粘土	地山粒を少し含む	
SD3437	1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒をやや多く含む、炭化物粒を少し含む	自然堆積

1．A-2区東　検出全景(北から)　Z8833

2．SK3423断面(北西から)　Z8866

3．SK3423・SD3437断面(北から)　Z8854

4．SD3437①　Z8842
断面(北から)

5．SK3436断面　Z8856
(西から)

図版21　A-2区東　遺構図(2)・写真

②土坑

【SK3423土坑】（図版20・21、遺物図版22・24）

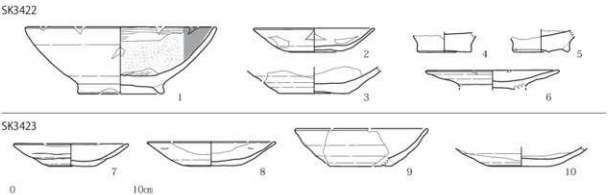
〔**検出**〕A-2区南東部のN79～85・W30～36で検出し、南側と東側は調査区外へ広がる。

〔**重複**〕SK3436土坑、SD3437溝と重複し、これらより古い。

〔**規模**〕凹凸が多い不整な円形と推定され、規模は東西4.9m以上、南北4.7m以上である。調査区の南と東壁際にサブトレンチを設定したほか、西半部を底面まで掘り下げた。断面形は浅い「U」字状で、底面には凹凸があり、深さ0.3mを測る。

〔**堆積土**〕3層確認し、いずれも自然堆積で、1・3層は黒みが強く、2層はやや明るい。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・高台坏・高台埦・鉢・甕、須恵器の坏・長頸瓶・甕、須恵系土器の坏（図版22-9・10）・小皿（7・8）・坏または皿・高台坏・高台皿・鉢、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅡB・ⅡC類、円面硯（図版24-15）が出土した。軒平瓦は単弧文640aで、平瓦のⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1～3がある。



（単位：cm）

No.	遺構・層	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	粘番号
1	SK3422埋	土師器　高台坏	口1/3～底部/1	(15.2)	6.8	5.3	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理	24-5	R179	B16070
2	SK3422埋	須恵系土器　小皿	口12/3～底部1/1	9.7	4.2	1.9	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	24-6	R178	B16070
3	SK3422埋	須恵系土器　坏	体～底部1/3	—	(5.6)	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	24-7	R182	B16070
4	SK3422埋	須恵系土器　坏or皿	底部1/1	—	4.3	—	外内：ロクロナデ　底部付区高台　器面の風化が著しい	24-8	R184	B16070
5	SK3422埋	須恵系土器　高台皿	底部3/4	—	4.5	—	外内：ロクロナデ　器面の風化が著しい	24-9	R185	B16070
6	SK3422埋	須恵系土器　高台皿	口～底部3/4	10.6	—	—	外内：ロクロナデ　(或)回転糸切り無調整→高台取付→ロクロナデ	24-10	R181	B16070
7	SK3423埋	須恵系土器　小皿	口1/4～底部1/1	(9.2)	4.0	1.8	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	24-11	R192	B16070
8	SK3423埋	須恵系土器　小皿	口～底部1/2	(10.2)	4.4	1.9	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	24-12	R193	B16070
9	SK3423埋	須恵系土器　坏	口～底部	(10.6)	(5.0)	(3.0)	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	24-13	R191	B16070
10	SK3423埋	須恵系土器　坏	体～底部1/1	—	5.5	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	24-14	R195	B16070

図版22　SK3422・3423土坑出土遺物

1～3：SK3421 底面、4～11：SK3421 大別8層、12～14：SK3421 大別6層、
15～18：SK3421 大別4層、19～36：SK3421 大別1層

（1～36：S=1/3）

図版23　A区出土遺物写真（1）

1～4：SK3421 大別1層、5～10：SK3422、11～15：SK3423、16：SE3427、17～20：SK3434　　（1～20：S=1/3）

図版24　A区出土遺物写真（2）

【SK3436土坑】（図版20・21）

〔**検出**〕A-2区南東部のN83・W32付近で検出した。

〔**重複**〕SK3423土坑と重複し、これより新しい。

〔**規模**〕平面は円形で、規模は直径0.8～1.0mである。西半部を底面まで掘り下げたところ、断面形は逆台形で、深さ0.3mを測る。

〔**堆積土**〕4層確認し、いずれも自然堆積である。

〔**出土遺物**〕土師器の坏、須恵器の長頸瓶、須恵系土器の坏、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

③その他の遺構

A-2区東のN92・W32付近で、柱穴の可能性のある遺構を検出した（図版20-P3）。黒褐色(10YR3/2)シルトが堆積する円形のピットが柱抜取穴、その周辺に分布する地山粒・小礫を多く含む層が掘方埋土の可能性がある。遺物は出土していない。

3．B区の調査成果

B区は政庁の北側、政庁正殿の基準点から北へ110～135m、東へ0～36mの範囲にある。政庁からは沢を隔てて北側の南斜面に位置する。公有化以前は宅地として利用されており、標高は31～32mとほぼ平坦である。旧地形は北西から南東方向へ下る傾斜があったと推定されるが、宅地造成の際に斜面が削られ、現在は北側と西側に大きな段差が見られる。そこで、遺構面が残存すると推定した南半部に東西方向のトレンチを2本設定し、西からB-1区、B-2区とした。それぞれの調査区で、表土から地山の間に複数の堆積層と遺構面を確認したが、層序を厳密に対応させることが難しいため、ここでは調査区ごとに分けて記述する。

（1）B－1区の調査

1）基本層序

第Ⅰ層：現代の表土・盛土である。調査区内は地山ブロックを多く含む土で広く盛土整地されており、その下ににぶい黄褐色を呈する盛土前の表土も認められた。いずれも現代の陶磁器を含む。最も厚い南東隅で、現地表面から約0.8mを測る。現表土をⅠa層、盛土をⅠb層、盛土前の表土をⅠc層と記載している。

第Ⅱ層：黒褐色(10YR3/2)シルトを基調とする層で、調査区北西隅を除いて広く分布し、調査区東壁で厚さ最大0.4mを測る。色調や混入物から3層に細分される。Ⅱa層は黒褐色(10YR3/2)シルトで、地山ブロック・須恵系土器片を多く含む。Ⅱb層は暗褐色(10YR3/3)シルトで、Ⅱa層より地山ブロックがやや少ない。Ⅱc層は黒褐色(10YR3/2)シルトで、Ⅱa・b層より地山ブロックが少ない。

第Ⅲ層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。比較的均質で、地山粒・炭化物粒を全体にまばらに含む。調査区東壁で厚さ最大0.4mを測る。

第Ⅳ層：黒褐色(10YR3/1)シルトで、褐色粒を含む。調査区南東隅のサブトレンチ内で断面のみ確認し、厚さ最大0.1mを測る。

第Ⅴ層：褐色(7.5YR4/4)シルトで、地山ブロックを密に含む部分とまばらな部分が不規則に分布する。遺物をごくわずかに含む。調査区南東隅で厚さ0.4m以上あることを確認した。

第Ⅵ層：地山。橙色(7.5YR6/6)の岩盤および風化岩塊である。部分的ににぶい褐色(7.5YR5/4)粘土質シルトとなる。断面図では薄いグレーで示している。

調査区北西隅では第Ⅰ層直下に第Ⅴ・Ⅵ層が分布し、北西隅以外ではその間に第Ⅱ層と第Ⅲ層が広く分布する。遺構は第Ⅲ層とそれより新しい整地層(SX3440)上面で検出した。SX3440上面の標高は30.5～31.2mで、北西から南東へ下る。調査区の全体的な掘り下げはこの面で止めたが、北壁と東壁際にサブトレンチを設定して下層の確認を行った。地山の第Ⅵ層は、最も高い調査区北西隅が標高31.3mで、南東側へ下り、東壁際では標高30.1mで確認した。さらに南東隅では29.8mまで掘り下げたが、第Ⅵ層は確認されなかった。

2）遺構と出土遺物

竪穴建物1棟、整地層2箇所、溝1条、小溝群2箇所を検出した。

①竪穴建物

【SI3439竪穴建物】(図版25・26、遺物図版27・28)

〔検出〕N113～117・E8～13で竪穴建物の一部を検出した。北壁際サブトレンチ内で、西壁とカマドの一部(燃焼部と南側壁)を検出し、東壁断面で南壁の立ち上がりを確認した。平面形は不明である。

〔重複〕SX3440整地層によって埋め戻されている。

〔規模〕東西4.0m以上、南北2.5m以上である。断面で確認した堆積土上面から床面までの深さは最大0.6mを測る。

〔床面〕調査区の北東隅では地山を床面とし、それ以外では掘方埋土(3層)を床面とする。

〔壁〕高さは最大0.5mで、床面からやや開くように立ち上がる。

〔堆積土〕上半部はSX3440整地層で埋め戻されている。下半部には自然堆積(1層)が確認され、カマド内には焼土・灰・炭化物を含む堆積土(2層)がみられる。

〔出土遺物〕床面から平瓦ⅠA類を用いた隅切瓦(図版27-2)が出土し、堆積土1・2層から土師器の坏・甕、須恵器の坏(1)・蓋・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類、動物遺存体(焼骨片)が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

②整地層

【SX3440整地層】(図版25・26、遺物図版28)

〔検出〕N112～117・E3～13で検出した。北東側は調査区外へ広がる。

〔重複〕SI3439竪穴建物、SD3444溝、SD3442・3443小溝群と重複する。SI3439より新しく、SI3439廃絶後の窪地を埋め戻して、さらにそれより広範囲に盛土整地したと推定される。また、SD3442～3444より古く、SX3440上面でこれらの遺構や小ピットを検出した。

〔規模〕東西9.2m、南北3.8mの範囲で検出し、調査区北壁断面で厚さ最大0.5mを測る。

〔埋土〕1層確認し、褐色(10YR4/6)シルトで地山ブロックを非常に多く含む。

〔出土遺物〕土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台坏・長頸瓶・甕、須恵系土器の坏・坏または皿、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・Ⅱ B類、平瓦Ⅰ A・Ⅰ B・Ⅱ B類、円面硯(図版28-4・5)、転用砥、釘とみられる鉄製品が出土した。軒平瓦は二重弧文511で、平瓦Ⅱ B類にはaタイプ1がある。図版28-3の平瓦は凸面に平行タタキ、凹面にナデが施される。

【SX3441整地層】(図版25・26)

〔検出〕N113～116・E2～4で検出した。西側は調査区外へ広がる。

〔重複〕上面で小ピットを検出した。

〔規模〕東西1.0m、南北2.1mの範囲に分布する。調査区西壁断面で厚さ最大0.4mを測り、整地層の南北両端が急角度で立ち上がることから、土坑や溝等の掘り込みを埋め戻した層の可能性もある。

〔埋土〕1層確認し、褐色(10YR4/6)シルトで地山ブロックを多く含む。SX3440に類似する。

〔出土遺物〕なし。

③溝・小溝群

【SD3442小溝群】(図版25・26)

〔検出〕N113～114・E6～9で北西-南東方向の小溝2条を検出した。西からSX3442①②とする。

〔重複〕SX3440整地層、SD3444溝と重複し、SX3440より新しく、SD3444より古い。

〔方向〕南北基準線より北で西に22～30°偏する。

〔規模〕最大幅0.2m、検出長0.7～1.3m、①②の間隔は心々間で1.6～1.7mである。断面形は浅い「U」字状で、深さは各溝の深いところで8～9cmを測る。

〔堆積土〕1層確認し、暗褐色シルト(10YR3/4)の自然堆積である。

〔出土遺物〕土師器の坏、須恵系土器の坏または皿、高台坏または高台皿が出土した。

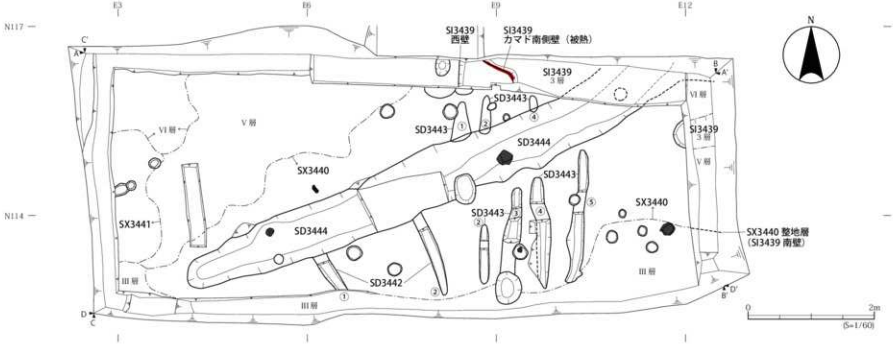
【SD3443小溝群】(図版25・26)

〔検出〕N113～116・E8～11で南北方向の小溝5条を検出した。西からSX3443①～⑤とする。

〔重複〕いずれもSX3440整地層と重複し、これより新しい。また、①②④はSD3444溝と重複してこれより古く、②④はそれぞれSD3444の南北両側に分かれる。

〔方向〕おおむね南北基準線に沿う。

〔規模〕最大幅0.3m、検出長は0.6～3.1m、①～⑤の各間隔は心々間で0.4～0.7mである。断面形は浅い「U」字状で、深さは各溝の深いところで4～15cmを測る。

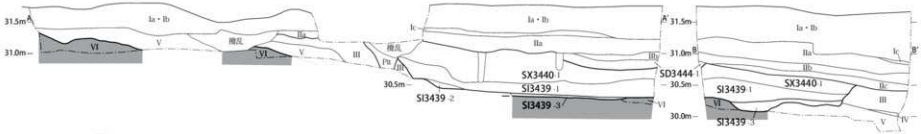


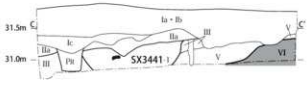
1．B-1区全景（東から）　Z8876

2．B-1区全景空中写真（上が北）　Z9017

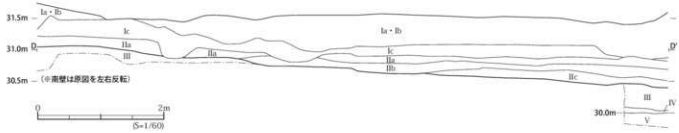
3．B-1区北壁際サブトレンチ（東から）　Z8891

図版25　B-1区　遺構図・写真（1）



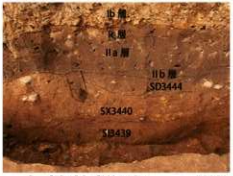


遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SD3444	1	明褐色	シルト	小礫を多く含む	自然堆積
SX3441	1	褐色(10YR4/6)	シルト	地山ブロックを多く含む、炭化物まばらに含む	整地層（遺構埋土か）
SX3440	1	褐色(10YR4/6)	シルト	地山ブロックを非常に多く含む、小礫・炭化物をまばらに含む	整地層
SI3439	1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックをまばらに含む	自然堆積
	2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土ブロックを非常に多く含む、炭・炭化物粒含む	カマド内堆積土
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロックを多く含む、やや粘土質	掘方埋土



1．SI3439西端断面（南西から） Z8895

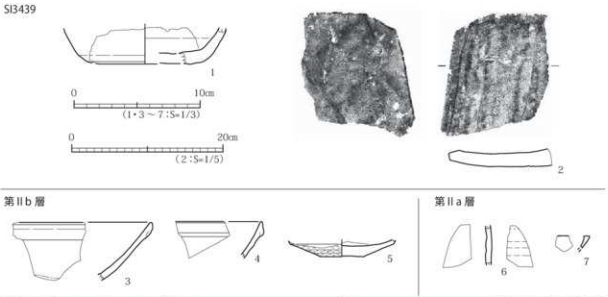
2．SI3439カマド断面（南東から） Z8899



3．SI3439・SX3440・SD3444断面（南から） Z8892

4．B-1区東壁断面（西から） Z8988

図版26　B-1区　遺構図・写真（2）



No.	層	種類	残存	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SI3439 1層	須恵器　坏	体～底部1/6	底径(9.2cm)　外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り→ナデ	28-1	R239	B16075
2	SI3439 床面	鍛冶具	破片	長(14.9cm)　幅(17.0cm)　厚(2.2cm)　平面1A類	28-2	R236	B16075
3	第Ⅱb層	白磁　碗	口縁部	外内：ロクロナデ　玉縁口縁　太宰府市分類白磁碗Ⅱ類	28-7	No.328	B14314
4	第Ⅱb層	白磁　碗	口縁部	外内：ロクロナデ　玉縁口縁　太宰府市分類白磁碗Ⅳ類	28-8	No.327	B14314
5	第Ⅱb層	白磁　皿	体～底部1/3	底径(3.4cm)　外：ロクロナデ→(体下)回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ　底面露胎　太宰府市分類白磁皿Ⅱ～Ⅳ類	28-9	No.329	B14314
6	第Ⅱa層	白磁　壺or水注	体部	外内：ロクロナデ	28-11	No.325	B14314
7	第Ⅱa層	白磁　合子	体部	外内：ロクロナデ	28-12	No.326	B14314

図版27　B-1区出土遺物

1・2：SI3439、3～5：SX3440、6：第Ⅱc層、7～10：第Ⅱb層、　(1・4～14：S=1/3、2・3：S=1/5)
11・12：第Ⅱa層、13・14：第Ⅰ層

図版28　B-1区出土遺物写真

〔**堆積土**〕1 層確認し、暗褐色(10YR3/4)シルトの自然堆積である。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・高台坏、須恵器の坏・甑・短頸壺・長頸瓶・甕、須恵系土器の坏または皿・台付鉢、平瓦ⅠA・ⅠB・ⅡB類が出土した。

【SD3444溝】(図版25・26)

〔**検出**〕N112～117・E4～13で検出した北東-南西方向の溝で、北東側は調査区外へ延びる。

〔**重複**〕SX3440整地層、SD3442・3443小溝群と重複し、これらより新しい。

〔**方向**〕東西基準線より東で北に約23°偏する。

〔**規模**〕最大幅0.9m、検出長約8.5m、断面形は浅い「U」字状で、深さ0.2mを測る。底面標高は南西端が30.9m、北東端が30.7mで、南西から北東に向けてわずかに下る。

〔**堆積土**〕1 層確認し、自然堆積である。その上部を第Ⅱb層が覆う。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・高台坏・椀・長頸瓶・甕、須恵系土器の坏・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿・鉢、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅠB・ⅡB類が出土した。

3)基本層出土遺物(図版27・28)

[**第Ⅴ層**]土師器の坏・甕、須恵器の坏・短頸壺・甕が出土した。

[**第Ⅱc層**]土師器の坏・高台坏・高台埦・鉢・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・甑・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿・鉢、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類、円面硯(図版28-6)が出土しており、平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

[**第Ⅰ・Ⅱa・b層**]近世以降の遺物を含むため、一括して記述する。土師器の坏・高台坏・蓋・鉢・甕、須恵器の坏・蓋・長頸瓶・瓶・甕、須恵系土器の坏または皿・小皿・高台坏または高台皿・鉢、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅡA・ⅡB類、白磁の碗(図版27-3・4)・皿(5、図版28-13)・壺もしくは水注(図版27-6)・合子(7)、灰釉陶器の壺または瓶(図版28-14)、転用砥、石器、砥石、鉄釘、鉄滓、近世以降の陶磁器(10)・土師質土器が出土した。軒丸瓦は重弁蓮花文320で、平瓦ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1がある。図版28-10は唐津の大皿で、鉄釉による文様があり、江戸時代とみられる。

(2)B-2区の調査

1)基本層序

第Ⅰ層:現代の表土・盛土である。調査区内は地山ブロックを多く含む土で広く盛土整地されており、その下に褐色を呈する盛土前の表土も認められた。いずれも現代の陶磁器を含む。最も厚い南壁際で、現地表面から約1.2mを測る。現表土をⅠa層、盛土をⅠb層、盛土前の表土をⅠc層と記載している。

第Ⅱ層:暗褐色(10YR3/3)シルト。炭化物・焼土粒を少量含む。調査区南半部に分布し、厚さ最大0.3mを測る。

第Ⅲ層：黒褐色(10YR3/2)シルト。調査区全体に分布し、厚さは最大で0.8mを測る。混入物から3層に細分される。Ⅲa層は炭化物・焼土粒を少量、礫をわずかに含む。Ⅲb層は礫・地山ブロックをやや多く、一部層状に含む。Ⅲc層は地山小ブロック・炭化物を含む。

第Ⅳ層：褐色(10YR4/4)シルトを基調とし、炭化物を多く含む。厚さ最大0.4mを測る。やや暗い色を呈する上層のⅣa層と、比較的均質な褐色を呈するⅣb層に分かれる。

第Ⅴ層：灰白色火山灰(十和田a火山灰)層。調査区中央で南北方向に幅0.5～0.7mの帯状に分布する。断面では厚さ最大15cmで、中央が盛り上がるように堆積する。1次堆積とみられ、本来はより広範囲に分布していたものが、Ⅳ層堆積時に削られた可能性がある。

第Ⅵ層：暗褐色(10YR3/3)シルトを基調とし、炭化物・礫を含む。調査区の中央から東にかけて分布し、厚さ最大0.3mを測る。東端の低い部分では黒褐色(10YR3/2)を呈し、Ⅵb層とした。

第Ⅶ層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトで、炭化物・礫を少し含む。厚さは最大0.3m以上ある。

第Ⅷ層：暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土で、炭化物・礫を少し含む。調査区東半部に薄く分布する。

第Ⅸ層：地山。褐色(10YR4/6)の岩盤もしくはその崩壊土・風化層である。3層に細分され、Ⅸa層は礫を多く含み、やや土壌化が進んでいる。Ⅸb層は礫を主体とする。Ⅸc層は岩盤である。これら細別層の境は凹凸が顕著である。断面図では薄いグレーで表現した。

調査区全体で第Ⅱ層～Ⅲ層を検出した後に、中央に深掘り部分を設定して層ごとに掘り下げ、東端部を除いて第Ⅸc層上面まで掘り下げた。その結果、第Ⅷ層以上で遺物の出土を確認したほか、第Ⅳ層上面と第Ⅸc層上面で遺構を検出し、後者は調査区断面で第Ⅸa層から掘り込まれていることを確認した。第Ⅳ層上面は標高30.0～30.5m、第Ⅸ層上面は標高29.5～30.3mで、いずれも北西から南東方向へ下る傾斜が認められる。

2）遺構と出土遺物

第Ⅳ層上面で溝1条(SD3445)、第Ⅸ層上面で柱穴4個(P1～P4)を検出した。柱穴群は建物・柱列を認定するには至らなかったため、個別の柱穴として記述する。

①溝

【SD3445溝】（図版29～31・遺物図版33）

〔**検出**〕N118～120・E24～28において、第Ⅳ層上面で南北方向と北東-南西方向の溝2条を検出した。両者が合流する調査区北壁際で新旧関係が確認されなかったため、一連の溝として西からSD3445①②とした。①②ともに平面図・断面図作成後に、下層遺構調査のため全体的に掘り下げた。

〔**重複**〕①は調査区北壁際で小ピットと重複し、これより新しい。

〔**方向**〕①が東西基準線より東で北に33°偏し、②が、南北基準線より北で西へ8°偏する。

〔**規模**〕①が幅0.3～0.5m、検出長約2.6m、②が幅0.3～0.4m、検出長1.3mである。断面形は上部が開く「U」字状もしくは逆台形状で、深さ0.1～0.3mを測る。①②ともに底面は標高30.1m前後で、明確な傾斜は認められない。調査区北壁際では①が②よりわずかに深く段差がある。

〔**堆積土**〕1層確認し、第Ⅲc層に類似する。

〔**出土遺物**〕土師器の坏・甕、須恵器の甕、須恵系土器の坏・坏または皿・高台坏または高台皿、灰釉陶器の埦（図版33-1）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡＢ類、製塩土器が出土した。

②柱穴群（図版29～31）

〔**検出**〕N118～120・E24～29において、第Ⅸ層上面で柱穴４個（P1～P4）を検出した。P1～P3で柱痕跡を検出し、おおむね東西方向に並ぶが、柱間が一定でなく、柱痕跡が一直線上に並ばないこと、調査範囲がごく限られていることから、建物としての登録は行わなかった。P4は柱痕跡が確認できなかったが、形状・規模が類似することから柱穴と判断した。P1は東半部を底面まで掘り下げ、それ以外の柱穴は一段掘り下げまで行った。

〔**柱穴**〕掘方の平面形は隅丸方形を呈し、一部は調査区外に延びるが、検出した範囲で一辺0.4～0.6mである。半截したP1では掘方埋土が３層に分かれ、検出面からの深さは0.3～0.5mを測る。P1～P3の柱痕跡は直径約0.2mの円形で、堆積土は掘方埋土にくらべ混入物が少なく均質である。

〔**出土遺物**〕なし。

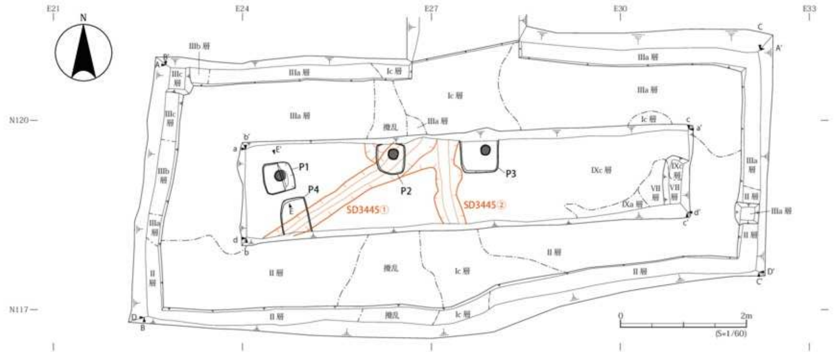
３）基本層出土遺物（図版32～35）

［**第Ⅶ・Ⅷ層**］これらの層はまとめて遺物を取り上げた。土師器の坏（図版32-１）・甕、須恵器の坏（２）・高台坏・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ類が出土した。平瓦ⅡＢ類にはaタイプ1がある。

［**第Ⅵ層**］土師器の坏（図版32-３～６）・高台坏・蓋・鉢（７）・甕、須恵器の坏・長頸瓶（10）・瓶・甕、須恵系土器の坏（８・９）・台付鉢、灰釉陶器の壺または瓶（図版33-12）、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ類、二面硯（図版32-11）、鞴の羽口が出土した。平瓦ⅡＢ類にはbタイプがある。

［**Ⅳ層**］土師器の坏（12）・高台坏・蓋・鉢・甕、須恵器の坏（13）・蓋・瓶・甕、須恵系土器の坏（14・15）・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿・鉢・台付鉢、灰釉陶器の埦（16）・埦または皿（図版33-18）、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＣ・ⅡＢ類、製塩土器（図版32-17、33-21）、鉄滓が出土した。平瓦のⅠＡ類にはaタイプ、ⅠＣ類にはaタイプがある。

［**第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層**］近世以降の遺物が含まれるため、まとめて記述する。土師器の坏・高台坏・高台埦（図版34-１）・鉢・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・長頸瓶・瓶・甕（図版35-５）、須恵系土器の坏・小皿（図版34-２・３）・坏または皿・高台坏（４）・高台坏または高台皿・高坏または器台・鉢・台付鉢、白磁の碗（５）、緑釉陶器の埦（図版35-７）、灰釉陶器の埦（10～12）・壺または瓶（８）、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＣ・ⅡＡ・ⅡＢ・ⅡＣ類、土錘（９）、石器、碁石とみられる石製品、鉄釘、器種不明の銅製品、近世以降の陶磁器が出土した。平瓦のⅠＡ類にはaタイプ、ⅠＣ類にはaタイプがある。図版34・35に掲載した遺物のうち、図版35-10～12以外は第Ⅲc層出土である。

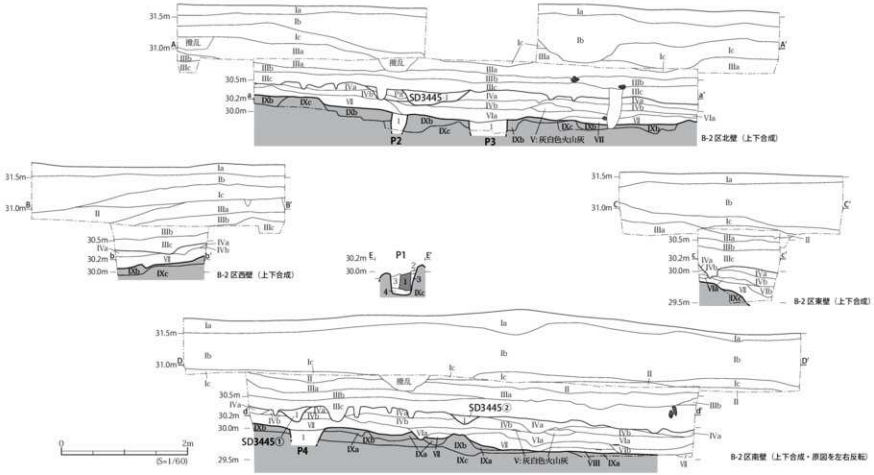


1．B-2区SD3445（西から）　Z8915

2．B-2区全景空中写真（上が北）　Z9016

3．B-2区P1～P4検出（西から）　Z8939

図版29　B-2区　遺構図・写真（1）



遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SD3445①②③	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	炭化物・地山粒を含む、縞状に似る	自然堆積
P1	1	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・小礫・炭化物を少し含む、掘方理土に比べ緻密	柱痕跡
	2	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒を含む	掘方理土
	3	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山粒・小礫を多く含む	掘方理土
	4	褐色(10YR4/4)	シルト質砂	地山粒・小礫を多く含む	掘方理土
P2・P3	1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山粒・小礫を多く含む	掘方理土
P4	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多く、炭化物をやや多く含む	掘方理土か

図版30　B-2区　遺構図（2）

1．B-2区第Ⅴ層検出状況（南から）　Z8925

2．B-2区第Ⅵ層遺物出土状況（南から）　Z8930

Z8955

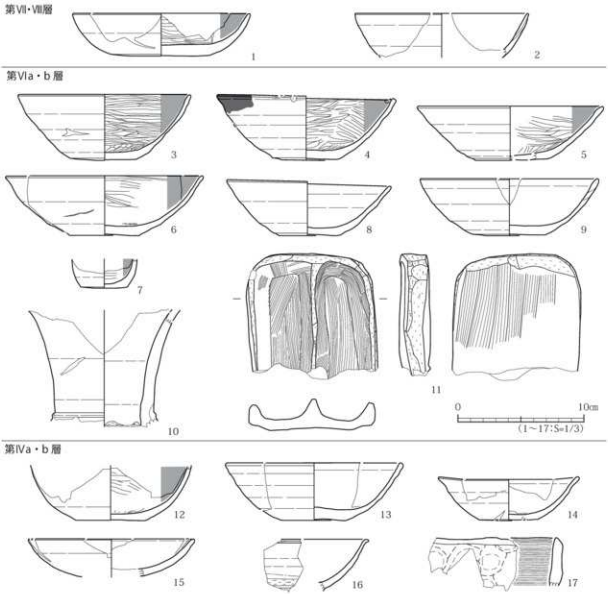
3．B-2区北壁（南から）　Z8952　Z8956

4．B-2区南壁（北から）　Z8949　Z8950　Z8946

5．B-2区深掘り全景（南東から）　Z8957

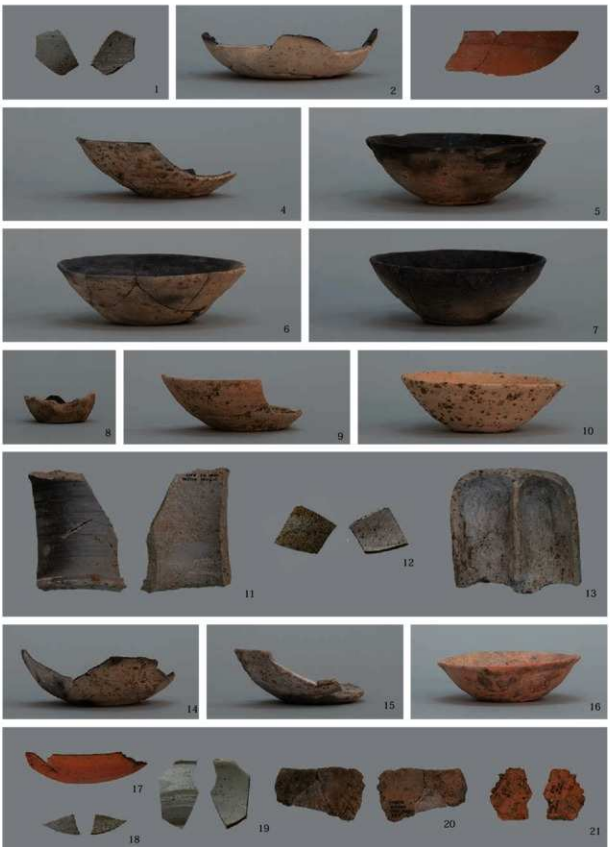
6．B-2区P1断面（東から）　Z8961

図版31　B-2区　遺構写真（2）



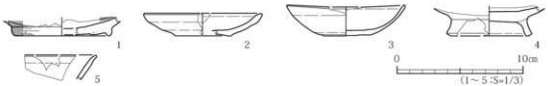
No.	層	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	第Ⅶ・Ⅷ層	土師器　坏	口11/4～底部1/1	(14.1)	8.0	3.4	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ→黒色処理　底部切り離しは器面の風化が著しく不明	33-2	R276	B16076
2	第Ⅶ・Ⅷ層	須恵器　坏	口～体部1/4	(13.8)	—	—	外内：ロクロナデ	33-3	R278	B16076
3	第Ⅵb層	土師器　坏	口11/2～底部1/1	13.8	5.4	5.2	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整	33-4	R283	B16076
4	第Ⅵa層	土師器　坏	ほぼ完形	14.3	5.4	5.3	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整　外面に油煙付着	33-5	R296	B16076
5	第Ⅵa層	土師器　坏	口11/3～底部1/1	(14.8)	6.0	4.3	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整	33-6	R297	B16077
6	第Ⅵb層	土師器　坏	口11/6～底部3/4	(15.7)	5.5	4.8	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整	33-7	R282	B16076
7	第Ⅵb層	土師器　鉢	体～底部1/1	—	3.7	—	外：ロクロナデ　内：ヘラミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整	33-8	R287	B16076
8	第Ⅵa層	須恵系土器　坏	完形	13.1	5.2	4.5	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	33-10	R305	B16077
9	第Ⅵb層	須恵系土器　坏	口11/4～底部1/1	(14.2)	5.8	4.5	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	33-9	R290	B16076
10	第Ⅵa層	須恵器　長頸瓶	頸部1/4	—	—	—	頸部径(7.8cm)　外内：ロクロナデ　頸部と胴部の境にリング状の凸帯巡る	33-11	R307	B16077
11	第Ⅵa層	須恵器　二面硯	1/2	—	—	—	長(10.0cm)　幅(10.4cm)　厚(2.3cm)　表：硯面中央に隆帯貼付→ナデ→縁辺をヘラケズリ　裏：ヘラナデ→縁辺をヘラケズリ	33-13	R310	B16077
12	第Ⅳa・b層	土師器　坏	体～底部1/1	—	5.4	—	外：ロクロナデ　内：放射状ミガキ→黒色処理 底：回転糸切り無調整	33-14	R318	B16078
13	第Ⅳa・b層	須恵器　坏	口～底部1/1	(14.1)	5.0	4.6	内内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	33-15	R322	B16078
14	第Ⅳa・b層	須恵系土器　坏	口11/3～底部4/5	(11.2)	4.7	3.5	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	33-16	R326	B16078
15	第Ⅳa・b層	須恵系土器　坏	口～体部1/6	(13.2)	—	—	外：ロクロナデ　内：コテナデ	33-17	R327	B16078
16	第Ⅳa・b層	灰釉陶器　埦	口～体部	—	—	—	外：ロクロナデ→(体下)回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ　(底)高台貼付→ロクロナデ　内外面施釉　東濃窯産	33-19	94-6	B14929
17	第Ⅳa層	製塩土器　鉢	口縁部	—	—	—	外：オサエ　内：ナデ　胎土に赤褐色の小礫含む	33-20	R316	B16078

図版32　B-2区　第Ⅳ～Ⅷ層出土遺物



1：SD3445、2・3：第Ⅶ・Ⅷ層、4～13：第Ⅵa・b層、14～21：第Ⅳa・b層　　（1～21：S=1/3）

図版33　B-2区出土遺物写真（1）



No.	種類	現存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	土師器　高台埦	底部1/4	—	(7.5)	—	外内：ヘラミガキ→黒色処理	35-1	R329	B16078
2	須恵系土器　小皿	口～底部1/4	(9.4)	(4.4)	1.8	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	35-2	R331	B16078
3	須恵系土器　小皿	口12/3～底部3/4	9.4	3.8	2.5	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	35-3	R330	B16078
4	須恵系土器　高台坏	体～底部2/3	—	6.7	—	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整→高台成付→ロクロナ	35-4	R338	B16078
5	白磁　碗	口縁部	—	—	—	外内：ロクロナデ　太宰府市分類白磁碗Ⅱ～Ⅳ類	35-6	No.330	B14314

図版34　B-2区　第Ⅲc層出土遺物

1～9：第Ⅲc層、10～12：第Ⅲa層　　(1～4・6～12：S=1/3、5：S=1/6)

図版35　B-2区出土遺物写真（2）

土器・施釉陶磁器（古代）

区	遺構・層・遺物	土師器				須恵器			須恵系土器	土器	白磁	緑釉陶器	灰釉陶器	製塩土器	計
		供膳具	貯蔵具	煮沸具	不明	供膳具	貯蔵具	煮沸具	供膳具		供膳具	供膳具	供膳具		
A-1	SB3415礎部面									1					1
	SD3424埋	1		1	2	3	16			1					24
	SD3425埋						2			1					3
	SD3424・3425埋			3		3	11			1					18
	P1			1	3	2				1					7
	第Ⅰ層			4	1	2	6			1					14
	小計	1		9	6	10	35			6					67
A-2	SB3416側柱穴						1								1
	SA3417礎部面						1								1
	SD3419埋								4						4
	SD3424埋	19		2		7	51		22						101
	SD3429埋	2		2			3								7
	SD3432埋	1													1
	SD3433埋						1								1
	SD3437埋	3		1			1		3						8
	SD3438埋	7		1			1		3						12
	SK3420埋	1				1									2
	SK3421大列1層	99		24		3	21		583		1	1			732
	SK3421大列2層	9		1			3		28	1					42
	SK3421大列3層	28		4		1	10		141						184
	SK3421大列4層	58		3		3	29		300						393
	SK3421大列6層	42		5			12		336						395
	SK3421大列8層	15	1	3		2	7		189						217
	SK3421底面								10						11
	SK3421大列9層	4				1	1		12						18
	SK3421埋	5				2	6		31						44
	SK3421礎部面	3		3		1	8		19						34
	SK3422埋	5							68						73
	SK3423埋	56	1	34	1	5	23		140	5					265
	SK3430埋				1	2	1								4
	SK3434埋						1		3						4
	SK3436埋	5					1		2						8
	礎部面			2		1	1		2						6
	第Ⅰ層	6		3	1	6	26		70						112
	第Ⅱ層	6		1	4	2	7		10						30
	第Ⅲ層						1								1
	小計	375	2	89	7	37	217		1,976	6	1	1			2,711
B-1	SX3439埋	2		4		5	4								15
	SD3439・SX3440	1				6			1						8
	SX3440埋	17		14		25	20		10						86
	SD3442埋	1							4						5
	SD3443埋	6				1	4	1	10						22
	SD3444埋	16		21		14	14		37						102
	礎部面	6	1						2						9
	第Ⅰ層	6		3		7	10		19		1		1		47
	第Ⅱa層	150	1	62		41	69		267		2				592
	第Ⅱb層	39		29		10	23		112		3				216
	第Ⅱc層	68	1	31		11	16	1	106						234
	第Ⅴ層	4		1		2	2								9
	小計	316	3	165		122	162	2	568		6		1		1,345
B-2	SD3445埋	9		7			4		16				1	1	38
	第Ⅰ層	10	1	3		1	4		12						31
	第Ⅱ層	40		14		10	38		37						139
	第Ⅲa～c層	36	1	10		11	22		51				2		133
	第Ⅲa層	13	2	9		5	18		51				1		99
	第Ⅲb層	23		7			16		42						88
	第Ⅲc層	90		75		8	83		274		1	1	3		535
	第Ⅳa・b層	51	1	5	44	33	37		69				2	10	252
	第Ⅳa層	5		2					8						15
	第Ⅴa層	95	1	34		20	22		31						203
	第Ⅵb層	47	1	19		5	16		23				1		112
	第Ⅶ層	2				3	3								8
	第Ⅶ・Ⅷ層	5		1		5	3								14
	小計	426	7	186	44	101	266		614		1	1	10	11	1,667
計		1,118	12	449	57	270	680	2	3,159	12	8	2	11	11	5,790

※縦ね長さ2cm以上のもの全数計の対象とした
※「土器」は、小破片のため土師器か須恵系土器か区別がつかなかったもの
※供膳具：小皿、皿、高台皿、坏、高台付、高坏、耳付坏、椀（碗）、高台椀、台付鉢、蓋
貯蔵具：土師器鉢、須恵器鉢・短頸壺・長頸瓶・甕
煮沸具：土師器甕、須恵器甑

第５表　第94次調査出土遺物の破片集計（１）

その他

区	遺構・層＼遺物	銅		鉄製品		石製品	木製品	鉄滓	鋼鉄	鉄淬		石器	動物遺存体	植物遺存体	陶磁器・土器(近世以降)					計
		円形硬	二面硬	板状鉄	土製品					鉄淬	鍛冶淬				陶器	磁器	瓦質土器	土師質土器		
A-1	SD3424層			3						1										3
	SD3424+3425層			4																5
	ピット					1														1
	第1層			1																1
	小計			**8**		**1**				**1**										**10**
A-2	SB3416建物6穴							1												1
	SD3424層			15																15
	SD3429層															1				1
	SE3427層														3					3
	SK3420層					1														1
	SK3421大9層1層			2		1		1		2	1									7
	SK3421大9層2層			2																2
	SK3421大9層3層			1				1												2
	SK3421大9層4層				1					2										3
	SK3421大9層6層			1		1														2
	SK3421大9層8層			1						3										4
	SK3421層			1																1
	SK3422層					3														3
	SK3423層	1																		1
	SK3428層																1			1
	SK3430層														4					4
	SK3434層						1						1	3	12	9		2		28
	縄認面														1		1			2
	第1層			3	1	2				1					3	22		3		33
	第II層			1	1										6					8
	小計	**1**		**27**	**3**	**8**	**1**	**3**		**8**	**1**		**1**	**3**	**29**	**32**	**2**	**5**		**124**
B-1	SD439層												1							1
	SX3440層	2		1				1												4
	第1層			1																1
	第IIa層			3				3		6		1			1	1		1		16
	第IIb層					1		1		1		2			3	1				9
	第IIc層	1																		1
	小計	**3**		**5**		**1**		**5**		**7**		**3**	**1**		**4**	**2**		**1**		**32**
B-2	第1層														2					2
	第II層											1			3	2				6
	第IIIa～c層														2	1				3
	第IIIa層							1												1
	第IIIb層					1									1					2
	第IIIc層				1				1						1					3
	第IVa～b層									2										2
	第VIa層		1																	1
	第VIb層				1															1
	小計		**1**		**2**	**1**		**1**	**1**	**2**		**1**			**9**	**3**				**21**
計		4	1	40	5	11	1	9	1	18	1	4	2	3	42	37	2	6		187

第６表　第94次調査出土遺物の破片集計（２）

点数

区	遺構・層＼瓦分類	軒丸瓦			軒平瓦							
		重弁蓮花文		剣弁蓮花文	単弧文		二重弧文			二or三重弧文	均整唐草文	計
		320	型番不明	310B	640a	型番不明	511	型番不明			721Ab	
A-2	SD3424層		1	1								2
	SK342大9層1層									1		1
	SK3421大9層3層		1									1
	SK3421大9層4層										1	1
	SK3421大9層6層				1							1
	SK3423層				1							1
	SK3434縄認面				1							1
	第1層					1	1					2
	第II層			1			1	1				3
B-1	SX3440層						1					1
	第IIb層	1										1
計		1	2	2	3	1	3	1		1	1	15

重量（g）

区	遺構・層＼瓦分類	軒丸瓦			軒平瓦							
		重弁蓮花文		剣弁蓮花文	単弧文		二重弧文			二or三重弧文	均整唐草文	計
		320	型番不明	310B	640a	型番不明	511	型番不明			721Ab	
A-2	SD3424層		40	400								440
	SK342大9層1層									40		40
	SK3421大9層3層		20									20
	SK3421大9層4層										310	310
	SK3421大9層6層				290							290
	SK3423層				470							470
	SK3434縄認面				280							280
	第1層					440	120					560
	第II層			180			680	150				1,010
B-1	SX3440層						920					920
	第IIb層	310										310
計		310	60	580	1,040	440	1,720	150		40	310	4,650

第７表　第94次調査出土軒丸・軒平瓦の集計

点数

区	遺構・層＼瓦分類	丸瓦					平瓦																					不明	計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	模	Ⅰ	ⅠA	Ⅰ Aa	Ⅰ Ab	Ⅰ B	Ⅰ Bb	Ⅰ C	Ⅰ Ca	Ⅱ 熟	Ⅱ A	Ⅱ B	模	Ⅱ Ba1	Ⅱ Ba2	Ⅱ Ba3	Ⅱ Bb	Ⅱ C	平	模		
A-1	SB3415側方埋土								1																2				3
	SB3415確認面			1					1															1	2				5
	SD3424埋	7		3	1				19										11				1	1	22	3			68
	SD3425埋	2							1					1											1				5
	SD3424・3425埋	13	1	2				1	9	1									5						3		8		43
	SD3426埋	1							2															1	2				6
	ピット																							1					1
	第Ⅰ層	4		3	1				10					1					9	1			1	1	6				37
	小計	27	1	9	2			1	43	1				2					25	1			2	5	38	3	8		168
A-2	SB3416A側方埋土																									1			1
	SB3416B抜取穴																		1										1
	SB3416確認面																						1						1
	SA3417確認面								1											1					1				3
	SD3419埋													1														1	2
	SD3424埋	1	40		6				29	1		2		1					41		1			3	9	60	5	3	202
	SD3424確認面		1						2															1		1			5
	SD3429埋								3										1						1	1			6
	SD3432埋		1																										1
	SD3433埋		1																2										3
	SD3437埋		1		1				1	2									1						2	1			9
	SD3438埋		1						1										4										6
	SE3427埋		3						2										3		1				1	4			14
	SK3421大別1層		76	3	11	1		1	19	2		1		2	2		1		49		4	1		8	12	35	2	3	233
	SK3421大別2層		2		1				2	1									4						2				12
	SK3421大別3層		3		1				3										5						1	4	1	4	22
	SK3421大別4層		30	1	10				15	1									26		2			1	7	15		4	112
	SK3421大別6層		11						2	1									4							8		1	27
	SK3421大別8層		13		4				10	2	1								8			1		1	1	15		1	57
	SK3421底面																		1										1
	SK3421大別9層		2		4				2	1									2		1				1	3	1		17
	SK3421埋		6						1	3							1		2									1	14
	SK3421確認面		10	1	1				5	1									13		1	1				6	1		40
	SK3422埋		9		1				2	1									4						1				18
	SK3423埋		88		14	1	2		42	2					1				51	1	4	6	3		16	15	8	7	261
	SK3423確認面		11						5	2	1								2							3			24
	SK3430埋		6						2	1									2										11
	SK3434埋		1																						1				2
	SK3434確認面		1						1																				2
	SK3436埋		4							1									2							2		2	11
	確認面		2																										2
	第Ⅰ層		30	1	5				16	4			1	1					17		1	2		3	4	29	1	4	119
	第Ⅱ層		32	1	5				11	2									12					1		17	1		82
	第Ⅲ層								1																				1
	小計	1	385	7	64	2	2	1	178	28	2	3	1	5	3	1	1		257	1	16	11	3	19	57	222	21	31	1,322
B-1	SI3439床面								1																				1
	SI3439埋		2						1	3									5										11
	SI3439・SX3440		3						2												1					3			9
	SX3440埋		14		1				5			3							14		1					4	1	1	44
	SD3443埋								1										2									1	4
	SD3444埋		5						1			1							10							14		2	33
	第Ⅰ層		3						2										5							1			11
	第Ⅱa層		51		1				12					1	1		1		22		2				1	25		4	121
	第Ⅱb層		10																8							6		6	30
	第Ⅱc層		4		2	1			2	1									8							6		2	26
	小計		92		4	1			27	4		4		1	1		1		74		4				1	59	1	16	290
B-2	SD3445埋		1																1						1				3
	第Ⅰ層		2																1							2			5
	第Ⅱ層		9		1				1	1																9		1	22
	第Ⅲa～c層		4		1				4								1		1						1	7		5	24
	第Ⅲa層		10		1				2																	4			17
	第Ⅲb層		11																						1	3		2	17
	第Ⅲc層		19						3						1				9						1	19		4	56
	第Ⅳa・b層		19		1				3	2					1				8							2		5	41
	第Ⅳa層		1							1																			2
	第Ⅵa層		7		1				2										10					1		6		4	31
	第Ⅵb層		4																							1			5
	第Ⅶ層		1																										1
	第Ⅷ・Ⅸ層								2										2		1								5
	小計		88		5				17	4					2		1		32		1			1	4	53		21	229
計		1	592	8	82	5	2	2	265	37	2	7	1	8	6	1	3		388	1	22	11	3	22	67	372	25	76	2,009

第８表　第94次調査出土丸・平瓦の集計（点数）

重量（g）

区	遺構・層・瓦分類	丸瓦						平瓦																				不明	計
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ側	Ⅲ	丸	縄	Ⅰ	ⅠA	ⅠAa	ⅠAb	ⅠB	Ⅰb	ⅠC	ⅠCa	Ⅱ側	ⅡA	ⅡB	Ⅱ側	ⅡBa1	ⅡBa2	ⅡBa3	ⅡBb	ⅡC	平	縄		
A-1	SB3415瓶方埋土							180																	280			460
	SB3415確認面			100				50																110	80			340
	SD3424層	610		350	110			2,330										1,340				200	250	1,360	580			7,130
	SD3425層	130						60						100										60				350
	SD3424・3425層	1,400	80	260			5	1,070	220									600						260		200		4,095
	SD3426層	80						550																200	120			950
	ピット																							670				670
	第Ⅰ層	340		650	15			2,920						190				2,060		450			120	120	400			7,265
	小計	2,580	80	1,360	125		5	7,160	220					290				4,000		450			320	1,350	2,560	580	200	21,260
A-2	SB3416A瓶方埋土																									100		100
	SB3416B抜取穴																	60										60
	SB3416B確認面																					430						430
	SA3417確認面							190												240					50			480
	SD3419層													90													30	120
	SD3424層	20	2,540		1,550			4,660	270		320			90				7,230		210			360	2,300	3,460	710	30	23,750
	SD3424確認面		190					260															40		20			510
	SD3429層							230										140						130	30			530
	SD3432層	30																										30
	SD3433層	160																190										350
	SD3437層	80			200			180	320									50						660	30			1,520
	SD3438層	100						90										630										820
	SE3427層	370						200										610		350				270	200			2,000
	SK3421大別1層	6,400	70	1,700	130		60	1,960	410		150		260	350		440	7,000			1,710	950		3,000	3,860	1,970	120	50	30,590
	SK3421大別2層	100		230				380	400								920								70			2,100
	SK3421大別3層	250		210				310									540							150	230	50	40	1,780
	SK3421大別4層	2,580	40	2,090				1,800	160								5,320			600			990	4,100	1,090		60	18,830
	SK3421大別6層	780						340	130								740								500		10	2,500
	SK3421大別8層	1,610		1,100				1,450	700	90							920				620		540	150	1,400		10	8,590
	SK3421底面																210											210
	SK3421大別9層	210		1,450				190	270								120			2,260				80	270	120		4,970
	SK3421層	380						50	560							60	210										50	1,310
	SK3421確認面	950	70	380				680	330								2,840			440	650				870	220		7,430
	SK3422層	750		80				210	1,300								240							830				3,410
	SK3423層	9,370		3,310	30	400		10,030	610					160			7,900	90	1,620	3,250	1,040			4,030	1,320	720	230	44,110
	SK3423確認面	800						600	370	380							170								80			2,400
	SK3430層	370						370	490								80											1,310
	SK3434層	170																						70				240
	SK3434確認面	90						140																				230
	SK3436層	280							140								190								40		20	670
	礫認面	80																										80
	第Ⅰ層	3,030	100	580				1,910	1,470			120	80				2,830		1,030	910		900	760	3,400	100	50		17,270
	第Ⅱ層	2,840	60	860				1,360	90								1,310					150		940	110			7,720
	第Ⅲ層							10																				10
	小計	20	34,510	340	13,740	160	400	60	27,600	8,020	470	470	120	520	510	60	440	40,450	90	8,460	6,380	1,040	6,410	17,300	15,970	2,250	580	186,460
B-1	SS4339床面							650																				650
	SS4339層	210						230	240									570										1,250
	SS4339・SX3403	400						120												170					380			1,070
	SX3440層	1,880		90				1,550			420							1,760		330					440	70	10	6,550
	SD3443層							350										90										1,450
	SD3444層	320						40			290							1,600							360		20	2,630
	第Ⅰ層	190						890										880							180			2,140
	第Ⅱa層	3,420		100				1,570						150	60		270	3,290		360				110	1,430		80	10,840
	第Ⅱb層	540																990							350		60	1,940
	第Ⅱc層	150		200	10			120	80									900							230		30	1,720
	小計	7,110		390	10				5,520	320		710		150	60		270	10,080		860				110	3,370	70	210	29,240
B-2	SD3445層	130																90						90				310
	第Ⅰ層	100																190							160			450
	第Ⅱ層	480		90				60	50																510		20	1,210
	第Ⅲa～c層	380		60				540								60	80							250	440		60	1,870
	第Ⅲd層	630		280				300																	220			1,430
	第Ⅲb層	700																						470	80		25	1,275
	第Ⅲc層	1,260						240							280			1,350						720	2,390		23	6,263
	第Ⅳa・b層	1,360		190				640	260						120			840							110		100	3,620
	第Ⅳc層	60							240																			300
	第Ⅴa層	950		390				240										1,700					280		340		80	3,980
	第Ⅴb層	250																							80			330
	第Ⅵ層	60																										60
	第Ⅶ・Ⅷ層							200										230		260								690
	小計	6,360		1,010					2,220	550					400		60	4,480		260			280	1,530	4,330		308	21,788
計		20	50,540	420	16,500	295	400	65	42,500	9,110	470	1,180	120	960	970	60	770	59,010	90	10,030	6,380	1,040	7,010	20,380	26,230	2,900	1,298	258,748

第９表　第94次調査出土丸・平瓦の集計（重量）

4．総括

（1）遺物

A・B区から、土器（土師器、須恵器、須恵系土器、製塩土器）、施釉陶磁器（白磁、緑釉陶器、灰釉陶器）、瓦（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦）、硯（円面硯、二面硯）、土製品（羽口、土錘、円盤状土製品）、石製品（砥石、碁石ヵ）、転用砥、金属製品（鉄製品、銅製品）、鉄滓、動物遺存体、この他に、中世以降の瓦質土器、近世以降の陶磁器、土師質土器、土製品、石製品、木製品、植物遺存体が出土した（第５～９表）。主体を占めるのは古代の土器と瓦で、その中でも須恵系土器の割合が高い。調査区との関係では、調査面積の大きいA-2区で遺物の種類と量が多い。個別の遺物では、須恵系土器や土師器がA・B区の各遺構ないし基本層出土遺物の主体となるが、製塩土器や施釉陶磁器、硯はA区よりも調査面積の小さいB区から多く出土しており、遺物の種類によって出土傾向が異なる。以下では、古代の土器と施釉陶磁器の検討を行う。

1）土器

土師器、須恵器、須恵系土器を対象とし、これらがまとまって出土したA-2区SK3421～3423土坑、B-2区第Ⅵ層出土土器についてその特徴を記述し年代を検討する。それ以外の土器については、遺構や基本層の年代を検討する際に個別に言及する。また、共伴する施釉陶磁器については、詳細は後述し年代のみ参照する。なお、土器の数量を把握する際には破片数と個体数を用いる（宇野1992）。破片数は概ね長さ２cm以上の土器を対象として集計したもの（第５表）、個体数は図化したものと口縁部や底部破片が1/4以上残存するものを対象とし、それらをそれぞれ１個体として集計したものである（第10表）。

【SK3421土坑出土土器】

特徴：大別１～４・６・８・９層と底面から出土しているが、大別２・３・９層出土土器は器形の復元が可能なものが僅かであるため、ここでは大別１・４・６・８層と底面出土土器を対象とする。底面出土土器から順に記述し、最後に年代をまとめる。

〔底面〕出土土器は土師器と須恵系土器である。破片数は土師器１点（供膳具）、須恵系土器10点（供膳具）（第５表）、このうち個体数は土師器１点、須恵系土器５点である（第10表）。出土量は少ないが、須恵系土器の割合が高い。

区・遺構・層＼土器			土師器					須恵器					須恵系土器								土器の合計	施釉陶磁器		
			坏	高台坏（椀）	甕	鉢	甕	坏	蓋	長頸瓶（瓶）	甕	坏	小皿	坏or皿	高台坏	高台皿	高台坏or皿	高坏（器台）	鉢（台付鉢）		白磁	緑釉陶器	灰釉陶器
A-2		底面	1									1		2	2					6			
	SK3421	大別８層	2(1)				○	○			○	14(2)		3	1	1			○	21			
		大別６層	1	2			○				○	14(1)		5						22			
		大別４層	5	2			○	○		○	○	15	1	10	3	2(1)			○	38			
		大別１層	6	2			○	○		○	○	30(1)	4(1)	16	10	10	6	○	○	84	1	1	
	SK3422	堆積土		2								1	1	9		2				15			
	SK3423	堆積土	1	1			1	○		1	○	7	2		4		5		○	22			
B-2	基本層	第Ⅵａ・ｂ層	20(3)	1		1	○	1		2	○	10(1)								35			

※数字は個体数、○は個体数としては集計できないが、破片からその存在が推定できるものを示している。
個体数は、①図化して年報に掲載したもの、②口縁部、底部破片のそれぞれで残存が1/4以上のものを集計した。
なお、表中の（ ）内の数字は、総量における口縁部破片の数量を示したものである。

第10表　土器の個体数

土師器はロクロ整形の坏で、底部切り離しは回転糸切り無調整、底部内面には放射状ミガキが施される（図版18-１）。

須恵系土器には坏、坏または皿、高台坏があり、坏の器形は底部から内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する（図版18-２）。法量は口径約12.3㎝、底径4.5㎝、器高3.0㎝である。高台坏の器形は、高台が「ハ」字状に開いて端部に面を持ち、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁部が外傾する（３）。法量は口径14.2㎝、底径6.7㎝、器高5.0㎝である。須恵系土器の胎土は緻密で、色調は灰白色を主体とし、浅黄橙色、にぶい橙色である。

〔大別８層〕出土土器は土師器、須恵器、須恵系土器である。破片数は土師器19点（供膳具15点、貯蔵具１点、煮沸具３点）、須恵器９点（供膳具２点、貯蔵具７点）、須恵系土器189点（供膳具）（第５表）、このうち個体数として集計できるのは土師器２点、須恵系土器19点である（第10表）。破片数、個体数ともに須恵系土器が９割前後を占める。須恵器は坏と甕の小破片で少量である。

土師器には坏、甕があり、坏はロクロ整形で（図版18-４・５）、底部切り離しは回転糸切り無調整、外面体下部に手持ちヘラケズリ、底部内面に放射状ミガキが施される（５）。

須恵系土器には坏、坏または皿、高台坏、高台皿、台付鉢があり、坏が主体である。坏の器形は底面出土のものと類似し（６～８）、法量は口径11.0～12.6㎝、底径5.0～5.1㎝、器高3.4～3.8㎝である。高台皿の器形は、高台が「ハ」字状に開いて端部に面を持ち、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する（11）。法量は口径10.8㎝、底径5.2㎝、器高2.4㎝である。須恵系土器の胎土と色調は底面出土のものと同様である。

〔大別６層〕出土土器は土師器、須恵器、須恵系土器である。破片数は土師器47点（供膳具42点、煮沸具５点）、須恵器12点（貯蔵具）、須恵系土器336点（供膳具）（第５表）、このうち個体数として集計できるのは土師器３点、須恵系土器19点である（第10表）。破片数、個体数ともに須恵系土器が８割以上を占める。須恵器は鉢または甕、甕の小破片で少量である。

土師器にはロクロ整形の坏、高台坏があるが、いずれも器形や法量は不明である。

須恵器の鉢または甕は胴部外面に平行タタキ、内面に幅広のヘラミガキが施される（図版18-14）。

須恵系土器には坏、坏または皿、台付鉢があり、坏が主体である。坏の器形は大別８層出土のものと類似し（13）、法量は口径約10.4㎝、底径約5.1㎝、器高2.9㎝である。須恵系土器の胎土と色調は底面出土のものと同様である。

〔大別４層〕出土土器は土師器、須恵器、須恵系土器である。破片数は土師器61点（供膳具58点、煮沸具３点）、須恵器32点（供膳具３点、貯蔵具29点）、須恵系土器300点（供膳具）（第５表）、このうち個体数として集計できるのは土師器７点、須恵系土器31点である（第10表）。破片数、個体数ともに須恵系土器が８割前後を占める。須恵器は坏や瓶、甕の破片で少量である。

土師器にはロクロ整形の坏、高台坏があるが、いずれも器形や法量は不明である。

須恵系土器には坏、小皿、坏または皿、高台坏、高台皿、台付鉢があり、坏が主体である。坏の器形は底面や大別８層出土のものと類似し（図版18-15～17）、法量は口径10.6～13.3㎝、底径5.0～5.8㎝、器高3.2～3.9㎝である。須恵系土器の胎土と色調は小皿が胎土に砂粒を含み橙色であるが、それ

以外は底面出土のものと同様である(註２)。

〔大別１層〕出土土器は土師器、須恵器、須恵系土器である。破片数は土師器123点(供膳具99点、煮沸具24点)、須恵器24点(供膳具３点、貯蔵具21点)、須恵系土器583点(供膳具)(第５表)、このうち個体数として集計できるのは土師器８点、須恵系土器76点である(第10表)。須恵系土器が、破片数で８割、個体数で９割を占める。須恵器は坏、長頸瓶、鉢または甕、甕の破片で少量である。

土師器にはロクロ整形の坏、高台坏、高台埦、甕がある。高台埦(図版19-１)の高台は、断面形状が三角形で高さが0.5㎝と低く、高台端部と埦底部の高さがほぼ一致する。

須恵系土器には坏、小皿、坏または皿、高台坏、高台皿、高台坏または高台皿、高坏または器台、台付鉢がある。坏が主体ではあるが、小皿が一定量共伴すること、高台の付く器種が須恵系土器の個体数の３割以上を占めることが特徴である。坏の器形は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が外傾(５)ないし外反(７)する。法量は口径約14.6㎝、底径約5.2㎝、器高2.9㎝である(５)。また、全体の器形は不明だが、底径５㎝で高さ1.0㎝程度の柱状高台が２点認められる(１点のみ図示、図版19-９)。小皿の器形は底部から口縁部にかけて外傾するもの(４)と口縁部が内湾するもの(２・３)で、法量は口径8.5～9.9㎝、底径4.0～4.5㎝、器高1.8～2.0㎝、底部の厚さは0.5㎝である。高台皿の器形は、高台の断面が幅の広い三角形で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する(10)。この他に、高台坏・高台皿の高台の形状には、外反するもの(12・13)、直立し断面が三角形のもの(11・14～16)がある。須恵系土器の胎土は砂を含み粗く、色調は橙色を主体として浅黄橙色、にぶい橙色・黄橙色等である。

年代:SK3421の各層から出土した土器は、第Ⅲ層である灰白色火山灰より新しく、須恵系土器が主体である点で共通するが、器種組成では大別１層で須恵系土器の小皿が一定量認められること、須恵系土器の色調と胎土では、底面と大別４・６・８層が灰白色を主体として胎土が緻密であるのに対し、大別１層は橙色を主体として胎土が粗いこと、という点で相違が認められる。したがって、底面・大別４・６・８層出土土器と大別１層出土土器に分けられる。

底面と大別４・６・８層出土土器は須恵系土器の坏が主体となること、坏の器形や、法量が口径10.4～13.3㎝、器高2.9～3.9㎝であり、法量分化が不明確であること、須恵系土器の色調や胎土が類似することから、出土層は異なるがまとまりを持つ土器群として捉えることが出来る。したがって、一括して年代を検討する。

底面・大別４・６・８層出土土器は、小皿の明確な出土が認められないが、須恵系土器の占める割合の高さや主体となる坏の器形・法量の特徴から、第61次調査の鴻の池地区第７層出土土器(『年報1991』)に類似する。鴻の池地区第７層出土土器は多賀城跡出土土器編年(以下、多賀城編年とする)のＦ群土器(白鳥1980)に比定されており(『年報2006』)、したがって、底面・大別４・６・８層出土土器もＦ群土器と考えられる。鴻の池地区第７層出土土器の年代は10世紀中葉に位置づけられることから(『年報1997・2006』)、底面・大別４・６・８層出土土器の年代は10世紀中葉と考えられる。

大別１層出土土器は、須恵系土器の小皿・坏とともに、高台坏、高台皿が一定量認められる。小皿は口径９㎝前後、坏は口径15～16㎝前後であり、両者の法量分化が明確である。また、坏には柱状高台

のものが認められる。このような特徴は、多賀城編年のG群土器に比定される(『年報2006』)。類似するものに、第32次調査の政庁地区北方SE1066井戸跡出土土器や基本層序第2層出土土器(『年報1978』)がある。これらの年代は、主体となる須恵系土器小皿の法量と共伴した白磁皿の年代観から11世紀後半に位置づけられる(『補遺編』)。大別1層からは、後述するように11世紀後半～12世紀前半と考えられる白磁碗(図版19-19)が出土しており、土器類の特徴とともに白磁の共伴事例も共通する。したがって大別1層出土土器の年代は11世紀後半と考えられる。

【SK3422土坑出土土器】

特徴:出土土器は土師器と須恵系土器である。破片数は土師器5点(供膳具)、須恵系土器68点(供膳具)(第5表)、このうち個体数は土師器2点、須恵系土器13点である(第10表)。出土量は少ないが、須恵系土器の割合が高い。

土師器は高台坏で、器形は高台が直立し、体部から口縁部まで内湾気味に立ち上がる(図版22-1)。

須恵系土器には坏、小皿、坏または皿、高台皿がある。器形・法量が分かるものは小皿1点のみである。小皿の器形は底部から口縁部まで直線的に外傾し、法量は口径9.7㎝、底径4.2㎝、器高1.9㎝、底部の厚さは0.3㎝である(2)。坏または皿には底部が柱状高台のものがある(4)。須恵系土器の胎土は砂を含み粗く、色調は浅黄橙色、にぶい橙色、灰白色等である。

年代:このような特徴は、多賀城編年のF・G群土器に比定され(白鳥1980、『年報2006』)、類似するものに、第66次調査の大畑地区SX2319土器廃棄土壙出土土器(『年報1995』)、第32次調査のSE1066井戸跡出土土器(『年報1978』)がある。年代は、SX2319出土土器が11世紀前半、SE1066出土土器が11世紀後半に位置づけられる(『補遺編』、『年報2006』)。SK3422は、重複関係よりSK3421大別4層より新しく大別1層より古いことから、SK3422出土土器の年代は、11世紀前半頃と考えられる。

【SK3423土坑出土土器】

特徴:出土土器は土師器、須恵器、須恵系土器である。破片数は土師器92点(供膳具56点、貯蔵具1点、煮沸具34点、不明1点)、須恵器28点(供膳具5点、貯蔵具23点)、須恵系土器140点(供膳具)(第5表)、このうち個体数として集計できるのは土師器3点、須恵器1点、須恵系土器18点である(第10表)。須恵系土器が破片数で5割以上、個体数で8割以上を占める。須恵器は坏、長頸瓶、甕の破片で、少量である。

土師器は坏、高台坏、甕、須恵器は坏、長頸瓶、甕であるが、いずれも器形や法量は不明である。

須恵系土器には坏、小皿、高台坏、高台坏または高台皿、台付鉢があり、坏・小皿と高台坏・高台皿が個体数で同じ割合となる。坏の器形は、底部から内湾気味に立ち上がり口縁部が小さく外反し、法量は口径約10.6㎝、底径約5.0㎝、器高約3.0㎝である(図版22-9)。小皿の器形には、底部から口縁部まで直線的に外傾するもの(8)と、体部中位に接合痕が明瞭なもの(7)がある。法量は口径9.2～10.2㎝、底径4.0～4.4㎝、器高1.8～1.9㎝、底部の厚さは0.4～0.5㎝である。須恵系土器の胎土は砂を含み粗く、色調は浅黄橙色と橙色である。

年代:このような特徴は、多賀城編年のF群土器に比定され(白鳥1980)、類似するものに第4次調査の政庁で検出されたSK078土壙出土土器(『本文編』)、第66次調査のSX2319土器廃棄土壙出土土器

(『年報1995』)があり、両者とも年代は11世紀前半に位置づけられる(『補遺編』、『年報2006』)。したがって、SK3423出土土器の年代は11世紀前半と考えられる。

【B-2区第Ⅵa・b層】

特徴:第Ⅵa層と第Ⅵb層から土師器、須恵器、須恵系土器が出土し、これらの土器の特徴には大きな相違が認められないことから、一括して検討する。破片数は土師器197点(供膳具142点、貯蔵具2点、煮沸具53点)、須恵器63点(供膳具25点、貯蔵具38点)、須恵系土器54点(供膳具)(第5表)、このうち個体数として集計できるのは土師器22点、須恵器3点、須恵系土器10点である(第10表)。土師器が破片数、個体数ともに6割以上を占める。

土師器にはロクロ整形の坏、高台坏、鉢があり、坏は底部切り離しが回転糸切り無調整で、底部内面には放射状ミガキが施される(図版32-3～6)。

須恵器には坏、長頸瓶、甕があり、いずれも器形や法量は不明である。長頸瓶は頸部破片で、頸部と胴部の境にリング状の凸帯が巡る(10)。

須恵系土器は坏のみで、器形は土師器坏に類似する(8・9)。法量は口径13.1～14.2㎝、底径5.2～5.8㎝、器高4.5㎝である。須恵系土器の胎土は緻密で、色調は浅黄橙色や橙色である。

年代:このような特徴は、多賀城編年のE群土器に比定される(白鳥1980)。E群土器は灰白色火山灰の上下で認められるが、第Ⅵa・b層出土土器はその下位から出土したものである。類似するものに第6次調査のSF167築地塀崩壊土Ⅱ出土土器(『本文編』)、多賀城市高崎遺跡SX1080土器捨て場跡出土土器(多賀城市1995)があり、これらは10世紀前半頃に位置づけられている。したがって第Ⅵa・b層出土土器の年代は10世紀前半で灰白色火山灰降下以前の10世紀前葉頃と考えられる。

2)施釉陶磁器

白磁、緑釉陶器、灰釉陶器がある。白磁は碗4点、皿2点、壺または水注1点、合子1点の計8点出土した。遺構・層ごとの内訳は、A-2区SK3421大別1層1点(碗)、B-1区第Ⅱb層3点(碗2点、皿1点)、第Ⅱa層2点(壺または水注1点、合子1点)、第Ⅰ層1点(皿)、B-2区第Ⅲc層1点(碗)である(第5表)。B-1区からの出土が多い。碗については、図版27-3が玉縁口縁で太宰府市分類(太宰府市2000)の白磁碗Ⅱ類、図版27-4が厚みのある玉縁口縁、図版19-19が体部内面に沈線状の段があるもので白磁碗Ⅳ類、図版34-5は口縁端部が短く外反するもので白磁碗Ⅱ～Ⅳ類、皿については、図版27-5は底面が露胎のもので白磁皿Ⅱ～Ⅳ類、図版28-13は体下部外面が露胎で内面に沈線状の段が認められるものであり、これらの年代は11世紀後半～12世紀前半である。壺または水注(図版27-6)と合子(7)の年代は不明だが、どちらの器種も多賀城内で出土が少なく(『年報2005』、『施釉陶磁器』)、貴重な出土例である。

緑釉陶器は埦2点が出土し、遺構・層ごとの内訳は、A-2区SK3421大別1層とB-2区第Ⅲc層の1点ずつである(図版24-3、図版35-7)。小破片のため年代は不明である。産地は図版24-3が猿投窯産(『施釉陶磁器』)と推定される。

灰釉陶器は埦5点、埦または皿1点、壺または瓶4点、小破片のため不明1点の計11点出土した。

遺構・層ごとの内訳は、B-1区第Ⅰ層１点（壺または瓶）、B-2区SD3445が１点（埦）、第Ⅵｂ層１点（壺または瓶）、第Ⅳａ・ｂ層２点（埦１点、埦または皿１点）、第Ⅲｃ層３点（壺または瓶２点、不明１点）、第Ⅲａ層（第Ⅲａ～ｃ層含む）３点（埦）である。小破片のため年代は不明である。産地は図版32-16と図版35-12が東濃窯産（『施釉陶磁器』）と推定される。

（２）遺構

ここでは遺構の重複関係を整理し、出土遺物などから年代を検討する。そのうえで、古代の遺構について特徴等を整理し、検討を加える。

１）遺構の年代

①Ａ区

Ａ．重複関係

遺構はいずれも第Ⅳ層地山上面で検出され、北西部のA-1区を除いては近代以降の第Ⅱ層に覆われる。以下、報告したエリアごとに重複関係を整理する（図版36）。

【Ａ区西部】 最も古い遺構はSB3415掘立柱建物で、その柱穴を削るようにSD3424自然流路がある。SD3424堆積土上面から検出された遺構として、北西部（A-1区）ではSD3425→SD3426溝の順が確認され、南西部（A-2区西）ではSE3427井戸とSK3428土坑がある。

【Ａ区中央部】 重複関係からSB3416掘立柱建物、SA3417柱列が古く、これらより新しい遺構としてSK3430土坑とSD3429溝がある。SI3418竪穴建物とSK3431土坑は重複関係がない。

【Ａ区南部】 SK3421土坑が広く分布し、これより古い遺構として、SD3419溝とSK3420土坑がある。SK3420とSK3421の間には第Ⅲ層灰白色火山灰が堆積する。SK3421より新しい遺構としては、SK3422土坑がSK3421大別4層上面で掘り込まれ、最終的にはSK3421大別１層に覆われる。SK3435土坑は、SK3421大別８層上面で検出され、それより上部の堆積土との関係は明らかでない。SK3421大別１層より新しい遺構としてはSK3434土坑、SD3432・3433・3438溝と、Ａ区西部のSD3424自然流路がある。

【Ａ区南東部】 SK3423土坑が古く、その堆積土上面でSK3436土坑とSD3437溝を検出した。

Ｂ．年代

【SB3415・3416掘立柱建物、SA3417柱列、SI3418竪穴建物】 SB3415・3416、SA3417は、柱穴が一辺0.5～1.6ｍの隅丸方形を呈することから古代の遺構とみられる。SI3418も煙道を伴うカマドがあり、カマド側壁とみられる位置に瓦が埋まっていることから古代と考えられる。ただし、いずれの遺構も出土遺物がわずかで、詳細な年代は不明である（註３）。

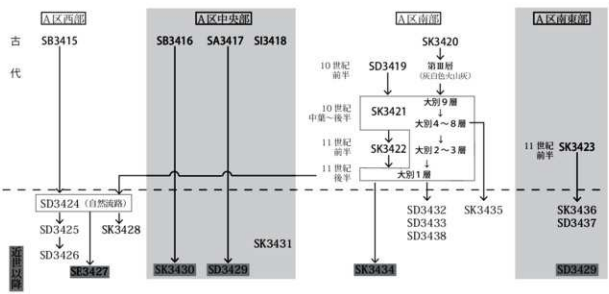
【SK3420・3421・3422・3423土坑、SD3419溝】 SK3420は、第Ⅲ層の灰白色火山灰層より古いことから10世紀前葉以前と考えられる。SK3421は第Ⅲ層より新しく、出土土器から10世紀中葉に機能し、10世紀後半～11世紀前半には人為的に形成された廃棄層と自然流入土（大別２～８層）により徐々に

埋まり、11世紀後半には完全に埋没した（大別１層）と考えられる。SK3422・3423は出土土器から11世紀前半に位置づけられる。SD3419はSK3421の大別８層に覆われることから、10世紀中葉以前であり、堆積土から須恵系土器坏の小破片が出土していることから、10世紀前半と推定される。

【SD3424自然流路、SD3425・3426溝】 これらはSK3421大別１層より新しいことから、11世紀後半以降と考えられるが、年代を直接的に示す遺物は出土していない。

【SE3427井戸、SK3428・3430・3431・3434・3435・3436土坑】 SE3427とSK3430・3434は出土した陶磁器の年代から、近世～近代と考えられる。SK3428は瓦質土器が出土していることから中世以降と推定される。そのほかは、重複関係からSK3435が10世紀中葉以降、SK3436が11世紀前半以降とみられるが、SK3431も含めて年代を示す出土遺物は認められない。

【SD3429・3432・3433・3437・3438溝】 SD3429は出土した磁器の年代から近世以降と考えられる。そのほかは重複関係から、SD3437が11世紀前半以降、SD3433・3438が11世紀後半以降と推定され、SD3432はSD3433と平行し、堆積土が類似することからほぼ同時期とみられるが、これらの年代を示す出土遺物は認められない。



図版36　A区の遺構変遷

②B-1区

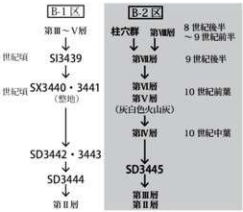
A．重複関係

表土から地山の間に複数の堆積層と遺構面がある（図版37）。第Ⅵ層地山上に第Ⅲ～Ⅴ層が堆積し、第Ⅲ層上面でSI3439竪穴建物を検出した。SI3439廃絶後の窪地を埋め戻してSX3440整地層が分布する。SX3441整地層は重複関係がないが、埋土はSX3440と類似する。SX3440上面でSD3442・3443小溝群が検出され、さらにそれらより新しくSD3444溝がある。すべての遺構を覆って第Ⅱ層が堆積する。

B．年代

【SI3439竪穴建物】 床面から政庁第Ⅰ期の平瓦ⅠA類による隅切瓦が出土しており、堆積土１・２

層を含めて多賀城編年のE群土器以降に認められる須恵系土器が出土していない。よって、出土遺物からは8世紀前葉～9世紀代の時間幅で捉えられる。また、後述するように検出面の第Ⅲ層がB-2区第Ⅶ層と対応する場合、9世紀代に収まる可能性が高い。



図版37　B区の遺構変遷

【SX3440・3441整地層】　SX3440は、主に多賀城編年のE群土器以降に認められる須恵系土器坏が出土していることから、10世紀以降と推定される。また、SI3439の埋没があまり進まない段階で埋め戻していることから、10世紀代でもSI3439廃絶からあまり年代を置かない時期と考えられる。SX3441は出土遺物がないが、整地層の特徴がSX3440と類似することから、同時期の可能性がある。

【SD3444溝、SD3442・3443小溝群】　SD3442とSD3443は、重複関係からSX3440より新しく10世紀以降、SD3444は後述する第Ⅱb層より古いことから近世以前である。これ以上の年代差を検討できる情報がないため、これらの遺構については10世紀以降～近世以前の時間幅で捉えておく。

【基本層】　第Ⅲ～Ⅴ層は年代を検討できる遺物が出土していないが、SI3449より古いことから9世紀以前と考えられる。第Ⅱc層はSX3440より新しいことから10世紀以降、第Ⅱa・b層は出土した陶磁器から近世～近代と推定される。

③B-2区

A. 重複関係

表土から地山の間に複数の堆積層と遺構面を確認した(図版37)。第Ⅸ層地山でP1～4柱穴群が検出され、それらより南東側に第Ⅷ層が分布する。柱穴群と第Ⅷ層を覆って第Ⅶ層→第Ⅵ層→第Ⅴ層(灰白色火山灰)→第Ⅳ層の順に堆積する。第Ⅳ層上面でSD3445溝が検出され、その上部を覆って第Ⅲ層→第Ⅱ層の順に堆積する。

B. 年代

【SD3445溝、P1～4柱穴群】　後述する基本層の年代観から検討すると、SD3445は第Ⅳa層を掘り込み、第Ⅲc層に覆われることから、10世紀以降で近世以前と考えられる。P1～4は第Ⅶ層に覆われるため、9世紀後半より古いと考えられる。

【基本層】　第Ⅷ層は後述する第Ⅶ層の年代から9世紀後半以前と考えられる。なお、層の識別をせず一括して取りあげた第Ⅶ・Ⅷ層出土遺物(註4)には、ロクロ整形で、口径に対して底径が大きく器高が小さい土師器坏(図版32-1)や政庁第Ⅱ期の平瓦ⅡB類aタイプ1がある。この土師器坏は多賀城編年のB群もしくはC群土器(白鳥1980)にみられる器形であることから、第Ⅷ層の年代は8世紀後葉～9世紀前半頃の可能性がある。

第Ⅶ層は、全体の出土量はごく僅かではあるが（第５表）、底部の切り離しが回転糸切り無調整で再調整の認められない土師器坏と須恵器坏が出土していること、須恵系土器が出土していないことから、多賀城編年のＤ群土器（白鳥1980）とみられ、９世紀後半頃と考えられる。

第Ⅵａ・ｂ層は、先述した出土土器の年代から10世紀前葉と考えられる。

第Ⅳａ・ｂ層は、土師器、須恵器、須恵系土器が出土し、須恵系土器坏には、口径11.2㎝、器高3.5㎝のものがある（図版32-14）。類似するものに第61次調査鴻の池地区第７層出土土器（『年報1991』）があり、多賀城編年のＦ群土器（白鳥1980）に該当し、年代は10世紀中葉に位置づけられている（『年報2006』）。したがって、第Ⅳａ・ｂ層は灰白色火山灰降下以降で10世紀中葉頃を中心とした年代と推定される。

第Ⅱ・Ⅲａ～ｃ層からは近世以降の陶磁器が出土している（第６表）。第Ⅳ層の年代を考慮すると、第Ⅲｃ層は10世紀中葉以降近世以前、第Ⅱ～Ⅲｂ層は近世～近代と推定される。

２）遺構の特徴

①掘立柱建物・柱列

Ａ区で見つかった掘立柱建物はいずれも一部であり、全体の規模・構造が明確でないため、ここでは現在分かっている範囲の特徴を列挙するにとどめたい。

まず、SB3415掘立柱建物ではP1～P4の４個の柱穴を検出した。北側や西側に伴う柱穴が分布しないことから、P1を北西隅柱とし、P1とP4を結ぶ列が西辺になると考えられる。この西辺は、政庁西辺の築地塀の北側延長線上に位置しており、計画的な配置を示す可能性がある（図版39）。

SB3415柱穴の平面規模は、北側のP1・P2が一辺0.9～1.2ｍであるのに対し、南側のP3は明らかに大きく一辺1.6ｍに及ぶ。P4もP3と同程度と推定される。柱痕跡の直径もP1とP2が24cm前後に対し、P3は約30cmと大きい。柱穴の配置から想定される建物の構造として、身舎と庇、総柱、間仕切りなどがあるが、次年度の調査を待って判断することとしたい。

SB3416ではP1とP2の２個の柱穴を検出し、A→Bの建て替えを確認した。柱穴の平面規模はSB3415-P1・P2とほぼ同じである。また、東側と南側に柱穴が分布しないことから、P1が南東隅の柱で、P1とP2を結ぶ列が建物の南辺になると考えられる。

周辺にある建物と比較したものが第11表である。このなかでは、政庁北方建物の中心にあるSB551Aの掘方・柱痕跡の規模が一回り大きいが、それ以外のSB551B、SB553A・B、SB1013A・Bについては、SB3415・3416と掘方・柱痕跡の規模、柱間の距離だけでいえばほぼ同じといえる。一方、政庁北方建物より北側で検出されているSB1022・1023・1026と比較すると、SB3415・3416のほうが明らかに大きい。SB1017は掘方と柱痕跡がやや小さいが、柱間はSB3415・3416と同規模である。

SA3417柱列では５個の柱穴を検出した。柱穴と柱痕跡の規模はSB3415・3416よりも小型で、SB1026などに近いが、南北方向の柱間は３ｍ前後と広い。また、南端の柱穴はSB3416南辺のほぼ延長上に位置し、SB3416-P1から東へ約3.45ｍの位置にあるため、SB3416に関連する柱列の可能性も考えられる。

	遺構名	柱穴掘方（一辺 or 径）	柱痕跡直径	柱間
第 94 次 A 区	SB3415	0.9 ～ 1.2 mと 1.6 m	24cmと 30cm	3.00 m
	SB3416A	1.0 ～ 1.2 m	—	—
	SB3416B	0.8 ～ 1.1 m	—	約 3.2 m
	SA3417	0.5 ～ 0.8 m	15 ～ 20cm	2.96 ～ 3.39 m（南北）
第 94 次 B 区	P1-P3	0.4 ～ 0.6 m	15 ～ 18cm	—
政庁北方建物	SB551A	約 1.7 m	45cm	約 3 m
	SB551B	約 1.5 m	30cm 前後	約 3 m
	SB553A	1.5 m前後	25 ～ 30cm	約 3 m
	SB553B	0.7 ～ 0.9 m	25 ～ 30cm	2.94 ～ 3.04 m
	SB1013A	1.4 m前後	30cm	約 3 m
	SB1013B	0.8 ～ 1.0 m	25 ～ 30cm	2.94 ～ 3.39 m
	SB1050A	1.5 m前後	—	約 3 m
	SB1050B	1 m前後	—	約 3 m
第 31・32 次	SB1017	0.9 m	21cm	2.85 ～ 3.03 m
	SB1022	0.4 ～ 0.6 m	14 ～ 18cm	1.64 ～ 2.16 m
	SB1023	0.4 m	14cm	1.8 m
	SB1026	0.5 ～ 0.8 m	18cm 前後	1.68 ～ 2.13 m

※ SB553A・B、1013A・B、1050A・Bは桁行の柱間のみ記載

第 11 表　政庁地区北方の柱穴規模の比較

②竪穴建物

いずれも一部であるが、A区でSI3418、B区でSI3439を検出した。第31・32次調査では、沢の中央に近いN85～N96で竪穴建物3棟（SI1024・1063・1065）が東西方向に並ぶように分布しており（図版39）、政庁第Ⅲ期に位置づけられる（『年報1978』）。SI3418は年代不明だが、これらの竪穴建物が分布する西側延長上にある。一方、SI3439はこれらの分布からは北側に外れた位置にあるが、後述するように第32次調査北区の北端部では、SI3439に対応する遺構面まで調査していないため、この部分にさらに複数の竪穴建物が分布する可能性はある。

③土坑

複数の土坑のうち、多賀城終末期（11世紀前半）以前に位置づけられるものとして、SK3420～3423の 4 基がある。いずれも用途については不明である。

SK3421は検出した範囲で東西18m、南北6.4mに及ぶ長大な土坑である。底面は地形に沿ってなだらかに傾斜し、部分的に凹凸がある。東半部では底面に灰白色火山灰ブロックを含む掘方埋土（大別 9 層）が認められるが、平坦な床面を構築したとは言いがたい。この付近の地山には大型の礫が多く、礫をはずした際の凹凸を埋めた層という可能性もある。

SK3421の広がりについて、対応するとみられる層が第32次調査西区の北西隅に分布する（図版39）。この調査区の堆積層について『年報1978』では詳しく触れていないが、当時の原図等の記載によると、「第3a層：灰白色土をブロック状に含んだ暗灰褐色土、第3b層：灰白色土を多量に含んだ黄灰褐色土、第 4 層：炭化物を多量に含んだ褐色土、第 5 層：地山の汚れた感じの暗黄褐色土」となり、このうち第3a・3b層出土遺物には須恵系土器が含まれている。

第32次調査平面図の標高値を元に、SK3421サブトレンチ②の南北断面とつなげたものが図版38

である(註５)。この部分は丘陵尾根が北から南へ向かって緩やかに下っていく地形と推定されるが、第3a・3b層の分布範囲では北側へ下がる傾斜が認められ、おそらくこの周辺までSK3421が広がっていたと考えられる。灰白色土が火山灰とすると、ブロック状に含む第3a層は、SK3421の大別９層、その下の灰白色土を多量に含んだ第3b層は、SK3421より古い第Ⅲ層に該当する可能性がある。第４層・第５層との対応関係は不明である。今回は第3a層の分布範囲までをSK3421の範囲と推定しておく。

第Ⅲ層の灰白色火山灰は、SK3420土坑の埋土直上およびそれより広範囲を覆い、SK3421土坑の下位に堆積する。そのため、第Ⅲ層が堆積した時点で、この部分は周囲よりも低く掘り下げられていたか、自然地形として窪んでいたと考えられる。人為的な掘り込みの場合、SK3421に第Ⅲ層より古い段階と新しい段階(大別９層以後)の２段階があった可能性や、SK3420がSK3421の古い段階の掘方埋土の一部(礫をはずした穴を埋め戻したもの)である可能性なども検討したが、いずれも今回の発掘調査では明確な根拠は得られなかった。

SK3421と年代・形態が近い土坑として、約23m東側にSK1014がある(図版39)。「東西12m、南北４mの不整方形の土壙で、底面は凹凸が著しく最も深い所で40cmを測る」(『年報1977』-p.47)とある。SK1014は、ほぼ全体が人為的に埋め戻されているが、須恵系土器を含み、政庁第Ⅳ期に位置づけられる。政庁北方建物より北側では、政庁第Ⅳ期に大型の土坑掘削が相次いで行われたと考えられる。

図版38　第32次調査西壁とSK3421断面（図版39の断面aの位置に対応）

④Ｂ区周辺の層序・遺構面の対応関係について

Ｂ区は狭い調査範囲から得られた情報ではあるが、近接する第31・32次調査も含めて層序と遺構面の対応関係について整理し(図版40)(註５)、沢の北側斜面の利用や変遷について予察したい。混乱を避けるため、以下文中ではB-2区の基本層に下線を付す。

〔最上層の遺構面〕　Ｂ区では表土・盛土下に近世陶磁器や須恵系土器を含む黒褐色シルト層(B-1区第Ⅱ層、B-2区第Ⅱ・Ⅲ層)が分布し、これを掘り下げたところに最上層の遺構面がある。B-1区ではSX3440・3441整地層上面、B-2区では第Ⅳ層上面に該当し、須恵系土器を含む褐色層の上面で小溝群と溝(SD3442～3445)を検出した。対応が推定される遺構面として、第31次調査の第Ⅳ・Ⅴ層上面、第32次調査区の第２層上面があり、遺構としては登録していないが東西方向の溝を検出している(『年報1977』-第58図、『年報1978』-第３図)。また、第32次調査ではこれより下層の第３層上面でSD1051溝のほか、土坑・井戸などを検出しており(図版３)、この面に対応する可能性もある。いずれの場合でも、この遺構面の年代は10世紀以降と考えられる。

〔竪穴建物〕　B-1区では、SX3440整地層の下層でSI3439竪穴建物が確認され、第Ⅲ層(にぶい黄褐色シルト)を掘り込み面とする。第Ⅲ層はB-2区第Ⅶ層（にぶい黄褐色粘土質シルト)に色調・混入物が

類似しており、須恵系土器を含む層に覆われ、層中に須恵系土器を含まないという点で、第31・32次の竪穴建物（SI1024・1063・1065）検出面である第32次第６層および第31次第Ⅸ・Ⅹ層上面とも対応する可能性がある（図版40）。年代はB-2区第Ⅶ層が先述したとおり９世紀後半、第32次第６層が９世紀代と推定される（『年報1978』）ことから、この遺構面はおおむね９世紀代と捉えられるが、その中で多少の年代差があると考えられる。

〔柱穴群〕 B-1区第Ⅲ層とB-2区第Ⅶ層がほぼ対応するとした場合、B-2区第Ⅸ層（地山面）で検出されたP1～P4柱穴群は、SI3439よりも古く位置づけられる。第31次調査では、SI1024竪穴建物より下層でSB1022・1023・1026掘立柱建物を検出している。『年報1977』ではこれらを政庁第Ⅲ期以降に位置づけているが、SI1024が政庁第Ⅲ期（『年報1978』）とすると、SB1022・1023・1026も政庁第Ⅲ期の中で捉えられることとなる。

SB1022・1023・1026は標高30～31ｍ、B-2区の柱穴群は標高30ｍ付近で検出し、これらは掘方・柱痕跡の規模も近似する（第11表）。また、B-2区柱穴群の南東側に分布する第Ⅷ層が政庁第Ⅲ期の可能性があり、層序からも柱穴群の時期に近いと考えて矛盾はない。政庁地区北方では、政庁第Ⅲ期の一時期に沢の南北両側斜面、標高30～31ｍ付近で、小型の掘立柱建物の造営が行われた可能性を指摘できる。

註１：近世以降の陶磁器の年代観については、宮城県教育庁文化財課の齋藤和機氏にご教示いただいた。

註２：小皿については、大別４層から出土した須恵系土器の中でこれのみ胎土や色調が大別１層出土のものと類似しており、大別１層からの混入の可能性もある。

註３：SB3415-P3検出面で平瓦ⅡＣ類、SB3416A掘方埋土から器面の風化が著しい焼けた平瓦が出土しているが、これらの遺物の評価と建物の年代については、来年度全体を調査したうえで改めて検討する。

註４：「第Ⅶ・Ⅷ層出土遺物」とした土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、平瓦ⅡＢ類ａタイプ１は、調査時に第Ⅶ層と第Ⅷ層を識別せずに取りあげたものである。これらは、「第Ⅶ層出土遺物」よりも下位で出土し、これらの遺物を取りあげた後に第Ⅷ層の存在を認識したことから、第Ⅷ層に帰属する可能性がある。

註５：図版38と図版40について、第31・32次調査の断面図の使用にあたっては、東日本大震災による基準点移動に対処して、調査当時の標高から30cmを差し引いた値を現在の標高とみなして合成し、標高値を赤字で示している（『外郭Ⅰ』pp.21-23）。

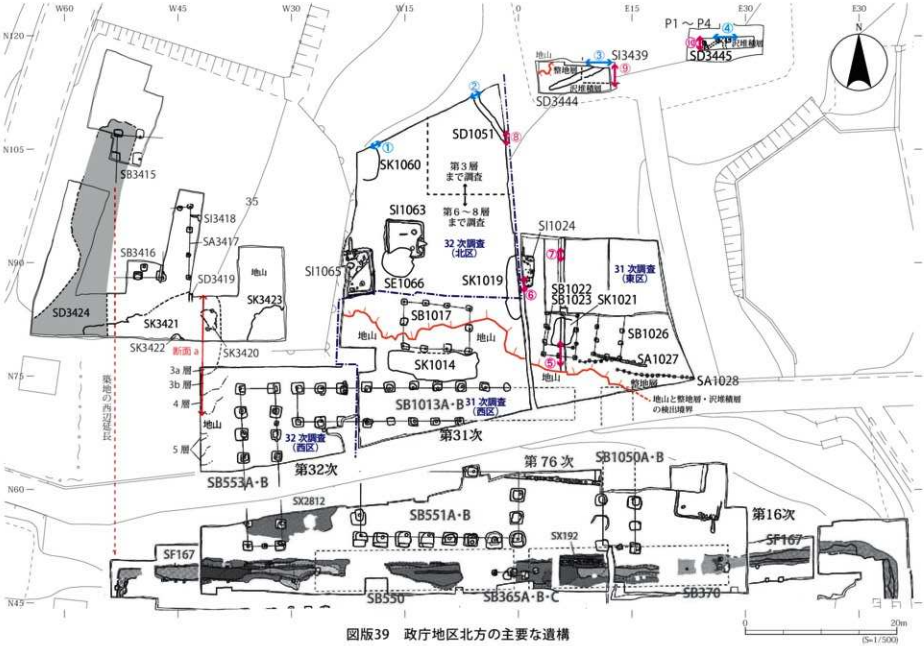
引用文献

宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 pp.215-232

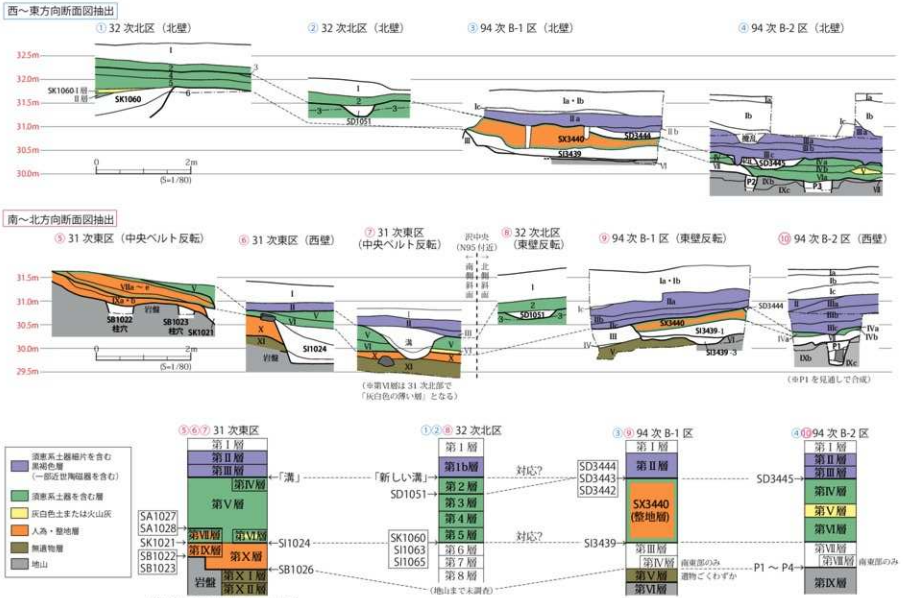
白鳥良一1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ pp.1-38 宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市教育委員会1995『高崎遺跡－第11次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第37集

太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集



図版39　政庁地区北方の主要な遺構



図版40　基本層序と遺構面の対応関係

Ⅲ. 漆紙文書の追加報告

多賀城跡調査研究所では、多賀城跡で出土した考古資料のうち特筆される遺物については種別ごとの整理を進め、ある程度まとまりをもった段階で資料集を刊行しており、これまでに漆紙文書、木簡、施釉陶磁器の資料集を刊行してきた(『漆紙文書』、『木簡Ⅰ～Ⅲ』、『施釉陶磁器』)。またこれらの刊行後に出土した資料や、修正や補足、新たに注目される事実が判明した資料については、『年報』で報告・追加報告している。

今回報告する漆紙文書２点は、『漆紙文書』の刊行後に東北大学から移管された政庁跡出土漆紙文書、『年報1989』での報告後に新たに複数の断片の接合関係が判明した馬関係の帳簿である(註１)。

<赤外線写真（Z9182）>

〈釈文〉

【表面】

×勲十等□□マ□□呂（万カ）

少初位上勲×

【漆面】

×二百□歩

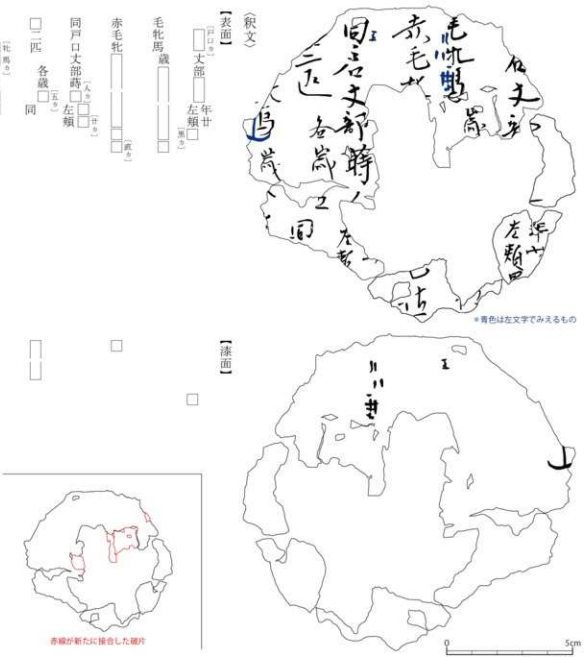
×□歩

図版41　第３次調査出土漆紙文書

（1）第３次調査出土漆紙文書

本資料は東北大学において陸奥国分寺出土資料などとともに保管され、1989年に本研究所へ移管されたのち、未報告となっていたものである（図版41）。資料は収められていた箱の注記から、政庁跡を対象とした第３次調査で出土しており、同調査で漆紙文書が出土したのは第Ⅲ-1期のSB172西脇殿の東南に位置する焼土層であることから（『漆紙文書』-p.11）、そこに帰属する可能性がある。形状は、現況では不整な断簡で、大きさは表面の文書の方向で縦11.6cm、横8.8cmである。

文字は表面・漆面ともに２行分を確認したが、赤外線カメラを使用しても全体に不鮮明で、漆面の「歩」は表面から左文字として確認できるのみである。表面は２行とも位階や勲位に続けて人名が書かれているが、勲位の記載が１・２行目で上下に離れていることから、署名とは断定できない。裏面は「二百□歩」の記載から、田籍の一部と考えられる。



図版42　第56次調査SI1903出土漆紙文書（１）

（2）第56次調査出土漆紙文書

本資料はSI1903竪穴建物床面から出土したもので、欠損しているが円形を呈するとみられ、大きさは表面の文字の方向で縦約12cm、横約13cmである（図版42・43）。共伴する遺物から、遺構の年代は8世紀中頃とみられ、多賀城跡から出土した漆紙文書としては最も古い。内容は、「伯（百）姓牛馬帳」やそれに関連する私馬の帳簿の可能性がある。

今回接合したのは内側の欠損部分を中心に４片で、文書の性質に変更はないが、釈文が補足される。表面では1行目の「□丈部」が「□〔戸ロカ〕丈部」、２行目の「毛牝馬□」が小破片として報告した「歳」との接合によって「毛牝馬歳□」、４行目の「丈部□□」が「丈部蒔□〔人カ〕」となる。漆面は１行目のみ文字を確認していたが、赤外線写真を改めて検討した結果、新たに２行分の墨痕を確認できた。

註１：資料の基礎整理については、1993年に当時東北大学大学院生であった鈴木拓也氏（現近畿大学）が行った。また本年報に掲載するにあたっては、宮城県教育庁文化財課吉野武氏、東北歴史博物館相澤秀太郎氏にご教示頂いた。実測・写真撮影は高橋透が行った。

＜赤外線写真（Z9183）＞

図版43　第56次調査SI1903出土漆紙文書（２）

Ⅳ. 付　章

1. 関連研究・普及活動

（1）多賀城跡環境整備事業

多賀城跡環境整備事業は昭和45年度から５ヵ年計画を積み重ねる形で実施してきており（第12表）、平成27年度を初年次とする第10次５ヵ年計画からは、政庁南面地区を対象に整備工事を進めている。これは政庁の南面に位置する政庁南大路や城前官衙の遺構表示を中心としたものであり、多賀城創建1300年の記念の年に当たる令和６年の供用をめざしている（第12表）。

令和２年度の整備工事は、現在、令和元年度事業から一部繰越している工事、令和元年10月発生の台風19号の災害復旧工事の繰越工事、そして本年度分の本工事を実施中であるが、新型コロナ感染症予防対策の影響により工事の進捗に遅延が生じているため、これらの工事はさらに令和３年度に繰り越すこととなった。今年度実施している工事仕様等の実績については来年度に報告することとしたい。

	年　度	整備地区	計画内容	対象面積
第10次５ヵ年計画	平成 27 (2015)	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、総合解説広場補修	24,000㎡
	平成 28 (2016)		政庁南大路復元舗装、地形測量	
	平成 29 (2017)		基盤整備工、実施設計	
	平成 30 (2018)		造成工、法面工、擁壁工、雨水排水工	
	令和　元 (2019)		雨水排水工、災害復旧 政庁南大路石垣復元・路面復元舗装、大路関連遺構表示	
第11次５ヵ年計画	令和　2 (2020)	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、城前官衙床張建物表示、建物構造復元	
	令和　3 (2021)		城前官衙床張建物表示、土間建物表示、掘立柱塀表示	
	令和　4 (2022)		城前官衙土間建物表示、掘立柱塀表示	
	令和　5 (2023)		説明板、張芝、便益施設	
	令和　6 (2024)	作貫地区	空堀露出展示、説明板、緑化修景	—

第 12 表　多賀城跡環境整備事業第 10・11 次５ヵ年計画

（2）特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更する際には、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡に影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査や、工事に際する立会を行っている。令和２年度に扱った現状変更は４件である（第13表）。

１は既に許可されている南門復元に係る工事の内容を変更するもので、地面の掘削を伴わないものであることから、多賀城市教育委員会が立会った。

２は既に許可されている中央公園整備のうち、便所の建築工事に伴う発掘調査を行った。建設予定地は第Ⅱ期以降の南門が建つ丘陵の南側湿地域にあたるところで、建築予定の約10m四方の範囲を掘り下げ、地表面から約2.3mまでは山砂による現代の盛土であることを確認した。さらに下層の状況を確認するために、一部掘り下げたところ、その下層で厚さ0.7mの黒褐色粘土層、さらに下層で厚さ1.0m以上の暗褐色粘土層を確認した。暗褐色粘土層から須恵系土器が1点出土したが、地表面から深さ４mまでにおいて、明確な古代の遺構面は確認できなかった。また、汚水排水管の埋設に立会った結

果、丘陵裾部において、地表面から深さ１mまで現代の盛土層と時期不明の暗褐色層、その下層で古代の遺構面である厚さ60m以上の黄褐色砂質シルト層を確認した。この黄褐色砂質シルト層からは古墳時代とみられる土師器甕が出土しており、この層は古墳時代の堆積層と推定される。

３は史跡見学者の休憩に供するベンチの設置に伴うもので、設置工事に立会い、掘削が表土内に収まり、古代の遺構面には及ばないことを確認した。４は環境省が実施している『みちのく潮風トレイル』の誘導用標識を設置するものであり、未実施である。

番号	変更事項	申請者	変更箇所	申請	文化庁許可	対応
1	南門復元工事（盛土範囲変更、樹木伐採追加等）	多賀城市長	多賀城市市川字坂下19-1ほか	令和２年4月14日	２受文庁第４号の212 令和２年５月25日	多賀城市教育委員会の立会
2	中央公園整備（うち便所建設）	多賀城市長	多賀城市市川字立石、字田屋場ほか	平成29年2月9日	28受庁財第４号の1972 平成29年3月10日	確認調査（便所建設地） 令和２年９月10～16日
	（便所汚水排水管のルート変更）			令和２年8月19日	２受文庁第４号の1029 令和２年11月18日	工事立会（排水管埋設） 令和２年12月11日～令和３年１月12日
3	ベンチ設置	多賀城市長	多賀城市市川字立石27ほか	令和２年8月24日	２文庁第1217号 令和２年11月10日	工事立会 令和３年１月７日
4	誘導標識設置	東北地方環境事務所長	多賀城市市川字六月坂39-1ほか	令和２年12月14日	２受文庁第４号の1837 令和３年１月14日	（未実施）

第13表　令和２年度現状変更一覧

（３）多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続している。平成21年度からは多賀城創建期の窯跡群の発掘調査を実施し、造瓦体制とその社会的背景の解明を主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第８次５ヵ年計画を進めていたが、東日本大震災による復旧・復興事業に伴う発掘調査の支援を優先するため、３年次目の平成23年度から当面の間は事業を休止している。再開にあたっては従来の計画を継続し、大崎市大吉山瓦窯跡の発掘調査に着手する予定である。

（４）遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査で検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は、平安時代に創建された城柵で鎮守府でもある岩手県奥州市胆沢城跡の調査を行い、遺構と出土施釉陶磁器の比較から、多賀城の城内官衙の理解や調査方法についての基礎資料を得た。

（５）公開講座の開催

当研究所の研究員がそれぞれの専門分野の視点から、これまでの調査研究の蓄積を踏まえて、多賀城跡や古代東北地方に関する一般向けの講座を開催した。会場は東北歴史博物館の３階講堂を使用し、毎回約70名の参加者を得た。

第１回　11月７日(土)13:30～15:00　施釉陶磁器からみた多賀城(高橋　透)
第２回　11月14日(土)13:30～15:00　多賀城南門を復元する(白崎恵介)
第３回　11月28日(土)13:30～15:00　大崎平野北縁に築かれた古代の防衛ライン(村上裕次)

（6）その他

1）宮城県内の震災復旧・復興事業に伴う発掘調査の支援

各地域の早期復旧を目指し、発掘調査の支援に職員１名を常時派遣した。

鈴木貴生　令和２年４月１日～令和３年３月31日

2）現地説明会の開催、見学会などへの対応

発掘調査の成果を一般に公開するため、調査の進捗状況をホームページで公開するとともに、下記の現地説明会を行った。

多賀城跡第94次発掘調査現地説明会	村上裕次・初鹿野博之	令和２年10月17日

また、以下の団体の史跡見学等に関して説明を行った。

新潟県十日町市議会会派行政視察	高橋栄一	令和２年10月11日
塩竈市立浦戸小学校6年生社会科校外学習	白崎恵介	令和２年11月17日

3）資料の閲覧・貸出などに関する協力

以下の機関・団体等への資料の閲覧・貸出などに際し、準備・説明等をした。

朝日新聞出版、石巻市教育委員会、大崎市教育委員会、大場健太、及川健作、（株）岩波書店、（株）河合出版、（株）学研プラス、（株）実教出版、（株）駿台文庫、（株）多賀城DMC、（株）山川出版社、（株）雄山閣、（株）ラング、桑原滋郎、佐川正敏、佐久間正明、下野市教育委員会、大仙市教育委員会、多賀城市、多賀城市教育委員会、多賀城市市民経済部商工観光課、多賀城市立図書館、舘内魁生、千葉県教育振興財団、東北歴史博物館、永峰敏次、名取市歴史民俗資料館、宮城県考古学会、木簡学会、谷津愛奈、柳澤和明、結城　智

4）各機関・委員会などへの協力

高橋栄一	秋田市秋田城跡環境整備委員会委員、秋田県払田柵跡環境整備審議会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、特別史跡多賀城跡附寺跡保存活用計画策定委員会委員、多賀城市文化財保護委員会委員、岩沼市原遺跡調査検討委員、古代城柵官衙遺跡検討会世話人代表
白崎恵介	釜石市橋野高炉跡史跡整備検討委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、松島町文化財保護委員会委員、亘理町三十三間堂遺跡整備委員会委員、松島町景観審議会委員、石巻市博物館展示工事桃生城模型制作協力
初鹿野博之	多賀城南門等復元工事屋根瓦復元協力、東京大学総合研究博物館研究事業協力員

5）講演会・研究会などへの協力・執筆

高橋栄一・白崎恵介・村田晃一・村上裕次・高橋　透・下山貴生		
	「多賀城出土施釉陶磁器の研究」日本考古学協会第86回総会	令和２年６月30日
高橋　透	「2019年の考古学界の動向　古代　東北」『考古学ジャーナル』No.742	令和２年７月30日
村上裕次	「宮城県における古墳時代前期の古墳の研究」『宮城考古学』第22号	令和２年９月18日
白崎恵介	「多賀城創建1300年に向けた多賀城跡政庁南面地区の整備について」同上	
村上裕次・初鹿野博之	「多賀城跡第94次調査」「令和２年度宮城県遺跡調査成果資料集」	令和２年12月12日
白崎恵介	「松島の都市と建築に見る歴史的景観」松島れきし再発見パネル展　観瀾亭松島博物館	令和３年１月29日
白崎恵介	「多賀城の未来を紡ぐパネルディスカッション」多賀城市第六次総合計画シンポジウム	
		多賀城駅北ビル　令和３年２月４日
白崎恵介	「遺跡・建造物など不動産資料への対応」歴史文化資料保全コーディネーター講座	
		東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館　令和３年３月３日

6）連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県教育委員会教育長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

高橋　栄一（客員教授）	文化財科学研究演習
高橋　栄一（客員教授）・白崎　恵介（客員准教授）	文化財科学研究実習１

2．組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

（昭和41年４月26日教育委員会規則第４号　最終改正平成31年４月教育委員会第１号）

第13条の五　文化財課の分掌事務は、次のとおりとする。

四　多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条　特別史跡多賀城附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ)の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

２　多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名　称	位置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

３　多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

一　特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。

二　特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。

三　特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。

四　庶務に関すること。

第24条　必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職　務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

２　上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

〈職員〉

所　長
高橋　栄一

（兼博物館
管理部長）
岩淵　孝喜

（兼博物館）
副参事兼次長）
狩野　智幸

≪研究班≫

上席主任研究員（班長）	白崎　恵介
副主任研究員（副班長）	村上　裕次
研　究　員	初鹿野　博之
技　　師	高橋　　透
技　　師	鈴木　貴生

≪(兼東北歴史博物館管理班)≫

(兼博物館主幹)	佐々木　美幸
(兼博物館主任主査)	阿部　美歩
(兼博物館主事)	四野見　聡
(兼博物館主事)	渡邊　未希

3．沿革と実績

（1）宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年	月	事	項
大正	11.10	多賀城跡が史跡名勝天然記念物保存法により史跡指定（大正 11．10．12）。指定名称「多賀城廃寺跡」
昭和	35.	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織し、5 カ年計画による多賀城跡の発掘調査の初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
	36. 8	多賀城廃寺跡第 1 次発掘調査実施（県教委主体，多賀城町と河北文化事業団共催，調査団長は伊東信雄東北大学教授）
	37. 8	多賀城廃寺跡第 2 次発掘調査実施。主要伽藍配置が判明
	38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査（第 1 次）開始。以後 40 年 8 月（第 3 次）まで実施。政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
	41. 4	多賀城跡明寺跡特別史跡に昇格指定（昭和 41．4．11）
	43.11	多賀城址が多賀城跡政庁地区の発掘調査（第 4 次）を再開
	44. 4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
	44. 7	多賀城跡調査研究所指導委員会設置（委員長伊東信雄）。研究所による多賀城跡調査研究事業開始
	44.10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
	45. 3	「多賀城跡調査報告 1 －多賀城廃寺跡－」刊行
	45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
	48.10	金堀地区を対象とした第 21 次調査で計画瓦文書断簡を発見
	49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示（昭和 49．2．18）
	49. 4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
	49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手（昭和 50 年度まで継続）
	49. 8	ブレハノ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
	52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手（昭和 54 年度まで継続）
	53. 4	研究第一科・同第二科の 2 科制となる。遺構調査研究事業開始
	53. 6	漆紙文書の発見を報道発表。これより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
	54. 3	多賀城跡調査研究所資料 I「多賀城漆紙文書」刊行
	55. 3	「多賀城跡　政庁跡　図録編」刊行
	55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示（昭和 55．3．24）
	55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手（昭和 60 年度まで継続）。初年度の調査で 8 世紀初頭の官衙中枢部を検出
	57. 3	「多賀城跡　政庁跡　本文編」刊行
	58.11	第 43・44 次調査で政庁南面前の道路遺構発見
	59. 3	多賀城跡南地域の追加指定が官報告示（昭和 59．3．27）
	60. 9	名生館遺跡関連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
	61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手（平成 4 年度まで継続）
	62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
	62.11	第 53 次調査で奥島時代の外郭北門を発見
平成	2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示（平成 2．6．28）
	2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門－政庁間整備活用専門部会を設置
	4.11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
	5. 8	下伊場野窯跡群の調査を実施し、3 基の多賀城創建瓦窯跡を発見
	5. 9	山王遺跡千刈田地区の追加指定が官報告示（平成 5．9．22）
	6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開（平成 13 年度まで継続）。政庁の全貌を解明
	7. 6	第 31 回指導委員会において南門－政庁間整備活用計画案承認
	9.11	多賀城調査局の解体修理および南地下部分の発掘調査を実施
	10. 6	多賀城碑の重要文化財（古文書）指定が官報告示（平成 10．6．30）
	11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
	11. 4	2 科制が廃され、研究班となる
	11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
	14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞
	14. 8	亀岡遺跡の発掘調査に着手（平成 15 年度まで継続）
	15. 3	「多賀城跡－発掘のあゆみ －」刊行
	15. 6	伊治城跡の史跡指定が官報告示
	16. 4	多賀城政庁跡の再整備に先立ち、政庁地区の調査に着手（平成 20 年度まで継続）
	18. 5	木戸窪跡の発掘調査に着手（平成 18 年度まで継続）
	18. 4	多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第 13 号により多賀城跡調査研究委員会を設置
	19. 8	日の出山窯跡群の発掘調査に着手（平成 22 年度まで継続）
	20. 4	多賀城政庁跡の再整備に着手（平成 26 年度まで継続予定）
	22. 3	「多賀城跡　政庁跡　補遺編」刊行
	22. 9	多賀城跡発掘調査 50 周年記念事業を開催
	22.10	「多賀城跡－発掘のあゆみ 2010 －」刊行
	22.11	第 82 次調査で第 1 期の外郭東門を新たに発見
	23. 3	多賀城跡調査研究所資料 II「多賀城跡木簡 I」刊行
	24. 5	東日本大震災の復旧工事に伴い、政庁正殿跡を調査。宝亀 11(780) 年の火災による焼失と建替えを確認
	25. 3	多賀城跡調査研究所資料 III「多賀城跡木簡 II」刊行
	26. 2	多賀城跡出土木簡と多賀城跡出土漆紙文書の県指定有形文化財（古文書）指定が公報告示（平成 26．2．25）
	26. 3	多賀城跡調査研究所資料 IV「多賀城跡木簡 III」刊行
	28. 2	新守府印の文書について報道発表
	28. 2	特別史跡多賀城跡指導整備基本計画を策定
	29. 3	「多賀城跡　外郭跡 1 －南門地区－」刊行
	30. 3	「多賀城跡　政庁南面地区－城前官衙遺構・遺物編－」刊行
	31. 3	「多賀城跡　政庁南面地区 II －城前官衙総括編－」刊行
令和	元	第 93 次調査で第 II 期の外郭西北門を新たに発見
	2. 3	多賀城跡調査研究所資料 V「多賀城伽藍瓦編」刊行
	2. 3	「多賀城跡調査研究所の軌跡－設立 50 周年記念誌－」刊行
	2. 3	「多賀城跡－発掘のあゆみ 2020 －」刊行
	3. 3	「多賀城跡　政庁南面地区 III －政庁南大路・南北大路－」刊行

（2）事業実績

1）多賀城跡発掘調査事業の実績

計画	年度	次数	発掘調査地区	発掘面積(㎡)	経費(千円)
第一次五カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000
		6次	政庁地区北東部	2,079	
		7次	外郭南辺中央部（多賀城神付近）	264	
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000
		9次	政庁地区南西部	2,046	
		10次	外郭西辺中央部	495	
		11次	外郭東辺南部	660	
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000
		13次	外郭東辺東門付近	1,600	
		14次	外郭東地区北部	2,086	
	昭和47	15次	鶴の池周辺	112	13,000
		16次	政庁地区北半部	1,320	
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729	
		18次	外郭中央部地区北部	2,937	
	昭和48	19次	政庁地区北西部	2,640	17,000
		20次	外郭南辺中央部	990	
		21次	外郭西地区中央部	1,485	
		22次	城外南方（高平遺跡）	3,465	
第二次五カ年計画	昭和49	23次	外郭東地区北部（字大畑）	3,300	17,000
		24次	外郭南東隅	2,640	
	昭和50	25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310	22,000
		26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310	
		27次	桑社宮西隣市川大久保地区	660	
	昭和51	28次	五万崎地区	2,310	22,000
		29次	五万崎地区	2,310	
	昭和52	30次	五万崎地区	1,980	22,000
		31次	政庁北方隣接地区	1,980	
	昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000	22,000
		33次	外郭西門地区	1,000	
第三次五カ年計画	昭和54	34次	浦山地区南低湿地	1,300	30,000
		35次	鶴の池南地区	900	
	昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800	30,000
		37次	多賀城外南地方（砂押川東岸）地区	700	
	昭和56	38次	作貫南端低湿地（緊急調査）	50	35,000
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500	
		40次	外郭南辺築地東半中央部（立石地区・緊急）	80	
	昭和57	41次	外郭東辺南端部（田屋場東端地区）	1,200	32,000
		42次	外郭東地域中央部（作貫地区）	500	
	昭和58	43次	外郭中央地区中央部（政庁南方）	800	32,000
		44次	外郭中央地区中央部（政庁南方）	2,500	
第四次五カ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000
		46次	外郭西門地区	750	
		47次	外郭西辺中央部	1,000	
	昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000
		49次	外郭北門推定地区	450	
	昭和61	50次	政庁南地区	900	29,000
		51次	外郭北東隅東地区	500	
	昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000
		53次	外郭東門北東地区	1,000	
	昭和63	54次	外郭東門東地区	1,000	29,000
		55次	外郭東辺中央部（作貫地区）	500	
第五次五カ年計画	平成元	56次	大畑地区北半部	1,550	29,000
		57次	外郭東辺南半部（西沢地区）	500	
	平成2	58次	大畑地区中央部	1,470	30,000
		59次	大畑地区中央部東側	900	
	平成3	60次	大畑地区中央部	1,450	30,000
		61次	鶴の池地区	150	
	平成4	62次	大畑地区南半部	1,100	35,000
		63次	大畑地区北半部	1,700	
	平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000
	平成6	65次	外郭東門北部・現状変更に伴う調査	2,200	36,000
	平成7	66次	大畑地区北西部	3,000	35,000
	平成8	67次	大畑地区西部	3,000	39,000
	平成9	68次	大畑地区西部・多賀城跡	2,650	36,000
	平成10	69次	城前地区南部	2,000	36,000
第六次五カ年計画	平成11	70次	城前地区南部	2,000	37,700
	平成12	71次	城前地区南部	2,000	32,300
	平成13	72次	南門西側築地塀跡・南門一政庁間道路跡	1,000	28,900
	平成14	73次	南門東側築地塀跡・南門一政庁間道路跡	1,800	26,000
	平成15	74次	南門一政庁間道路跡	1,000	25,220
		75次	外郭北辺中央部	500	
第七次五カ年計画	平成16	76次	政庁東脇殿・後殿・北辺地区	1,640	24,463
	平成17	77次	政庁東楼・西脇殿・南面地区	970	23,730
	平成18	78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区	2,700	16,610
	平成19	79次	政庁・外郭南門間道路、城前・鶴池地区	1,350	14,168
	平成20	80次	山屋場地区・政庁南西地区	930	12,752
第八次五カ年計画	平成21	81次	鶴の池地区・政庁南西地区	900	12,064
	平成22	82次	外郭東辺伊保石地区	580	11,460
	平成23	83次	外郭南辺五万崎地区	960	11,447
	平成24	84次	外郭南辺五万崎地区	445	11,294
		85次	政庁地区　正殿跡	415	
	平成25	86次	外郭南辺坂下地区	350	10,300
第九次五カ年計画	平成26	87次	外郭南辺山屋場・坂下地区	910	9,901
	平成27	88次	外郭南辺立石地区	390	9,424
		89次	政庁南大路・城前地区	280	
	平成28	90次	外郭南辺坂下地区	430	9,224
	平成29	91次	外郭南門山屋場地区（南北大路）	720	10,347
	平成30	92次	外郭南辺五万崎地区	200	9,255
第十次五カ年計画	令和元	93次	外郭西辺丸山地区	300	10,688
	令和2	94次	政庁地区北方	600	10,672
	令和3	95次	政庁地区北方		
	令和4	96次	政庁地区北方		
	令和5	97次	政庁地区北方		

調査面積累計	119,673㎡
調査費用累計（千円）	1,180,919
指定地総面積	約1,070,000㎡
調査面積／総面積	約11%

2）多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費（千円）
第1次5ヵ年計画	昭和45	政庁地区	南門覆屋・東脇殿表示	10,000
	昭和46		正殿・築地塀表示	20,000
	昭和47		西脇殿・築地塀表示	25,000
	昭和48		北西門・築地塀表示	20,000
		外郭東門地区	東門・壁穴住居表示	
	昭和49	八月原地区	掘立柱建物・倉庫・道路表示	20,000
第2次5ヵ年計画	昭和50	外郭東南隅地区	木簡遺構保存施設	20,000
	昭和51		堀地修景・園路	10,000
	昭和52	鴻の池地区	南辺築地塀表示	16,000
	昭和53		多賀城碑周辺修景	16,000
		南門地区	南門・築地塀保護	
	昭和54		南門周辺丘陵の地形修復・緑化修景	20,000
第3次5ヵ年計画	昭和55	南門地区	園路・便益施設・緑化修景	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景	30,000
		園路（資料館・南門）	園路・便益施設・緑化修景	
	昭和57	外郭南門地区東斜面	園路	28,000
		作貫地区	道構保護盛土・緑化修景	
	昭和58		建物表示・便益施設・緑化修景	30,000
	昭和59		土塁及び空堀表示・便益施設	27,000
第4次5ヵ年計画	昭和60	作貫地区	道構露出展示・便益施設・緑化修景	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復・道路復元・緑化修景	27,000
		作貫地区	便益施設	
		釜山地区	緑化修景	
	昭和62	作貫地区北部	園路・緑化修景・便益施設	27,000
		政庁地区	便益施設・園路・緑化修景	
		釜山地区	便益施設・緑化修景	
	昭和63	作貫地区北部・丘陵南西側部	便益施設・園路・緑化修景	27,000
	平成元	北辺地区南半部	便益施設・園路・緑化修景	27,112
第5次5ヵ年計画	平成2	北辺地区北半部	便益施設・園路・緑化修景	30,000
	平成3		便益施設・園路・緑化修景	30,000
	平成4		便益施設	30,000
		東門・大畑地区東側部	地形修復・園路・緑化修景	
	平成5		建物表示・便益施設	35,000
	平成6		便益施設	35,000
第6次5ヵ年計画	平成7	東門・大畑地区西側北半部	道路復元・築地塀表示・便益施設・緑化修景	30,000
	平成8		地形修復・道路復元・緑化修景	39,000
	平成9		道路表示・便益施設	51,000
		南門地区	多賀城碑覆屋解体修理	
	平成10	東門・大畑地区西側北半部	道路表示・排水・緑化修景	35,000
	平成11		建物表示・便益施設・緑化修景	31,500

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費（千円）
第7次5ヵ年計画	平成12	柏木遺跡	造成・排水・法面保護	14,400
	平成13		法面・園路・植栽・排水	19,700
	平成14		法面保護・園路	9,300
	平成15		法面・道構表示・園路・植栽	9,020
	平成16		園路広場・排水・植栽・照明	8,266
第8次5ヵ年計画	平成17	外郭北辺東北隅（柏木遺跡）	案内板・標柱整備	15,738
	平成18		基盤整備・広場・自然育成	11,016
	平成19		構造物撤去・広場・便益施設・自然育成	9,462
	平成20	政庁南面地区	築地塀舗装撤去	8,514
	平成21		築地塀舗装撤去	8,500
	平成22		追加道構表示《西脇殿・西楼》	8,084
	平成23		追加道構表示《東脇殿・東楼》	8,104
	平成24		追加道構表示《後殿》	7,956
	平成25		敷地造成《北殿》	7,560
	平成26		追加道構表示《北殿》	8,636
第9次5ヵ年計画	平成27		政庁南入路・説明板・休憩施設再整備	8,193
	平成28		政庁南入路再整備・地形測量	13,000
	平成29		構造物撤去・実施設計	15,000
	平成30		基盤整備（造成・排水）	76,708
	令和元		政庁南入路復元・大路関連遺構表示	151,919
第10次5ヵ年計画	令和2	政庁南面地区	床張建物表示、建物構造復元	211,770
	令和3		床張建物表示、土間建物表示、掘立柱塀表示	
	令和4		土間建物表示、掘立柱塀表示、便益施設	
	令和5		説明板、便益施設、仮立	
	令和6	作貫地区	道構露出展示再整備、便益施設、緑化修景	

宮城県による整備面積（令和２年度末）	
多賀城跡	**168,964 ㎡**
政庁地区	18,725 ㎡
八月原地区	9,335 ㎡
南辺東地区	18,462 ㎡
南門地区・南辺西地区	13,824 ㎡
作貫地区・東辺地区	27,934 ㎡
北辺地区	33,947 ㎡
東門・大畑地区	25,299 ㎡
政庁南面地区	21,438 ㎡
柏木遺跡	**3,759 ㎡**

整備事業費総計	**1,222,688 千円**

3）多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積（㎡）	経費（千円）
第一次五ヵ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第二次五ヵ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第三次五ヵ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦原窯跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 関連窯跡調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の把握	1,200	7,000
第四次五ヵ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野窯跡	地形図作成・発掘調査	多賀城跡建屋窯跡調査	600	14,000
第五次五ヵ年計画	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第六次五ヵ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第七次五ヵ年計画	平成16	木戸窯跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	木戸窯跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸窯跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	3,520
		日の出山窯跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
	平成20	日の出山窯跡群	第1次発掘調査	F地点南側の調査	490	3,168
第八次五ヵ年計画	平成21	日の出山窯跡群	第1次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山窯跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成23	大吉山瓦窯跡群	東日本大震災により中止		0	0
	平成24	大吉山瓦窯跡群	休止		0	0
	平成25	大吉山瓦窯跡群	休止		0	0

4）研究成果等刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報1969』	（第5・6次調査）	昭和45年3月
『年報1970』	（第8・9・10・11次調査）	昭和46年3月
『年報1971』	（第12・13・14次調査）	昭和47年3月
『年報1972』	（第15・16・17・18次調査）	昭和48年3月
『年報1973』	（第19・20・21・22次調査）	昭和49年3月
『年報1974』	（第23・24次調査）	昭和50年3月
『年報1975』	（第25・26・27次調査、東外郭南面築地）	昭和51年3月
『年報1976』	（第28・29次調査）	昭和52年3月
『年報1977』	（第30・31次調査）	昭和53年3月
『年報1978』	（第32・33次調査、環境整備）	昭和54年3月
『年報1979』	（第34・35次調査、環境整備）	昭和55年3月
『年報1980』	（第36・37次調査）	昭和56年3月
『年報1981』	（第38・39・40次調査）	昭和57年3月
『年報1982』	（第41・42次調査）	昭和58年3月
『年報1983』	（第43・44次調査）	昭和59年3月
『年報1984』	（第45・46・47次調査、環境整備）	昭和60年3月
『年報1985』	（第46・48・49次調査）	昭和61年3月
『年報1986』	（第49・50・51次調査）	昭和62年3月
『年報1987』	（第50・52・53次調査）	昭和63年3月
『年報1988』	（第54・55次調査）	平成 元年3月
『年報1989』	（第56・57次調査）	平成 2年3月
『年報1990』	（第58・59次調査）	平成 3年3月
『年報1991』	（第60・61次調査）	平成 4年3月
『年報1992』	（第62・63次調査）	平成 5年3月
『年報1993』	（第64次調査）	平成 6年3月
『年報1994』	（第65次調査、環境整備）	平成 7年3月
『年報1995』	（第66次調査）	平成 8年3月
『年報1996』	（第67次調査）	平成 9年3月
『年報1997』	（第68次調査、多賀城碑覆屋解体修理）	平成10年3月
『年報1998』	（第69次調査）	平成11年3月
『年報1999』	（第70次調査）	平成12年3月
『年報2000』	（第71次調査）	平成13年3月
『年報2001』	（第72次調査、環境整備）	平成14年3月
『年報2002』	（第73次調査）	平成15年3月
『年報2003』	（第74・75次調査）	平成16年3月
『年報2004』	（第76次調査）	平成17年3月
『年報2005』	（第77次調査、環境整備）	平成18年3月
『年報2006』	（第78次調査）	平成19年3月
『年報2007』	（第79次調査）	平成20年3月
『年報2008』	（第80次調査）	平成21年3月
『年報2009』	（第81次調査）	平成22年3月
『年報2010』	（第82次調査、環境整備）	平成23年3月
『年報2011』	（第83次調査）	平成24年3月
『年報2012』	（第84・85次調査）	平成25年3月
『年報2013』	（第86次調査）	平成26年3月
『年報2014』	（第87次調査）	平成27年3月
『年報2015』	（第88・89次調査、環境整備）	平成28年3月
『年報2016』	（第90次調査）	平成29年3月
『年報2017』	（第91次調査）	平成30年3月
『年報2018』	（第92次調査）	平成31年3月
『年報2019』	（第93次調査）	令和 2年6月
『年報2020』	（第94次調査）	令和 3年3月

②多賀城関連遺跡調査報告書

『桃生城跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第1冊	昭和50年3月
『桃生城跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第2冊	昭和51年3月
『伊治城跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第3冊	昭和53年3月
『伊治城跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第4冊	昭和54年3月
『伊治城跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡調査報告書第5冊	昭和55年3月
『名生館遺跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第6冊	昭和56年3月
『名生館遺跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第7冊	昭和57年3月
『名生館遺跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡調査報告書第8冊	昭和58年3月
『名生館遺跡Ⅳ』	多賀城関連遺跡調査報告書第9冊	昭和59年3月
『名生館遺跡Ⅴ』	多賀城関連遺跡調査報告書第10冊	昭和60年3月
『名生館遺跡Ⅵ』	多賀城関連遺跡調査報告書第11冊	昭和61年3月
『山王遺跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第12冊	昭和62年3月
『山王遺跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第13冊	昭和63年3月
『山王遺跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡調査報告書第14冊	平成 元年3月
『山王遺跡Ⅳ』	多賀城関連遺跡調査報告書第15冊	平成 2年3月
『山王遺跡Ⅴ』	多賀城関連遺跡調査報告書第16冊	平成 3年3月
『山王遺跡Ⅵ』	多賀城関連遺跡調査報告書第17冊	平成 4年3月
『山王遺跡Ⅶ』	多賀城関連遺跡調査報告書第18冊	平成 5年3月
『下伊場野遺跡』	多賀城関連遺跡調査報告書第19冊	平成 6年3月
『桃生城跡Ⅲ』	多賀城関連遺跡調査報告書第20冊	平成 7年3月
『桃生城跡Ⅳ』	多賀城関連遺跡調査報告書第21冊	平成 8年3月
『桃生城跡Ⅴ』	多賀城関連遺跡調査報告書第22冊	平成 9年3月
『桃生城跡Ⅵ』	多賀城関連遺跡調査報告書第23冊	平成10年3月
『桃生城跡Ⅶ』	多賀城関連遺跡調査報告書第24冊	平成11年3月
『桃生城跡Ⅷ』	多賀城関連遺跡調査報告書第25冊	平成12年3月
『桃生城跡Ⅸ』	多賀城関連遺跡調査報告書第26冊	平成13年3月
『桃生城跡Ⅹ』	多賀城関連遺跡調査報告書第27冊	平成14年3月
『亀岡遺跡Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第28冊	平成15年3月
『亀岡遺跡Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第29冊	平成16年3月
『木戸窯跡群Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第30冊	平成17年3月
『木戸窯跡群Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第31冊	平成18年3月
『木戸窯跡群Ⅲ』	多賀城関連遺跡調査報告書第32冊	平成19年3月
『六月坂遺跡ほか』	多賀城関連遺跡調査報告書第33冊	平成20年3月
『日の出山窯跡群Ⅰ』	多賀城関連遺跡調査報告書第34冊	平成21年3月
『日の出山窯跡群Ⅱ』	多賀城関連遺跡調査報告書第35冊	平成22年3月
『日の出山窯跡群Ⅲ』	多賀城関連遺跡調査報告書第36冊	平成23年3月

③研究紀要

『研究紀要Ⅰ』		昭和49年3月
『研究紀要Ⅱ』		昭和50年3月
『研究紀要Ⅲ』		昭和51年3月
『研究紀要Ⅳ』		昭和52年3月
『研究紀要Ⅴ』		昭和53年3月
『研究紀要Ⅵ』		昭和54年3月
『研究紀要Ⅶ』		昭和55年3月

④総括調査報告書・資料集

『多賀城跡 政庁跡 図録編』		昭和55年3月
『多賀城跡 政庁跡 本文編』		昭和57年3月
『多賀城跡 政庁跡 補遺編』		平成22年3月
『多賀城跡 外郭跡Ⅰ －南門地区－』		平成29年3月
『多賀城跡 政庁南面地区－城前官衙遺構・遺物編－』		平成30年3月
『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ－城前官衙総括編－』		平成31年3月
『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ－政庁南大路・南北大路－』		令和 3年3月
『多賀城漆紙文書』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ		昭和54年3月
『多賀城跡木簡Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ		平成23年3月
『多賀城跡木簡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ		平成25年3月
『多賀城跡木簡Ⅲ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅳ		平成26年3月
『多賀城施釉陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ		令和 2年3月
『多賀城と古代日本』		昭和50年3月
『多賀城と古代東北』		昭和60年3月
『多賀城跡－発掘のあゆみ－』		平成15年3月
『多賀城跡－発掘のあゆみ2010－』		平成22年9月
『多賀城跡－発掘のあゆみ2020－』		令和 2年3月

⑤整備基本計画など

『特別史跡多賀城跡整備基本計画』	平成28年3月
『多賀城跡調査研究所の歩史』	令和 2年3月
『特別史跡多賀城跡附寺跡保化整備基本方針』	令和 3年3月

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みやぎけんたがじょうあとちょうさけんきゅうしょねんぽう２０２０　たがじょうあと
書　　名	宮城県多賀城跡調査研究所年報　２０２０　多賀城跡
副 書 名	多賀城跡－第94次調査－
巻　　次	宮城県多賀城跡調査研究所年報　２０２０
シリーズ 名	宮城県多賀城跡調査研究所年報
シリーズ番号	２０２０
編 著 者 名	白崎恵介・村上裕次・初鹿野博之・高橋　透
編 集 機 関	宮城県多賀城跡調査研究所
所　在　地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎１丁目22-1　TEL　022-368-0102　FAX　022-368-0104
発 行 年 月 日	20210326

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
特別史跡 多賀城跡（たがじょうあと） 附 寺 跡（つけたりてらあと）	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ　うさぎしま 市川・浮島	04209	004	38 ° 18 ′ 24 ″ 世界測地系準拠 （ＧＲＳ８０）	140 ° 59 ′ 18 ″	2020年 5月21日 ～ 2020年 11月13日	600㎡	調査計画に基づく学術調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	国府・城柵	奈良平安	掘立柱建物 柱列 竪穴建物 土坑 井戸 溝	土師器・須恵器・須恵系土器・製塩土器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁、近世陶磁器、軒丸・軒平瓦・丸・平瓦、硯、転用砥、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、石器	

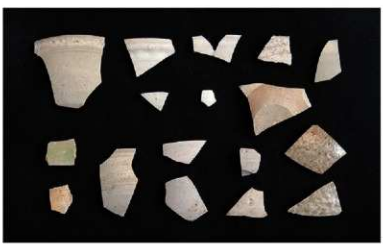
要　　約

第94次調査では政庁地区北方を対象として、丘陵尾根部分を中心に遺構分布や構成を確認すること、加えて、沢の範囲など旧地形を把握し、地形と遺構分布との関連性を確認することを目的とした。

調査の結果、以下の成果を得た。

①丘陵尾根付近のＡ区では、掘立柱建物、柱列、竪穴建物、土坑、井戸、溝、自然流路を検出した。このうち古代と考えられる遺構には、掘立柱建物２棟、柱列１条、竪穴建物１棟、土坑４基、溝１条がある。丘陵尾根で検出した２棟の掘立柱建物は、一部の検出ではあるものの、掘方・柱痕跡・柱間の規模が大きく、大型の建物の可能性がある。また、土坑からは、主に10～11世紀代の土師器・須恵系土器を中心とした遺物が多数出土している。

②沢の北側斜面にあたるＢ区では、複数の遺構面が確認され、竪穴建物、柱穴群、溝、小溝群、整地層を検出した。これらは出土遺物から、沢の南側と同様に政庁第Ⅲ期以降と考えられる。また、沢の堆積層からは、硯・製塩土器や11世紀後半～12世紀前半の白磁が出土している。



第 94 次調査出土施釉陶磁器

宮城県多賀城跡調査研究所年報　2020
多　賀　城　跡

令和３年３月 26 日発行

発行者　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目 22－1
ＴＥＬ（022）368－0102
ＦＡＸ（022）368－0104
印刷所　株式会社　ソノベ